

学長賞

「郷愁」

阿部 雅之

附属図書館長賞

「島千鈴なる画人の話(落丁あり)」

村上 健将

「どうぞこの手を取ってください」

吉野 美羽

「Sun Girl noNcolor Table Campus」

中村 昌稀

第18回熊本大学

東光原文学賞作品集



2026年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

第十八回 熊本大学東光原文学賞作品集

第十八回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

学長のことば

熊本大学長 小川久雄 / 4

発刊のことば

館長のことば

熊本大学附属図書館長 高野博嘉 / 6

一つの小説を完成させること

学長賞

郷愁

阿部雅之 / 9

(法学部法学科四年)

附属図書館長賞

島千鈴なる画人の話（落丁あり）

村上 健将 / 26

（文学部文学科四年）

附属図書館長賞

どうぞこの手を取ってください

吉野 美羽 / 62

（文学部文学科四年）

附属図書館長賞

Sun Girl noNcolor Table Campus—

中村 昌稀 / 109

（自然科学教育部修士二年）

選考を終えて

濱田 明 「東光原文学賞総評」 / 166

日高 愛子 「語りが生み出す世界」 / 171

農 孝生 「小説の肌触り」 / 175

発刊のことば

熊本大学長 小川久雄

熊本大学東光原文学賞は、平成二十（二〇〇八）年に創設し、令和七年度で第十八回目の開催となりました。十八年にわたり熊大生の読書への関心を高め、創作という能動的な知的活動の機会を提供してきました。

創設から十八年が経過すると時代や環境も変わり、表現の形が多様化する中であっても、「一篇の小説が人に感動をもたらし、人の心を動かす」という本質は揺らいでいないと考えます。

創作活動は、大きく二つのステップに分かれると考えます。第一は自ら学び作り出すステップ、第二は作り出した作品を応募や公表することにより世に出すステップです。アイデアを具現化し、推敲を重ね、作品として仕上げて世に送り出す。いずれも大きな労力がかかることですが、それ乗り越えてこの場にいらっしやることは、大変素晴らしいことです。

表彰式において、学生の皆さんと直接ふれあえる機会を設けることができ、嬉しく思います。学長賞及び附属図書館長賞を受賞される四名をはじめとして、惜しくも受賞とならなかった

応募者の方や、応募には至らなかったものの創作活動に勤しまれた方など、この経験は、今後の大きな飛躍への糧になるものと信じ、さらなる活躍を期待しております。

最後に、第十八回熊本大学東光文学賞に係わられたすべての方々へ謝意を申し上げます。また、本書を手にとってくださった皆様が熊大生の文学に触れ、創作に、読書に親しみを持ってくださいることを祈念して、発刊のことばとさせていただきます。

一つの小説を完成させること

附属図書館長 高野博嘉

熊本大学東光原文学賞は、「熊大生の読書への関心を高め、創作という能動的な知的活動の機会を提供すること」を目的に掲げ、平成二十年に始まりました。現在の附属図書館中央館、ひご未来図書館の敷地一帯は、熊本大学の前身である旧制第五高等学校時代に「東光原（とうこうげん）」と称する運動場であったことが、この文学賞の名前の由来です。熊大では、夏目漱石に加えて、今期の朝ドラ、ばけばけの主人公のモデルであるラフカディオ・ハーンも教鞭を取ったことがあります。

今年度は、六月下旬に募集を開始し、十一月六日の締切日までに、十四篇が集まりました。学部等の内訳は、文学部七篇、教育学部一篇、法学部一篇、理学部一篇、医学部一篇、薬学部一篇、自然科学教育部二篇となりました。応募数は、昨年度の二十編よりは減りましたが、その分力作が多いことを期待しつつ附属図書館内で第一次選考を行い、八篇が通過しました。これら八篇を、選考委員である、大学院人文社会科学研究部の濱田明先生と日高愛子先生、および熊本日日新聞

社論説委員会副委員長の農孝生先生の三名にお送りし、作者を伏せて、選考委員会までに読んでいただきました。選考委員会は、十二月二十三日に附属図書館内にて行いました。私も附属図書館長として陪席し、選考委員の皆さんが様々な観点から意見を戦わせる場を見守りました。全ての募集作についての熱い議論があり、最終的に学長賞一篇、附属図書館長三篇が選出されました。受賞された方々は、誠におめでとうございます。また、「どうぞこの手を取ってください」の吉野美羽さんは、一昨年の「ロストティーン」、昨年の「食べる」に続く、三年連続受賞となりました。これも素晴らしいことと思います。

応募した皆さんは、受賞する・しない、に拘らず、一つの小説を完成させ得たことを誇って良いと思います。それは誰かに強要されたものではなく、自らの心の中から出てきた衝動によるものだと思います。アイディアを捻り出し、文章を紡ぎ、それを推敲して、完成させることが出来るのです。そこには、苦しみもあったかもしれせんが、熱中があったものと思います。作家の村上春樹さんは、「小澤征爾さんと、音楽について話をする」という本の中で、仕事について次のような文章を書いています。『その作業に時間を忘れて心から打ち込めること、そういうこと自体が何ものにも換えがたいの貴重な報奨となっている』と。今回は受賞には至らなかったという皆さんも、既に報奨を受け取っているのです。

たまたまこの作品集を手にとって、この文章を読んでいる方もいるかと思いますが。選考委員の先生方による受賞作の講評は巻末にあります。まずは先入観なしに、タイトルだけで「良いな」

と思う作品を読んでみてください。荒削りなところもあるかもしれませんが、作品集の作者と年代の方であれば、自分の中で何かが動くかもしれません。

東光原文学賞は熊本大学附属図書館の活動の大きな柱の一つです。附属図書館長として、文学賞を支えていただいた方々に感謝するとともに、受賞者の皆さんだけでなく、小説を完成させて応募した全ての学生さんの今後の大きな成長を期待しています。



上段：農・濱田・水元・日高
下段：小川・吉野・阿部・村上・中村・高野

郷愁

阿部 雅之

一

昼間の光がカーテンから漏れ、部屋を薄明るく照らしている。ピクトルは横になったまま起き上がれないでいた。ピクトル、栗毛にそばかす、音楽大学に通う愛らしい青年。彼は故郷から遠く離れたこの街で音楽を学んでいた。彼のピアノは、早熟にして哀愁を漂わせ、シューマンの《子供の情景》を弾かせたら、それは、天使に心を洗われるかのようにだった。早熟の青年は人生の秘密を知っているように思われた。しかし、今の彼はもはやピアノを弾くことができなかった。人生に対する何もかもに情熱を向けることができなくなった。そしてその理由を彼は知ることができなかった。結局のところ、終始ぼんやりと起きることもなく寝ることもできずに、ただ自室の天井を眺めるしかなかった。実際、彼は人生に絶望していた。ほんの少しの希望を願いながら、光を求めるように、彼は時々、窓辺についた滴に視線を移した。そうして、故郷の山々、その下に流れる透き通った水晶のような川を思い浮かべていた。その中にある母なる優しさを求めていた。

最初は教会の音楽会だった。幼いピクトルは、母に連れられて行った教会のコンサートで、十字架の下に喜びと悲しみを、この世界の調和を奏でる楽器に心を奪われた。教会の高い天井を越えて空とふるさとの大地を感じた。そして自分も弾いてみたいと思うようになった。少年は母に目を輝かせて頼んだ。母はきっと願いは叶うわと言った。そのうち実際に習うようになると、彼は誰よりも生き生きと弾いた。彼は太陽の下に輝く故郷の山々や野原を思った。そうすると、それらは美しい音となって彼に語りかけた。それだけで彼は満足だった。

都会にやってきてはじめての頃は、街にいる新流行の芸術家を知って、驚嘆もし喜びもした。音楽に至っては正確無比な演奏に負けじと腕を磨いた。しかし、彼らは口達者に色彩の和音だとか音楽的な線だとかいうようなことをわかりきった様に話した。どれほど多くの演奏を聴いても、どれほど多くの演奏家に出会っても真に魂のこもった美しいものを捉えることができなかった。

追い求める青年は、次第に一人になることが多くなっていった。本当の演奏はこの様なものではない。自分にはそれができるのだ、と人との交わりを断つようになった。決して名声を求めたわけではなかった。彼は本当の演奏とは、形式的な技術、機械的な練習の先にあるとは思えなかったのである。しかし、そう簡単に体現できるわけでもなかった。完璧を求めれば求めるほど現実と乖離していった。かつての美少年は今では肉の落ちた痩せ細った姿になっていた。

心が沈んでいる、その様な時こそ、ピクトルは、ユキのことを思った。ユキの凛々しい顔立ちと優しい微笑みを思い浮かべた。

二人はともに青春の時間を過ごした。彼の青春のそばには彼女がいた。多くの青年がそうであ

るように、ピクトルもまた恋をした。ピクトルはたちまち彼女を好きになった。朝のあいさつを交わしたとき、彼の心の中に恋の芽が生まれた。彼が話しかけると、彼女は目を細めて愛らしく笑った。彼のあいさつに応えた彼女の声は、まるで歌鳥の声のように耳に快く響いた。彼女は見れば見るほど、ますます美しく見えた。

ピクトルは、彼女の外見よりも、その中に魂を見た。彼が今まで出会った人の中で、一番美しい魂をしていると思われた。それこそが彼を最も惹きつけた。彼女のような人がいることが、何よりの支えだった。少女もまた、彼の誠実さに惹かれて彼のことを誰よりも信頼していた。二人は、遠い未来を語り合うことはなかった。けれども、互いの沈黙の中に、誰にも言えぬ約束があった。大切な約束は言葉では交わさない。彼はそう信じていたのである。

そうして、彼女はピクトルにとって、崇拜する女神、心の拠り所だった。彼女を思い出すと、不思議と心が安らいだ。そしてもう一度頑張ってみようという気がするのである。

二

今もまた、ピクトルは天井を見つめながら、時折ユキのことを思い出し、とりとめもなく物思いに耽っていた。時計の針がカチリと音を立てた。誰かがドアをノックしているような気がした。耳を澄ました。ノックの音は優しく、かつ正確に鳴り響いた。繊細な彼の心を撫でるかのようだった。その音色は安心に足ることをそっと伝えた。

「どうぞお入りください……」

ゆっくりと体を起こし、カーディガンを手に取り、扉を開けた。目の前には老人が一人立っていた。明るいとビの目、白髪の小男で、品のよい外套、ふさのついた帽子。その顔を彼は知っていた、たしかにずっと前から知っていた。彼は久しくこの老人の名前を忘れていた。しかし、口元に刻まれたしわの見せる優しい微笑みは、彼に懐かしさを思い起こさせた。青年はビンスワルゲンさんと呼ばれていた老人がいたことを思い出した。

一人で家にいることが多かった彼にとって、子供の頃、一番楽しい思いをするのは、ビンスワルゲンさんの小さな家へ遊びに行くときであった。そこは暗くて、黒い暖炉の穴に赤い炎が燃えているだけだった。小さい老人は子供をそばに引き寄せ、一緒に静かな炎を見ながら、長い話を語って聞かせたのだった。

目の前にいる老人は馴染み深い声で「こんにちは、ピクトル、ごきげんはどうかね？」と言った。

不意を打たれた青年は、驚きと、今の自分に恥じて言った。

「ビンスワルゲンさん、お久しぶりです……でも、今の僕は……」

「わかっている」と老人は落ち着いて答えた。

「君は君自身に問題を抱えている」

彼が老人にお茶を用意しようとする、老人は一步、前に踏み出した。

「いいんだ、ピクトル。ところでこちらに座っていいかね？」

青年が頷くと、老人はそと椅子に腰を下ろした。

「君にサイプレスぶどう酒でもと思ったが、あいにく今日は持ち合わせがない。ただ、きみのために、できることはしてあげたい。ピクトル、きみはこの所、色々なことを考え、思い、願ったことであろう。そこで、きみが心から願うことを思ってみなさい。おまじないか何かだと、老人の迷い言だと思って聞いてほしい。いいかい、ピクトル。今晩夜十二時になったら、日付が変わる頃になったら、一つだけ願いを思い浮かべてごらん。そうしたら、きっとそれが叶えられるように、私が骨を折ってあげよう。」

老人はこう言って、邪魔したねと言いながら、彼の部屋を後にした。誰もいなくなり静かになった部屋を見ると、彼は予期せぬ客人が本当にここにいたのかよくわからなくなった。懐かしい来客があることは彼も嬉しく思っていたが、体はどっと疲れたような気がした。彼は再び横になり、気がつくまで眠っていた。

目を覚ますと、太陽は沈み、窓の外には街灯がつき始めていた。起き上がり、軽食を済ませた後、外の空気を吸った。少し気分が良くなった気がした。彼は老人の言葉を思い出し、自分は何を願っていたのだと考えていた。才能や地位、名誉などは彼にとって俗世間のものだった。彼が欲しいのは純粋な気持ちだった。世の中を憂う青年はユキのことを思う時だけ純粋になれた気がした。できるならば彼女と会って話したいと思った。しかし、今彼女がどこにいるかはわからないし、彼女に会えたとしても失望させるかもしれない。そう思うと、会わない方がよいかもしれないとも思った。彼はすっかり自信をなくしていた。

無造作に並べられたグラスの中から一つを取り出し、ジンを注いだ。不安な気持ちと和らいだ気がした。段々と眠たくなり、横になった。時計は十二時を指していた。寝言のように「ユキに会いたい……」と言いながら眠りについた。

三

その夜、ピクトルは、見知らぬ舟に乗っている夢を見た。彼は街道を歩いていくと、水路に出くわした。柳の木が寂しそうに揺れた。そのそばに小舟が浮かんでいた。舟の中には男が腰掛けていた。まるで彼を待っているように、手招きをして彼を乗せた。月が上り、晩鐘の鳴る頃に舟は漕ぎ出された。ピクトルは、黒ずんだ街の家々を兩岸に見つつ下っていった。どこへいくのかと彼が尋ねると、渡し守は顔をあげて、「もうすぐ着きます……」とだけ言って、影の濃い灰色の目で彼を見た。そのまま舟は、ギイコ、ギイコと揺れながら、進んだ。しばらくすると、橋の付近に差し掛かった。そして、そのまま橋の下をくぐったかと思うと、橋の影に吸い込まれるように、なかなか進まない。心配そうに彼は男を見ると、男は「もう着きました」と言った。舟は大きな洞窟の中のようなひんやりとした空間にいた。水面は波紋を描きながらわずかな光を映していた。

気がつくと周りには彼以外にも人がいるらしかった。彼がぼうっと立っている間にも、一人また一人、彼と同じように舟から降りてきた。皆は中央に向かって黙々と進み続けた。中央には何

かがあるようだった。彼は目を凝らして奥を見た。遠くの暗闇の中に浮かび上がるのは、この薄暗い空間におよそ相応しくないほど明瞭な青色の炎だった。その炎の波は形を変えらたび消えては浮かびながら音をたてずに揺れていた。皆はこれを静かに見つめていた。ある者はその場に立ち尽くし、ある者は座り込み、一点をじっと見つめていた。それはまるで美術館で大きな展示作品を眺めているようでもあったが、不思議な寂しさが全体を包んでいた。

ピクトルもこの不思議な光景に溶け込んで、炎の先端が揺らいでいるのを見つめていた。すると、おぼろげに何かが浮かび上がってくる様子が見えた。それはユキの姿だった。彼女は炎の向こう側におり、記憶よりも大人びて見えた。友人と談笑していると思えば、公園でピクニックをしている。それはまるで映画のようで、走馬灯のように幾つもの場面が交ざり合いながら次々に変わっていった。そこには彼女の記憶の断片が映っているらしかった。ピクトルは嬉しかった。ただ彼女がそうしているだけで嬉しかった。彼はじっと炎の先を見つめ続けた。一見すると彼女は幸せな生活を送っているように見えた。しかし、次第に彼女はうつむき、塞ぎ込んでいった。ピクトルは彼女がたどってきた生活を、彼女の心を見た気がした。そして、最後に遠くから聞こえてくるのは、あの聞き慣れた優しい声だった。

「ねえ、あなた、そんなことないわ……。すごく幸せなの……」

ユキは見知らぬ男の腕の中に抱かれていた。媚びる様な声をささやきながら。男はどこか浅かな笑みを浮かべていた。

ふと彼女は何かに気がついたように彼の方を振り返ったが、逃げるように目を伏せた。

ピクトルは魂が抜かれたかのようにその場に立ち尽くした。そばにいた渡し守は何かを言っているようだったが、彼には聞こえなかった。

四

ピクトルは目を覚ました。部屋の中は夢に見た洞窟のようにひんやりとしていた。窓の外を覗くと、まだ日は昇らず、街は深い闇に包まれていた。遠くから、カタン、カタンと舟を漕ぐ音のようなものが聞こえた気がした。

今、ピクトルの心はいくつにも引き裂かれたかのようにだった。彼の魂には、彼女の不幸がそのまま入り込み、彼を内側から蝕んだ。魂は、脆く崩れ落ちていった。静かな悲しみが彼を訪れた。彼は悲しみの中に沈んでいった。

それだけではない。彼女が自分ではない他の誰かを愛し、抱かれている——その事実を受け入れることができなかった。自分だけを愛して欲しいという願望が彼の心にもあった。一方で、自分を愛さなくとも彼女が幸せならばそれでよいという気持ちもあった。そうであるならば、彼女がどのような人を愛そうが祝福すべきことである。しかし、どうしても納得ができなかった。彼女は道を誤っているに違いなかった。女性はたいして知らぬ男にこそ心の底をさらけ出すのかもしれない——と無理に自分を納得させようとした。彼女を非難する声から湧いてきた。彼は彼女を信頼できなくなっていることに気づいた。彼女を女神として信仰していた彼は、その絶対

的な支柱を失いつつあったのである。

ただでさえ窮地にいた彼にこの打撃は深刻だった。精神的な不調はすぐに体に現れた。食事をとろうとしても、喉に通らなかった。いくら食べたくても体が受け付けなかった。その日はかろうじてスープを飲んだ。普通ならば、傷心した人間は積極的に動くことはない。しかし、彼のとった行動は逆であった。不思議に思われるかもしれないが、彼は家に籠るよりむしろ、外出した。普段よりも手際よく身支度をした。玄関を開けると身を切るように冷たい風が額を打った。しかし、寒さなど関係ないかのように、大地は白い苦しみで覆われているのにもかかわらず、どんどんと彼は歩き始めた。

街中はもうすぐクリスマスということで、赤や緑に色取られ、賑やかな雰囲気であった。道端では金管や木管が軽快に演奏していた。木々を過ぎ、小さな教会の前を通りかかると、クリスマスマーケットが開かれていた。女性たちは外に並べられた机で木工細工をしながら商品を作り販売し、子供達は母親のそばで編み物をしている。日曜日の午後のように平和な空間だった。毛糸が筒状に編まれたら、母親はそれを手際よく半分に切られた糸巻きに通したり、被せたりした。糸巻きの丸い先端は頭になり、その下は見事に体になった。そうしてニット帽を頭に被り、セーターをきた愛らしい少年や少女の人形が出来上がった。知らぬ間に彼はこの人形に夢中だった。少年と少女の人形は二体並んで机の上に並べられた。素朴な人形だったが魅力的に映った。彼が失ったものがその人形にはあるような気がした。

数週間ののち、ピクトルは故郷へ帰ることとなった。母が体調を崩し入院したと知らせが届いたのだ。手紙には、大事ではないが顔を見せに来てほしいと細々とした文字で書かれていた。封筒の中には旅費が同封されていた。

それは、長らく故郷に帰ることのなかった彼にとって、数年ぶりの帰郷になった。彼は帰ることを拒んでいたわけではない。郷愁の念は日に日に強まるばかりであった。ただ、みじめになった自分を思うと、期待を裏切るような気がして、どうしても一歩が踏み出せなかった。そのような彼にとって帰らなければならない理由があることは行動に移す大きなきっかけだったのである。ピクトルはしばらく滞在できる分だけの荷物を革のトランクに詰め込み、部屋を後にした。そして母のことを案じつつも前進できたことを嘔み締めながら駅へと向かった。

あたりは暗くなり始めており、駅には寝台列車が暗がりの構内で灯りを放ちながら彼を待っていた。客室に入ると、彼は大きく伸びをして荷物を棚に乗せた。座席にもたれて、赤茶色のテーブルの上のランプをつけた。いくらかかすると、笛が鳴り列車はゆっくりと動き出した。窓に映る自分の顔を見つめ、ふるさとの景色を想像しながらゆっくりと目を閉じた。

揺られること長く、到着したのは、翌日の夜遅くだった。ちょうどその日は新月で、星がよく見えた。オリオン座が南の空に高く輝いていた。近くの宿に一晚泊まった後、ピクトルは母のいる病院へ向かった。

母は案外前に会ったときと大して変わっていないように見えた。母は全てを知っているかのようによくを尋ねなかった。静かな時間が流れた。母は息子の顔を見て安心したように微笑んだ。医師に病状を尋ねると、「悪くはないが、回復には時間がかかる」と伝えられた。ピクトルは「また明日来るね」と眠りつつある母に告げ、生まれ育った家へと向かった。

帰郷した青年は、ふるさとの光と息吹と、物音とにおいを味わいながら、心を満たしていった。懐かしい小道や小さい芝生に囲まれた教会の菩提樹を、そのそばを流れる小川のせせらぎを忘れていなかった。

太陽は昔と変わらずに輝いていた。庭の青々とした緑が、蝶たちが羽を休める場所が、長い旅路を終えた彼をそっと迎え入れた。ピクトルの部屋は日当たりがよく、ベッドと小さな机が綺麗に整えられていた。下ろされたブラインドの隙間から差し込む光が、二つの黄金のはしごを床に映し出していた。床の軋む音、窓から差し込む日差し、すべてが彼を懐かしくさせた。質素であっても我が家ほど勝るものはなかった。人生を見失った青年は、悲しみの淵で後ろから優しく抱きしめられているような気がした。

机の上には、郵便物がいくつか置いてあった。その多くは卒業した学校からの案内だったり、取り立てて大した物ではなかった。しかし、一通の封筒が彼の目を奪った。彼は恐る恐る開けてみた。

親愛なるピクトル

突然の手紙をお許してください。少し前に、あなたが急に現れたような気がしたときがあって、きっとそれは夢に違いないのですが、ペンを取らずにはいられなくなったのです。

こうして、手紙の上ですが、お話しするのは、わたしたちが学校を卒業して以来ですね。卒業した後、あなたが街に行ったように、わたしもこの町を離れて、新しい生活を始めました。

しかし、この数年の間、私は病的な傾向を多く得ました。

都会での生活は合わなかったのでしょうか。いいえ、それらはもともと私の中にあつた問題でした。結局のところ、私は普通からはみ出してしまった人間で、長い間、そのことを意識して苦しんでいました。きっともう、あなたが知っている私ではないのだと思います。あなたにも何度か相談しようと思ったけど、その時の私には心の余裕がなくてできませんでした。このことを伝えてもあなたを失望させるだけかもしれません。しかし、あなたに対しては誠実でありたいのです。

それでも、最近、自分と折り合いを徐々につけられる様になりました。前は、すべての人の考えを受け入れる神様みたいな人になりたいと思っていたけど、今は小さな幸せを一つずつ見つけて大切にしていこうと思う様になりました。

街の役所で仕事を見つけてきたので、しばらくはそこで働こうと思っています。ときおり、あなたと過ごした思い出が懐かしいです。あなたは私にとって、神様みたいな人でした。今はどうしているのでしょうか？ いつか再会できたら、その時にはもっといろんなことがきちんと話せる様になっているんじゃないかと思います。

ユキ

その語り方は、昔のように思慮深く、優しかった。青色のインクに丸い文字で綴られていたこの手紙を、ピクトルは何遍も繰り返し読んだ。

七

ピクトルはどうしたらよいかわからないまま、故郷の周りをあてどなくさまよった。やがて山道にさしかかり、腰を下ろした。今彼は小さい町が谷間にどんなに美しいたたずまいをしているかを見た。青く光る川、赤茶色の屋根の波があった。そばの木々は見守るように揺れながら木漏れ日の影を落とした。

それからもう少し進むと、野原に出た。日当たりの良い野原の片隅に、薄紫色の小さな花が咲いているのを見た。それはスマイレであった。陽の光を浴びながら、小さな花は、会釈するように

花弁を垂らし、彼をあたたく迎えた。花は幸福そうに見えた。その幸福の秘密を知りたくて敬愛なる花に彼は尋ねた。

「幸福はいったいどこにあるのでしょうか」

「あなたもすでにお持ちですよ」 スミレは微笑みながら彼に語りかけた。スミレは自然の中に、調和の中にあつた。スミレはただスミレのように咲いていた。そのことが今の彼には、バラよりも、ユリよりも、美しく思われた。

枯れてゆく花にさえも、善きこと美しきことのすべては、かすかにきらめいて萎れることはないように思えた。

「あの頃までは」彼は繰り返した。「あの頃までは、すべてが調和に満ちていました。喜びも美しく、悲しみも美しいものでした」

ピクトルは気持ちが溢れるように言った。美しきものを目の前にし、彼は無意識のうちに自身自身の過去を振り返っていた。

それでも傾聴する花は静かであった。

「もっとよく聞いてごらん」と無言のまなざしはたずねた。

彼は心の中で耳を澄ました。彼の周りには、過去の記憶の中の人々が現れた。それぞれの声は故郷の山々や川に木霊した。

「もっと！」花はささやいた。

ピクトルはもっと耳を澄ました。彼の心の奥にはユキがいた。体を抱きしめた。彼は震えてい

た。彼女は無言で応えた。悲しみや弱さが静かに溶けて体の中の循環に入ってしまった。

今、彼は大地と繋がっていた。もはや彼の存在の輪郭が薄くなっていた。冷たい空気を吸い込んだ。静かに息をした。

これまで頭の中を覆っていた薄霧がすうっと消えていった。

八

日が暮れたあと、家へ帰っていると、ビンスワルゲンさんの家に懐かしい明かりが灯っていた。ピクトルは親しき隣人の元へ訪れた。やさしい老人は彼を温かく迎え入れた。

「きつと、あなたが私の願いを叶えてくれたのですね」青年は微笑みながら言った。

「そうとも言えるが、しかし、君が成し遂げたことでもあるのだよ。さあ、外は寒いから中へお入り。ゆっくり話そう」老人も彼の表情を見て嬉しそうに言った。

二人は、久しく語り合った。青年は夢に見たことを老人に伝えた。助言者は深く頷いて、「それはきつと現し身、愛する人の魂を見たのだろう。わたしとしては天上のような明るい世界で会ってもらうつもりだったが、そうはいかなかったようだね。辛い経験をさせてしまった」と言った。「いいえ、ビンスワルゲンさん。僕の心に卑しい気持ちがあったからなのです。心の底から愛していると思っても、執着の心、自分が俗世のものとして嫌っていた欲が心の底にあったのです。あの渡し守もそのことに気づいていたのでしょ」

「しかし、君はそれを乗り越えた。それは君自身が克服したのだよ。そのことが何よりも良いのだ。今の君ならもう迷うことはないだろう。何もかもあるべき通りなのだね」

「ええ」と彼はうなずいた。「何もかもあるべき通りです」

老人の声はだんだんかすかになり、ある時は母の声のように、ある時はユキの声のように、穏やかに響いた。子供の時のように美しい音楽が部屋にやさしく幸福に響いた。無数の小さく輝く霊が漂ってきて、喜ばしげに空中で輪をかいた。

気づくとピクトルは自分の部屋のベッドで横になっていた。うっとりしながら眠りについた。彼が翌日老人のことを周りの人に聞くと、ずいぶん前に老人は亡くなったと言われた。

九

それから二週間ほど滞在した後、ピクトルは街へと戻った。彼が来たからか、母はすっかり良くなった。ピクトル自身も以前のようにふっくらと健康的な顔つきになっていた。

ピクトルは大学へ再び通いはじめた。長い間通っていなかったのでいつの間にか落第していたのを知った。

その日は早起きしたので、散歩ついでに大学へ出掛けてみた。新年を迎えた構内には休暇明けの学生らがいくらかいた。構内には古びた赤煉瓦の建物が、木々の奥にひっそりと佇んでいる。かつては使われていた教室が今では記念館という物置になっているらしい。彼は導かれるように、

まるで森に迷った子供が偶然見つけたかのように、建物へ入っていった。冬の黎明に窓は緑色に染まり、室内は湿っぽい木の香りに包まれていた。

廊下の突き当たりの先に一台のピアノがあるのが見えた。重厚感ある板に赤茶色に塗られたニス。しかしそれもはげかかり、木目を顕にしている。装飾が緻密に施されていたことが伺え、在りし日の面影を残していた。彼が知っている限りこの様なピアノは今の時代にはなく、舶来のだいが古いものらしい。試しに一音鳴らしてみた。彼はこの音をすぐ気に入った。静かに椅子に座り、両手を鍵盤に置いた。

もし、あなたが聞いたなら、まるで調律のされていない音だと思われるかもしれない。しかし、その音には、初々しい子供、絶望する青年、背中の曲がった老人、全てがあった。ピクトルは感激した。それぞれのその全てを愛おしく感じた。それぞれは次第に溶け合い、一つになっていった。彼はもうそれらを区別することができなかつた。意識しなくとも鍵盤の上で彼の指は自然と流れ続けた。希望から絶望へ、若さから老いへと変化した。それらはもはや悲しむべきことではなかつた。歓喜の涙の震えの中で、はっとして瞳を上げた。

外に出ると風景が一変して見えた。いつもは全然気にしなかつた木々は、葉を落としながら彼らに向かつてくすくすと微笑んでいる。不思議な老人の懐かしさがした。頭上では雲ひとつない空が、朝日に照らされ一面に赤く染まっていた。朝焼けの空に照らされる雪は、新たな始まりを裏付けるかのように、輝いていた。

島千鈴なる画人の話（落丁あり）

村上 健将

この街には雨が悄々と降る。
敵かに悄々と――悄々と降る。

楠も榎も葉桜も五月雨に濡れ、しな垂れている。霧雨の紗のカーテンに覆われた赤煉瓦の学舎が瓦斯灯のようにぼうっと浮かんでいた。

学舎はすでに廃構である。明治期の面影だけを残して、今は無言の記念碑となっている。しかしその沈黙の内に思慮と風格とを色褪せることなく湛えていた。

もうしばらく歩けば現学舎へと辿り着く。授業が始まる5分前。最も学生が騒がしい時間。飛び交う蝗の羽音のような声である。

大学は今、痴の中心である。

前の席に座る学生には、遙か後方に陣取る学生のために授業資料を運ぶ仕事がある。その仕事を厭って俺は授業に数分遅れることにしていた。納得のいかないことはできない性質たちなのである。「嘘である。墮落した学生がスマホを繰る時間のために自らの時間を割くことが、彼には耐えられなかったのである。つまり感情の問題である」

俺はピタリと足を止めた。雨が降っている。

不用意に足を止めてもズボンの裾を濡らすだけ。しかし、今しがた聞こえた自分のものではない声に反応せずにはいられなかった。

見廻しても声の主はいない。雨が悄々と降っている。俺は雨の中、ぼんやりと旧学舎を見て時間を潰すことにした。無人のはずの建物に影が走ったような気がした。

「君は真面目すぎだね」

そう言って彼女はカツ丼を一口頬張る。

彼女のブリーチのかかりすぎたショートヘアは、食堂の妙に眩しい蛍光灯の灯りで金髪よりも白髪に見えた。食器まで湿って感じるほどの湿気に髪がまとまらず、彼女は時折それをいじった。名前を林という。緑のカーデガンの下に純白のワンピースを着ている。

「あっ」

そして今、純白ではなくなった。

「慌てて食うからだ」

「だってコンテストが近いから」

彼女は濡れたハンカチで、何度もシミを叩く。不機嫌に唇を尖らせた。

「それでなんだっけ。旧学舎の方から声がしたって？」

「女性の声」

「そんなわけない。だって、今はあそこ使われてないし。記念館の方なら見学者がいるかもだけど」

「そっちじゃなくて、小さい旧学舎の方」

「ならやっぱり君の聞き間違いだね。それが幽霊」

「幽霊？」

「君って古臭い宗教画みたいな絵ばっかり描くから、引き寄せたんじゃない？」

彼女は優秀な画家であるから、印象派の絵と宗教画の区別がつかないはずがない。からかって
いるらしい。

「ごちそうさまでした。先に行くね」

「その服で描くのか？ また汚れるぞ」

「準備室でこっそりジャージに着替える。のぞきは——しないか」

無言の相槌で彼女は了承して席を離れた。一人になった食堂には、ネオンの光に似た学生たち

の喧騒だけが響いていた。

林に遅れて部屋へと向かう。その時、再び雨にひっそりと濡れる赤煉瓦の前を通った。

彼女と違って、俺は絵が完成しているから焦ることはない。

「それでも彼が足早に部屋へ行くのは、彼女に気があるからであつた」

「誰だ！」

今度は確かに声が聞こえた。周りには濡れた木々と旧学舎のみ。人はいない。しかし、女の笑い声がする。人を馬鹿にするような、それでいてどこか艶と品のある娼妓のような笑い声である。

「娼妓のような笑い声」というのはあまりいけないと彼は内省した」

「さっきから人のことを勝手に言いやがって」

声は確かに旧学舎の方から聞こえる。近くの草場に投げ捨てるように傘を置き、旧学舎へと入った。錠はない。

中はヒヤリとした暗闇である。

中の煉瓦は煉瓦の幽霊であつた。怨念めいた焦茶色が暗闇から恨めしくこちらを覗いていた。

——幽霊。林の言っていたことを思い出す。しかし恐怖は湧かない。幽霊だろうと浮浪者だろうと懲らしめてやるつもりだ。

「彼は勇み足で声のする方へと歩く。そうして私の元へと辿りついた」

蒼ざめた窓の硝子を雨が鍵盤のように弾いている。ふとシヨパンのソナタ第二番が思い起こされた。

「タイトルを『葬送』という」

女が立っていた。黒い女。この女には輪郭がない。ダヴィンチの絵画のように、輪郭が煙がかって部屋の暗闇と混ざっている。

「しかし、黒い制服の胸元のリボンだけが石竹のごとく赤々と爛れている」
病んだオリビアの香り高い腐臭がする部屋に、その黒い女は佇んでいた。

「ここは関係者以外立ち入り禁止だ」

「彼は強がって言ってみせた」

「その妙な語りをやめろ」

女の黒い瞳がじっとこちらを見る。それから近くにあった古い椅子に腰をかける。
いつの間にか外は嵐になっている。

雨が窓を叩くりズムが一層激しくなっている。奏者の繊細な指が力強く鍵盤の上を走る。

その女は驚くほどに白かった。その黒い眼と長い髪、古い学生制服、そして部屋の暗さが彼女を黒く印象付けたのであって、彼女の肌は死人のそれだった。

「あなたに絵を描いてほしいのです」

女の白い唇が歪んで笑っている。その尋常ならざる笑みで、この女がこの世のものではないとわかった。この女は物の怪である。

「絵を描いたらお前は成仏するのか」

「成仏いたしません」

怪しいと思った。日本にもものあわれなる霊多しといえど、これは違うと直感でわかった。これは人を喰らう鬼である。

「何の絵を描く」

「私の絵を」

描くべきか、否か。

「お前はどのようにしてここにいる」

「ここにしかおられぬのです」

「それはどうして」

「話すと長くなります」

「お前は……」

聞くかどうか迷った。これを聞けば、俺は逃げられなくなる。そういう性分であることを自分が一番わかっていた。それでもやはり聞かないでいるのも無理な性分なのだった。

「お前は困っているのか。俺がお前を描けば助かるのか」

すでに観念していた。俺は賢明ではない。

「ええ、ええ。その通りに御座います。私、困っております。どうか哀れな小娘を助けると思っ
て、一筆お願いいただけませんか」

女はおかしそうにくすくす笑っている。

困っている人を見捨てて行くことは、いかなる理由があっても納得できなかった。

この女もまた俺の心をよくわかっているようだった。

「わかった。描こう」

「有難う」

遠くでくぐもった雷鳴がする。近くで女の嫌に滑舌のいい声がする。

「ではキャンバスを用意いたします」

妙に脚の長い女だと思った。それが脚を組み替えるたびに衣擦れが蛇のように鳴くのである。

そして突然、その女は喪服のようなそのセーラーを脱ぎ捨てて、その白く妖妖とした背中を広
げてみせた。女の白い背中は周りの暗闇を押し退けて幽玄としている。

「私の背中に描いていただきたいのです」

「お前の絵を、お前の背中に描くのか」

「はい。そのように」

なんとという倒錯。邪宗の儀式か、あるいは知死期に至る秘術か。俺はここにきて初めて恐ろし
さが出てきた。

「あっちのものに同情しちゃいかんぞ。連れてかれっぞ。そしたら婆ちゃん、助けちゃれんぞ」
祖母の警告が頭を過ぎった。向日葵の凋れる香りがする。

「絵の具も筆もこちらにあります」

背中を広げて、床に座る女の横には一通りの画材が揃っている。どれも新品に関わらず、少し
微びた匂いがする。

そもそも人の背中に絵なんて描けるものなのだろうか。

「心配いりません。描けますから」

まったく女の言う通りだった。試しに筆をおいてみると、普段のキャンバスと何一つ変わらな
い。それどころか全てが高級な触りである。

「それからお願いがもう一つ」

「あんまり無茶はやめてくれ」

「いいいえ無茶は言いません。少しだけ話を聞いて欲しいのです」

女の白い背中から筆を伝って声の微かな振動がする。肺の位置がわかるようである。

「話というのはお前の身の上話か」

「いいえ、あなたの話です」

そこであの奇妙で不快な語りを思い出す。

「それが必要なのか」

「はい」

「それで成仏するのか」

「ええします」

相変わらず言うような笑い声。

「わかった。勝手にしてくれ」

ここまですれば、ままである。多少集中を削ぐだろうが、構いはしない。

それから「では、はじめます」という女の声とともに、フッと部屋が世界から隔絶されたように外の音が消えた。

「下衆は他者の内にも下衆を見る。

泥水に棲む魚は清水在るを信じざるが故に世も生き物も汚れていると固く信ず。したがって自らの汚れを厭うこと無し。却って自らを清廉と見なすもの甚だ多し。

つまり他者を見下すことは墮落の始まりであるから努め注意せねばならない。これが大学に入ってから1ヶ月を過ごした男の心中である。名を島千鈴といった」

名前は合っている。しかし、そのようなことを考えた記憶はない。女の創作である。しかし考え方自体は妙に腑に落ちる。

「彼には尊敬する者がいた。同じ美術部の林千鈴である。偶然にも名前が彼と同じである彼女は

絵が上手かった。深い洞察と放物線のような閃きが現代アートとして見事に現れていた。そして日夜絵ばかり描いている彼女は大学的墮落とは一線を引いていた。けれど、画家としての功績と整った容姿が相まって学内で彼女を知らない人間はいなかった。

彼には軽蔑する者がいた。同じ美術部の森岡である。林千鈴の噂を聞いて、口実作りに美術部に入った彼はろくに絵を描かなかった。それでも少なくとも頻度で部へやって来て、軽率で放埒な催しに部員を誘うのである。医者の子である彼は親の金でよく豪華な会を開いた。顔の広い森岡の催しには美術部だけでなく多くの学生が集まった。

森岡はもちろん林千鈴も誘った。しかし、彼女がただ断ればいいものを「島くんが行くなら行く」

と断るため森岡は執拗に島を誘った。もちろん墮落を嫌い潔白を愛する彼がそんな乱痴気騒ぎに行くはずがなかった。それでいつも

「お前が来ないから林さんが来ない。みんな会いたがっているのに」

と文句を言われるのである。島は「上手くやるものだ」と感心していた。彼女は島の性格を見抜いていたし、こう言えば非難と交渉の先が島へ向かうと知っていた。

しかし流石にそれで知らんふりもできない彼女が、学生の少ない休日のキャンパスで

「いつも避雷針、ご苦労」

と彼に声をかけた。入学から3ヶ月ほど経った頃のことである。その日から彼女との交流が始まる」

絵はまだまだ完成しそうにない。女の背中に女の絵を描く——それも写真や記憶で遠くから見
たものを描くのではない。今、絵を描いている時に見える女の背を描くのである。試しにキャン
バスで同じことをすればわかる。脳が酷い混乱をきたして、自分が今何を見ているのかさえ蒙昧
になる。自らが絵の中に取り込まれそうな錯覚がした。

「今日はこのぐらいにしましょう」

「次はいつ来る」

「またお呼びします」

この女が呼ぶと言うのだから呼ぶのだろうと思った。それで納得してしまって、女の勧めるま
まに片付けもせず部屋を後にした。

雨は止んでいない。午後の授業で静まり返った大学に静かに雨が降っている。時計を見るとこ
の赤煉瓦の建物に入ってから数分しか経っていない。やはりあそこは人外巢食う魔窟らしい。時
間は機能せず歪み澱んでいる。

足元に打ち捨てられた傘を拾って差す。傘をポツポツと雨が弾いている。

部屋に入ると、森岡と目が合った。湿った木造の部屋と煙雨に景色を遮られた窓。絵を描く林
の隣に、どこからか小さな椅子を持ってきた森岡が座っている。

「待ってました」

「何か用か」

「はい、これ」

森岡は椅子に座ったまま、チラシを手渡すように持っている。森岡の元まで歩いてチラシを受け取ると合宿の案内が書かれていた。

「今度、美術部で合宿するから」

「すまない、この日は予定がある」

「いやごめん、これ部員は強制参加だから」

なら部活を辞める、と喉まで出かかって寸前で止まる。

「こんな話は聞いていない。強制参加なら事前に日程を相談すべきじゃないか」

「いやだって、話し合いの日に島がいなかったから」

金髪のパーマを掻いている。その話し合いの存在すら知らないという話だが、それは相手もわかってはぐらかしている。

「島くんもさ、たまにはこういうの参加しない？　そういう交流とか縁作りって、就活とかでも大事だよ」

3年の先輩女子が言う。森岡と似て派手な格好をしている。K-POPに影響されたような格好である。ちょうど森岡と、この女子で二等辺三角形の辺を作るように立っている。

「島くん、2年生でしょ？　来年からは就活関係で忙しかったりするから今の内に行っておいた

方がいいんじゃない」

「はあ、そうですか」

言い終えた後に、チラリと森岡の方を見て唇の端をわずかに上げる。それを見るに、相談済みだったのだろう。あいつが来るように説得を手伝ってくれと言われたのか、何か物や金で釣られたのか。

“他者を見下すことは墮落の始まりであるから努々注意せねばならない”

別に俺の考えでも銘でもないが、言うことは尤もである。この女子も本当に親切で言っているのかもしれない。

「わかった。参加しよう。しかし、こういう後出しの強制参加なんてやり方は二度とやめてくれ」
実際、2年間も人の誘いを無碍にするのは徳に反する。それにそれが乱痴気騒ぎだろうがサバトだろうが、自分が道を外さなければいいのである。

「おお、本当に参加してくれるのか。みんな、きっと喜ぶ」
それから

「林さんも参加でいいよね」

と確認にもなっていない確認をして、森岡は女と共に部室を後にした。雨音に紛れて、女が自らの手柄をひけらかす声が聞こえた。

「どういふつもり。私、なんか君が嫌がることした？」

去っていった森岡と反対に明らかに不機嫌な林。周りにまだコンテスト用に絵を仕上げる控え

めな部員たちがいるのを憚らず、声は刺々しい。事情を把握している部員たちが緊張しているのがわかる。

「別に嫌がらせて承諾したんじゃない」

「じゃあなんで？ ああいうの参加したがないでしょ。強制参加なんていくらでも断れるじゃん」

声を荒げはしないが、責めているのはわかる。そもそも俺が責められる謂れはないはずだが、無言の同盟を破ったのは確かだ。

「人からの誘いを無碍にするのは道徳に反すると思った」

「それは……そうかもしれないけど」

彼女は呆れたように、それでもどこか納得したように手で顔を押しさえた。

「そういえばそうか。まあ、いいよ。君はそうだよね」

ふと内省が湧いてきた。彼女が俺が行くなら行くと言っている以上、個人で勝手に判断してはいけなかったのかもしれない。悪いことをしたと思った。

「勝手に決めて申し訳ない」

「いやいいよ。そもそも私が君に勝手に乗っかっていただけだし。それでも申し訳ないと思うなら明日昼ご飯奢って」

「……やはり参加すべきではなかっただろうか」

「それは参加してみないとわからないんじゃない」

「たしかに」

彼女も納得した様子で、自分の作品へと戻った。チグハグな色をした魚の絵だった。合宿は一週間後、場所は——旧学舎。そういえば旧学舎の女の話をし損ねた。

「シュラムツフェン」

フランス語の官能的な唇の動き。しかしドイツ語ではないかと思う。シュラムツフェンはドイツの作家エンデの作品に出てくる虫の名前である。騒々しい羽音と下品な笑い声、自由に飽きたシュラムツフェン。彼らは群を成して意味を成さない。

昨日に続いて女の元へと来ていた。驟雨と共に女の声が聞こえ、気がつけば再びここで絵を描いている。雨音に女が囁く。

「シュラムツフェンのようなざわめき声が始業後の教室に鳴り響く。始業の鐘が聞こえなかったのか、あるいは講義よりも重要な話があるのか。彼らは街や食堂で聞く話し声と、講義中や映画館で聞く話し声との不快さの違いを知っているだろうか。あれは脳を直接ほうきで掃かれるような不快感である。

結局、彼らが静まるのは授業開始から10分ほど経ってからだった。島は騒音に耐えるように顔を顰めていた。

「島、この後昼飯食べないか」

「……構わない」

講義の後、珍しく森岡が食事に彼を誘った。彼は森岡のことを軽蔑していたが、ろくに話もしないで人間性を決めつけるのは不正義だと思った。嫌いな人間と向かい合って話すと、意外と悪くないと思えることは多々ある。いい機会だと思った。

「あっ、あそこ見ろよ」

食堂で向かい合って座っていると、森岡が頭を低くして小さく向こうを指さしている。

「どれだ」

「あれだよ、あの胸の大きいニットの」

人間に対して、そういう指し方をするのは嫌だったが、それで誰のことかわかった。わかってしまったことに嫌気が差した。

「あの女、この前、8万でやらせてくれたぞ」

「ああ、そうか」

そうして彼は女から目を逸らして、再びカレーを食べ始めた。森岡は肩透かしをくらったような表情をしている。どうやらウケると思ったらしい。

意外に思うかもしれないが島千鈴という男はそこで森岡を注意したり叱ったりする男ではない。度胸がないのではない。関心がないのである。ここに島千鈴という人間の特異性がある。彼は正

義漢ではない」

気味が悪いと思った。森岡と食事をしたことは一度だけあったし、その会話も覚えている。気味が悪いのはこの女が俺の心情を勝手に語ることである。その時、そんなことを思ったかどうかは記憶が定かでない。しかし、確かに俺が考えそうなことである。女の語りが俺という人間に妙な磁場を発している気がした。どうやら完成を急いだ方が良さそうだ。幸いに作業は順調である。窓から差す鈍い藍色と煉瓦の深い鳶色だけの暗室で、どうして絵が描けるのか。女の白い肌の微光のおかげだろうか。赤桃色の鋭い香りがする。

「島千鈴は正義漢ではない。彼は修行僧であり、敬虔なカトリックである。彼は一種のエゴイストでもある。他人、社会、世界、それらがどれだけ腐敗しようとな彼にはどうでもいいことだった。彼は彼が正しければ、それでいいのである。

故に森岡がどれだけ下卑た発言をしても怒り出すことはなかった。内心で義憤を感じるだけであつた。なぜなら、不正義に怒りを感じなければ正しい人間とは言えないからである。そのことを見抜いている人間がいた。林千鈴である。

「君はそれでいいと思ってるの」

横に並んで外でスケッチをしている時、彼女は彼にそう尋ねた。

「なんの話だ」

「君のパーソナリティの話」

「それが何か問題があるのか」

「ある。はっきり言って、君の在り方はおかしい。偽飾だと私は思うが君はどう思う」

変に畏まった言い方をする。彼女には真面目な話をする時にふざけて誤魔化す癖があった。

「つまり俺が善人ぶっていると」

「そうじゃない。それは偽善だ。君は偽飾だよ」

「要領を得ないからちゃんと説明してほしい」

「いやだからね、つまり……そう、魚だよ。泥水に棲む魚は果たして綺麗でいられるのか」

「それは難しいだろう」

「そう、難しい。でも君はそうしようとしている。あくまで independent であると主張している」

「人間と魚は違う。人間は思考できる。そしてそれを行動にできる。だから環境を越えることができる」

「そいつは疑問だね。三つ疑問だ」

「言ってみろ」

ここまで来ると彼も少し喧嘩腰になっていた。しかしそれは怒りではなく興が乗っているための喧嘩腰だった。そして彼女は三つの疑問を彼に投げかけた。

・不当な社会に対して不干渉であることは不正義ではないのか。

・戦時下のような不正義を強制される環境においてどのように振る舞うつもりか。

・そもそも自身が貫こうとする正義自体がその人物が生きる環境の産物ではないのか。俗悪な社会で産まれた正義は果たして正義であるのか。

「そもそも私は正義なんて嫌いだし、全く信用していない」

「俺もそれは同感だ。だから人は常に何が正しいのか他の社会や時代から学ばなければいけない」
「薄っぺらい答えだ。君は本当の俗悪を知らないんだね。あるいは知らないふりをしている。いいかい、君の正義が問われる日がいつか必ず、それも突然やってくる。考える時間なんて与えられない。君はそこで必ず間違える」

「……」

「君はその過ちによる人生の汚点を一生後悔し続ける。決して落ちないその汚れをこそぎ落とすだけの人生になる」

「酷い言い草だな」

「ごめんね。どうにも君のことが私は気に食わないらしい。せっかく同じ千鈴って名前なのに残念」

「偶然の暗号に喜ぶのは馬鹿のすることだどこかで読んだ」

「あっそう。まあ、さっきの課題忘れないでね」

「提出期限は？」

「卒業まで」

彼は卒論が二つになったと内心思った。しかし、格別の焦りはなかった。彼は自身のあり方を信じていた。

自らの正義を他人に押し付ける者は常に征服者であり独裁者である。正義とは自らの内にのみ機能を許される。そして市民には市民の為すべき正義があり、それに加えてそれぞれの職能に見合った正義を、つまり政治家は政治家の正義を学生は学生の正義を、画家は画家の正義を果たすべきなのである。そこで初めて健全な社会が現出する。

つまり一個人は自らの正義に没頭することだけが讃えられるべき姿なのである。個人の内に正義を形成するのはおそらく物書きの正義だろうと言うのが彼の考えだった」

まさにその通りである。俺の考えをここまでの確に示してしまえるのはどういうわけだろうか。しかもそれが的確である。この女の語りに俺と言う人間がすっばり入ってしまっているような感覚がする。

絵の完成はまだ見えない。しかし、傑作の予感が胎動している。部屋の暗闇が見えぬ蜘蛛の子となつて絵に黒い血を巡らせていた。部屋に漂う赤い石竹の香りと女の肌の湿った香りが作品に

溶け風格となる。部屋の暗闇に互いの境界が溶けて渾然一体としていた。

「今日はここまでにしましょう」

筆が乗ってきたところで止められ、不満が残る。しかし女にも事情があるのだろう。

「そういえば、部の合宿がここであるらしいがお前はいいのか」

ふと思いついて言う。そもそも使用許可がよく下りたものだと思う。

「構いません」

「崇られても困るぞ」

「祟りません。今はあなたに憑いているじゃありませんか」

「なら構わない」

女は崩していた服をすりと持ち上げ着て背中を覆ってしまった。今日は帰ることにした。

その次の日も、またその次の日も、雨が降り、その度に女の声に引かれて俺は絵を描いた。そして女も語った。大学入学から始まった女の語りはついに今年の出来事に入り、今日、女と出会った日のことを語り始めていた。最初は気に障った語りも次第に気にならなくなって、これは確かに自分のことだと思えていた。

「お前は俺のことをなんでも知っているのだな」

「物事には本質がございます」

しとしと降る雨に女の細い声。

「本質がわかれば、あとはなんでもわかります。桜の樹には桜が咲くでしょう」

「俺という人間には決まった俺の人生が成ると」

「左様に」

「ふむ、そういうものか」

「なんだか最近はこの女の言うことが随分と納得できると思った。女の言うことに納得するのではない。俺の思考のまだ言葉にならないものを、女が言葉にしているのだと思えた。」

「では今日はこれまで」

女がいつものように切り上げの言葉を言って、黒い制服を腰から肩へと持ち上げる。シユルシユルと蛇のような音がする。

「待て。明日は例の合宿がある。明日は描けないかもしれないから今日はもう少し描かせてくれ」
「このようなことを言ったが、実際は描きたい欲望が自らのうちで抑えられなかった。絵はほとんど完成している。」

幽玄の黒髪と白い肌のコントラスト。女の背筋と背骨を撫でる線。張り付くような黒い艶髪。わずかに振り返る女の白い唇からは今にも物語が聞こえる。

これまでの作品は未だ見たことがない。この絵を発表すれば、永遠の名声を得られるに間違いない。この作品はもはや学生である描き手を離れている。女の摩訶不思議な力が働いて、千年の研鑽が腕に宿ったかのようなのである。

しかしわずかに足りない。これではただの美しい女の絵である。俺が描いているのは鬼の絵で

ある。人外の絵である。その悍ましさと尋常ではないさまがこの絵にはない。

「赤色だ」

と思った。この絵に赤色を挿せば完成する。しかし、どうしたものか。

「着物……」

着物を描く。赤い着物を。それがいい。着崩した着物を描けば、赤色が背筋を横切るように通ってアクセントになる。決まれば、この情熱が収まる前に描いてしまおう。そう思って、筆を取る。

「今日はここまでです。お忘れですか」

どこか哀れみのこもった声で言う。

「どうせここでは時間が経たないのだからもう少し描いてもいいだろう」

「いえ、いえいけません。そのようなことをおっしゃってはいけません」

「どうしていけないのか」

女の瘴気が高まるのを感じる。今まで見えなかった蜘蛛の子が集まって大蜘蛛に変じたような気配が女からする。そう、この気配である。描かねばならないのはこの魔の憧憬である。これを絵に描いて封じ込めるのが俺の仕事である。

俺は描いてこの女を征服してやろうという気になった。

女の嘲け笑う声が聞こえた。

「合宿は彼が思っているほど、墮落したものではなかった。美術部が強制参加の合宿にも関わらず、美術部ではない人間が多いのが気になった。それも妙に男の多い気がした。元々美術部に男が少ないから、そう感じるのかもしれないと彼は思った。

「二人ともどう？ 楽しんでる？」

「そこそこだ」

島の隣に座って黙々と焼かれた肉を食べている林は何も返事をしなかった。

「思ったよりも普通だろ？」

「みんな少し飲み過ぎだな。休日とはいえ校内だ」

「許可ももらってるんだからいいだろう？」

前にも彼は思ったが、よく旧校舎前の草原で学生だけのBBQ、それから旧校舎内での合宿なんて許されたものだと思った。しかし、その疑問はなんとなく頭から消えてしまった。

「島もお酒飲むんだ」

「今日はそういう気分だ」

未だにこのような会に参加することが正しいことかどうか彼にはわからなかった。経済的に大学に行けない人間が社会にいる以上は、運よく大学に行ける家に生まれた人間が少しでも多くここで学び、その不正の改善に役立てるべきではないかと彼は思っていた。そんな考えで気持ちが落ち込んでいる彼はお酒でその思考を鈍らせた。少し気分が良くなった。

「あれ？ 林さん、飲んでなくない？」

「私はお酒飲めないから」

「えええ。ちょっとでもいいから。一口でも飲まない？」

林は黙って手元の烏龍茶に口をつけた。しかし、飲まなかったためにコップの中のお茶が減ることはなかった。彼女の意思表示が伝わり、森岡は再び騒ぎの輪の中心へと戻って行った。

「最近何かあった？」

「何か……」

彼には思い当たるものがあつた。無論、旧校舎の女のことである。しかし、どうしてかそれを話す気にはならなかつた。

「最近の君は少し変だ」

「どこが」

「最近の君は随分と君らしい」

「それはどういう意味だ」

「人間っていうのはね、全然そんなんじゃないの。君は神様の一番すごい業は、最も偉大な神業はなんだと思う？」

彼女の話が飛び飛びなのはいつものことだった。しかし、いつも無関係ではない。ちょうど線グラフを描く要領で彼女は話を進める。

「それは天地の創造だと思うが」

「違うね。現代技術が凄まじい進化を遂げている中、いつかは人類が到達しうる領域だ。実際に

仮想空間や高度なシミュレータはある意味でそれを達成している」

「ならなんだ」

「妙だな。そこは君らしくない。もう少し考える性質だろう。お酒のせいかな」

彼女が足を組み替える。白いワンピースで白い靴。それでこんな草原に座っていいものかと彼は思う。

「最も偉大な神の御業は信仰に耐えられることだよ」

「それと俺に何の関係がある」

「君はさ、神様になっちゃダメだよ。神様は揺るがない。だから信仰される。でも人間は揺るがないとだめだ。どんなに立派な信念で固まっても揺るがない人間は必ず虐殺に向かう。虐殺はね……神の御業だよ。人間が触れちゃいけない」

それで彼女はどこかへ歩いて行ってしまった。男性が彼女に惹かれるのは、容姿だけでなくあの神秘にあるのかもしれないと他人事のように彼は考えた。

その時、ポツリと頬に雨が落ちる。女の声が聞こえた気がした。白昼夢に陥ったかのような感覚。しかし不快感はなく、淡い官能の心地よさ。彼は思う。

「俺は夢を見ているのかもしれない」

雨が次第に強くなる。しかし、学生たちはみなどこか惚けている。全てが夢幻のごとく。気づ

けば島千鈴は女の背中に再び絵を描いている。

この街には雨が悄々と降る。

蔽かに悄々と——悄々と降る。

初夏の温もりをもった穏やかな驟雨が降り、煙雨となって立ちこむ。愴然たる草木の沈黙。白痴共は赤煉瓦の秘蹟に居鎮まりぬ。頽廢の愉悦に溺れけり。

「絵は描けそうですか」

雨に頭垂れたる紫陽花のごとく、うつらうつらと夢うつつ。意識は深い五月雨の中。何物をも見ず。凋れたる向日葵のごと、腕だけが筆を持って揺蕩う。島千鈴なる画人、ここに沈みけり。

深い頽廢の享楽に沈みたる午後後の仮睡。雷鳴り、雨もいたう降りける。魔の巢食う赤き倉に悪漢共の囁きたる密談。四本、八本、九本邪なる手が伸びる。下卑たる笑みと熱き息遣い。

白い女が台の上に横たわっている。

女、秘薬の魔酔に深く陥りたり。醒めたる気配なし。男共、互いに見合い、慎重に女の衣を剥ぎゆく。林千鈴なる画人、悪漢共の手に落ち——

『ああっ、痛い!』

「

俺は女の首筋をペインティングナイフで抉った。視界を覆うような血潮が噴き出し、思わず顔を覆う。

「そんなに殺傷力のあるものじゃないはずだが」

しかし女には効果覿面であるらしく、俺の足元で蹲って動かない。虫の息とはまさにこのことで、か細い息をしている。

「お前、よくもやったな」

「……」

女は恨めしげにこちらを睨んでいる。

「お前、いいのか。絵を完成させなくていいのか」

「それどころじゃない。林を助けに行かなければ」

「おかしいぞ。お前には関係のない話だ。男どもの悪徳はお前という人間の道徳を汚すこととはない。今、私を傷つけ、見捨てるならばそれこそ悪徳ではないか」

「人が襲われているのに見捨てることはできない。お前は人間ではないが、林は人間だ」

「人間の定規をお前が勝手に決めるのか。私を殺すのは殺人ではないとどうして言える。人の形をし、人の言葉を繰る私を殺せば、殺人になるぞ。お前の人生の消えぬシミとなるぞ」

「もしもその罪が問われる日が来るなら、お前のような霊も殺してはならないという道徳が人類にあるいは俺の中に確立されたなら、俺はその罪を必ず償おう」

「何という身勝手な正義か。許すまじ。許すまじ。おのれ、島千鈴！」

女を背に部屋を出ようとす。

「この部屋から出れば、私とお前の勝負はおしまいだ。すぐにここに眠る人間全てにとり憑いて崇ってやる。それでも出ていくのか」

一瞬だけ考える。しかし、俺にはどうしても林を見捨ててまで、他の学生を庇う気にはならなかった。不正義だろう。

「ああ、なんとという不正！ 不公平！ 浅ましい正義。これでお前の信念もこれまでの人生もすべて偽飾だと証明された。これからどう生きていくつもりだ！」

もうすでに遠く後ろになったあの部屋から女の恨み言が聞こえる。声は段々と大きく後ろから迫ってきている。地面を蹴った足が瞬間に迫り来る闇で腐りそう。

「考える。信念はまた考える」

「ああ、使い捨ての正義」

その声と共に、女の声が消え辺りがしんとする。

「諦めたのか？」

それなら幸いだ。二階まであり、教室の数も多いこの場所であの不思議な声と闇から逃げている林を見つげられない。

「それは邪悪な安心である。人に官能と呼ばれるものである。ヴェールを剥いで肉体を見て、彼

らは安心するのである。

“ああ、この女も他の女と何も違わないのだ。今まで征服してきた女と”

崇高な精神を持つように見える彼女でさえ肉体を見てしまえば、お金で体を買った女と何一つ変わりはない。もはや何も恐れることはない。この女もまた自らの股下にひれ伏すのだ。今、悪漢たちの触手が伸びる」

まずい、どうやら作戦を変えたらしい。先に林の運命を語ってしまおうという算段だ。

しかしこちらも考えなしではない。眠らせた林をわざわざ二階に運ぶとは考えにくい。さらに女の語りによれば、林は台の上に寝ている。普通の教室にそんな台はない。その大きさの台があるのは

「おい！ 森岡！」

理科実験室のドアを蹴破って叫ぶ。蹴破る必要はないが、相手が複数いるならこれで少しは怯んで欲しい。

「おい、なんだ。せっかくだいいところなのに」

「ああ、知り合いです」

森岡がガタイのいい男にへりくだって答える。男はおそらく五人。その奥にまだ服を着て健やかに眠っている林がいるのが、白い服が暗闇に月明かりのように浮かぶのでわかった。間に合ったらしい。

「おいそんなに怒るなよ、島。お前も混ぜてやるから。どうせ、お前もやらせてもらったことないんだろ？ 薬で絶対に起きないから大丈夫だって」

「別に性交渉がないことを不満に思ったことは一度もない。お前たちと同じ価値観で生きていない」

「なんだよ、その言い方」

暗闇の中、森岡が近づいてくる。

「俺にはわかったぞ。安心だ。安心がいけないのだ」

「何を言っているんだ、お前」

怯んで歩みを止める森岡の方にこっちからズカズカと歩いていく。

「俺の正義は今日から揺らぐ正義だ。不安心の正義だ。神の正義ではない。人間の正義だ」

それを言うと同時に大きな雷が落ちる。

「鬼だ！」

森岡が叫ぶ。と同時に建物を覆い尽くす、空間が裂ける音と甲高い女の悲鳴が響き渡った。

周りの男たちも驚いて、われ先にと出口へと走り込む。森岡も何度も転びながら部屋の外へと

逃げた。

「何とかなかった」

あの女の気配もしない。俺は林の眠る机の横に立った。

林は外の嵐と対比をなすように穏やかな寝息を立てている。確かに森岡たちが夢中になるのも

わからないではない顔立ちだった。白っぽいショートヘアが外の雨の色を反射している。

「何見てるの」

「起きたか」

森岡はしばらく起きないと言っていたが、嘘だったらしい。まあ流石に、ここに一人で森岡たちとあの黒い女から番をするのは心細いものがあるから助かる。

「夏でも雨が降ると冷える」

そう言って上着を投げるようにして林に渡す。煙草でも吸えば絵になりそうだが、俺は煙草は吸わない。

「ありがと——って、これどうしたの」

さらに俺の方を見て、林がギョッとする。

「もしかして、森岡、殺した？」

「俺がそんな人間に見えるか」

「君は人を殺すような人間には見えないけど、人を殺したような人間には見える」

それで林の視線を追って、自分の体を見る。窓から差す雨の藍色の光でも消えないほど、真っ赤に血塗られていた。

「なるほど、そりゃみんな逃げるわけだ」

「とりあえず、その凶器置かない？」

言われてペインティングナイフを机に置く。

「なんだ、絵の具か。とはならないよ。絶対に血だよね」

そう言われて自分でもひどく恐ろしい気分になってきた。もしかしたら、あの女は本当に人間だったのかもしれない。ペインティングナイフで裂けるほどひ弱な。

「お前、幽霊とか平気か？」

「えっどういうこと。本当に殺したの？」

林は状況を飲み込めていない。いつも何でもわかった風な顔をしているから新鮮だ。詳しく説明してやってもいいが、いつもの仕返しと違って説明を省く。

「まあついてきてほしい」

それからあの女のいた部屋に来た。驚くべきことに女の姿はなく、一枚のキャンパスがあるだけだった。絵は完成している。

「これ、凄い絵だね。なんでこんなところに」

「俺が描いた」

「えっ」

林は絵と俺の方を交互に見比べている。

「いやこれが描けるならもう学校行かなくていいよ、君」

「まあ俺一人の力ではない」

「ふーん」

林はあれこれ質問しなかった。今思えば、目覚めた時に自分の状況確認さえしてこなかった。おそらく、一瞬で出来事を飲み込んだのだろう。恐るべき冷静さと頭の回転である。

「で、この絵どうするの？　ちゃんと発表すればしっかり評価されると思うけど」

俺は絵をじっと見た。完成させた記憶のない赤い着物が派手に塗られてそれが味になっている。女の首から溢れた血が、偶然に背中に上手くかかって絵が完成したらしい。おそらくそれで女は絵になってしまったのだろう。

「いい絵だと思うか」

「いい絵だと思うけど」

「少し性表現が露骨すぎはしないか」

「そうかな」

「なんだか女を魅力的に描いてやろうという気が急いで嫌だね」

「でもこの女って、きつとこういう女だったんでしょ」

「描いてる時はそう思ったが意外とそうでもないかもしれん。未熟だ」

「まあ芸術ってそうだよ。決して届かないものへの接近の試みだから」

「引用か？」

「林千鈴」

彼女は満足して絵に背を向けた。俺は絵を椅子や机がうず高く積まれた部屋の端へと隠してしまった。その時にふと思う。

“この女が絵になっているのなら、もしかすると俺もどこかで文字にされているかもしれない”
あの黒い女は人を文字に変える魔物だったのかもしれない。俺なんかほとんど術中に落ちていたから、どこかで半端な原稿になっていてもおかしくない。

試しにじっと原稿の向こう、こちらを見ている読者を見つめてみる。

しかし当然、何も起きない。俺は最後にもう一度、絵を見てからその場を後にした。絵の女が笑っていた気がした。

「そういえば、私が与えた課題はどうなった？」

部屋の扉を開けた林が振り返り尋ねる。

「今、答えてもいいが」

彼女は「うーん」と少しだけ悩んで

「どうせ変わるでしょ」

「うん、変わる」

「ならないよ。卒業の日にとりあえず一回聞かせて」

この女はどうやら卒業後も絡んでくるつもりらしい。部屋を先に出た林を追って部屋から出ると、外はいまだに雨が降っている。

この街には雨が悄々と降る。

島千鈴なる画人の話（落丁あり）

厳かに悄々と——悄々と降る。

（文学部文学科四年）

どうぞこの手を取ってください

吉野 美羽

玄関の扉を開けると甘い匂いがした。顔をしかめそうになるくらいべったりとした、濃い醤油と砂糖の匂い。それは僕の鼻の中や髪の毛の一本一本の隙間、僕と一緒に家の中に入っていった空気の原子の間をゆっくりと埋めていく。家の奥から流れてくるその匂いは不自然なくらいの温かさを持っている。誰か料理でもしているのだろうか、と靴を脱ぎながら思う。

けれどその逆に、玄関からリビングへと続くフローリング張りの廊下はひんやりと冷えきっている。靴下越しに伝わって来るその温度に思わず身体が震えてしまう。

リビングに入ると甘い匂いは一層強くなった。匂いの発生源を探すと、それはすぐに見つかった。奥のキッチンを見ると片手鍋が火にかけてられていて、その中身がぐつぐつと煮えていた。だけれどそこに人の姿はなく、置きっぱなしにされた鍋は助けを求めるように切羽詰まった音を立て続けている。手に持っていたポストンバッグをその場に下ろしてすぐに火を止めに行く。

どうぞこの手を取ってください

強火で煮込まれていたのは荒くカットされたかぼちゃだった。かぼちゃは一つ一つの大きさがまちまちな上にどす黒い色に染まっている。多分、というか明らかに醤油の入れすぎだ。コンロの火を止めてもしばらく勝手にぶちぶちと泡を立てている煮物を見下ろしていると、あら、と後ろから高い声がした。

「帰ってたのね。着く時間を教えてくれてたら、玄関だって開けておいたし、ちゃんと出迎えたのに」

振り向くと、そこには白いフリルのエプロンをつけた女性が立っていた。

「……麻里子さん」

名前を呼ぶと彼女はにっこりと満足そうに微笑んだ。その顔には今日もしっかりと化粧が施されていて、瞼に塗られた銀色のラメがキラキラと光っている。ふわふわにカールした長めの髪を揺らしながら、あっ、と彼女が声を上げる。

「火、止めちゃったの？ ダメよ、途中なのに。二十分煮込まなきゃいけないってレシピに書いてあったんだから、ちゃんとそうしないと」

そう言って彼女は、再びコンロを点火させる。その爪は長く、大きな宝石のような飾りや細かいビーズがくっついていていた。コンロのつまみを握る手、その反対の手には画面が開いたままのスマートフォンがしっかりと握りしめられている。

「火を点けたまま放っておいたら危ないから、気をつけなさい。煮込み方も、もう充分すぎるように見えるけど」

鍋の中のかぼちゃは煮込まれすぎたせいでぐずぐずになりかけている。

「ええ、でもレシビ通り作ってたわよ」

彼女の唇と眉が不満そうに歪められたのを見て、しまった、と口をつぐむ。そうだった、こういう時は彼女のやり方に色々物申してはいけない。重要なのは鍋の中の食材を美味しくすることよりも、彼女が彼女の望むやり方で料理を完成させること。それと、彼女が自分一人で料理をやりきったのだという満足感と自己肯定感を味わわせることなのだ。そうでないと、彼女はどんどん拗ねてしまう。実の母親である彼女を、まるで自分の小さな娘のように何度も宥めた記憶がよみがえってくる。

間一髪、僕がそれ以上何も言わずに一步下がったことで、彼女の機嫌が大きく損なわれることはなかった。鼻歌まじりに彼女は鍋の中身を必要以上にかき回す。

「これができたら、すぐご飯にするからね。色々準備してるのよ。せっかくあなたが久しぶりに帰ってくるんだから、母親としては栄養たっぷりなもの撮らせたいじゃない？ 一人暮らしの男の子なんて、すぐに食生活偏っちゃうんだから。それに、あなたの就職が決まったお祝いだから、今日はごちそうにしちゃう！」

ありがとう、と頷きながら、内心ではため息をついてしまう。

偏っているのは僕の食生活よりも、彼女が抱いたイメージの方だ。僕は県外の大学に通っている、普段は一人暮らしをしているのだけれど、家ではきちんと自炊をしている。コンビニやファストフードで食事を済ませせることは稀だし野菜も嫌いではないから、しっかり自分で栄養バ

どうぞこの手を取ってください

ランスを考えながら料理を作って食べている。こんな醤油たっぷり煮物より、昨日自分で作った味噌汁やサラダ付きの食事の方がよっぽど健康的だ。自炊をしていることは実家に帰省する度に彼女に話しているはずなのに、彼女からはどうしても一人暮らしの男は不健康な食生活に陥るものだという固定観念が抜けないらしい。

「……父さんは？」

話を変えたくて父の所在を尋ねると、さあ、と言って首を捻られた。麻里子さんはそれよりもかぼちゃが気になるみたい。

「仕事とかじゃないの？ あなたが今日帰ってくることは言ったから、夕食には間に合うように帰ってくるはずだけど」

仕事？ リビングの壁にかけられているカレンダーを見ると、今日は土曜日だった。父はサラリーマンで、勤めている会社は土日が休み。今日は休日のはずだ。まあ、用事でもあったんだろう。

カレンダーには、いくつかの日付に丸が付けられていた。太い黒のマッキーか何かで勢いよく書かれた丸。その横には、同じペンで『桜、病院』と書かれている。

床に置きっぱなしにしていたバッグを持ち上げる。

「桜もないの？」

弟の名前を出すと、麻里子さんは鍋から目を離さなまま大きく首を振る。

「部屋よ、多分」

弟の部屋は、リビングを抜けてさらに奥の方にあるはずだった。けれど耳を澄ましても家の奥からは何の音も聞こえず、人がいる気配すら感じられない。後で声をかけにいくか、と思ってバッグを担ぎ直す。とりあえず自分の部屋に荷物を置いてこよう。

リビングから廊下に出て二階に続く階段へと向かう。一軒家である僕の実家には、一階にリビングやキッチン、風呂や弟の部屋があって、二階に父親や母親、僕の部屋が一つずつある。

階段に足をかけようとした時に玄関の扉が開く音がした。見ると、ちょうど父親が家に入って来たところだった。

出勤のための紺色のスーツ姿ではなく薄い青色の襟がついたシャツと茶色のスラックスを着ている。休日によく彼がするコーディネートだ。とても簡素。シャツのボタンはいちばん上まできっちりと留められている。

父は僕が階段の近くに立っているのを見て、少し眉を動かしたただけだった。驚いたような感じではなくて、何だ居たのか、とでも言うように。

「……いつ着いたんだ？」

靴を脱ぎながら彼が尋ねる。僕に背中を向けて、段差に腰掛けながら靴紐を解く彼の背中には、ひどく硬そうだ。筋肉はあまりついておらず、身体は薄いのにやけに背筋が真っすぐ伸びているせいで、その背中はいつもコンクリートで作られたみたいにカチカチに見える。

「ついさっきだよ」

背骨の辺りを見つめていると不意に父が立ち上がる。足音一つ立てず、さっと僕の横を通り過

どうぞこの手を取ってください

ぎていく。そうか、と言って、それだけで、彼はリビングのドアを開けてその中に入っていた。僕はしばらくそこに突っ立っていたけれどリビングからは特に会話する声は聞こえてこなかった。バッグを持ち直して階段を上る。二階のいちばん奥が僕の部屋だ。扉を開けて電気を点けると見慣れた家具の配置が蛍光灯の光に照らされた。ベッドと学習机と、あとは壁に沿って置かれた本棚。大体それが全てだ。至ってシンプルなこの部屋は、僕が高校を卒業して大学進学のために家を出るまで、使い続けていたそのままの姿を保っている。簡素なスタイルに落ち着くところは父親に似たのかもしれない。

床にバッグを置く。中身は着替えの服ばかりだ。今回は僕の就職が決まったから、その報告がてらに帰って来た。せいぜい二、三日程度の滞在で、長居するつもりはない。

前回実家に帰って来たのはもう二年前くらいになる。それから何かと理由を作って、ここに帰って来ることを避けていた。

学習机のいちばん大きい引き出しを何気なく開けてみる。そこには高校生の時に使っていた教科書や副教材が入っている。数学Ⅰの教科書、地図帳、世界史の資料集。それらを何冊か取り出すと、その下にはB5サイズのノートが複数冊押しつぶされるようにして隠れている。深い青色をしたノートの表紙には、7、とだけ数字が書かれている。僕の字だ。入っているノートを全部引っ張り出してみると、他のノートの表紙にもそれぞれ番号が振ってある。全部で十冊あったはずだ。

ノートを開くと今よりも少し幼い僕の字でページがぎっしりと埋め尽くされている。そこに書

かかっているのは自作の小説だ。五ページ程度で終わる短い作品もあれば、ノートまるまる一つを使い切ってしまうくらいに長い物語もある。内容も冒険ものだったりミステリーだったりとばらばらで統一性はない。懐かしいな、と思わず苦笑気味に唇が歪む。

今も僕は小説を書き続けているけれど、ほとんどパソコンを使って書いているので、この頃みたいにノートにシャーペンで文章を書きつけることは無くなった。それに大学の講義や就職活動で忙しかったせいで、高校までの頃よりも文章を書く時間ははるかに少なくなっている。

小さい頃から本が好きで、自分なりに物語を書き始めたのは小学五年生の頃だった。その頃の夢は小説家になることで、外で遊ぶことよりも家でノートに向かっていての方がずっと楽しかった記憶がある。この青色のノートに物語をまとめ始めたのは、確か中学生の頃だ。そういえばそれより前に書いていたものはどこに行ってしまったんだろう？ 捨ててしまったのかもしれない。

不意に一階から麻里子さんの声がした。ご飯にするわよ、という声に、すぐ行くよ、と応える。机の上に広げていたノートを再び引き出しの中に入れてようとする。その時、ふと気がつく。青いノートが九冊しかない。

おかしい。全部で十冊、全部この引き出しに入れていたはずだ。ノートの表紙を確認して確かめると六番目のノートがない。どこにやったんだろう、と首を捻る。もしかしたら上に重ねていた教科書の間に挟まっているのかもしれない、と確かめようとしたけれど、まあいいや、と僕は手早くノートと教科書類を引き出しの中に押し込めて部屋を出る。

階段を下りてリビングに行くと、麻里子さんがダイニングテーブルの上に料理を並べていると

どうぞこの手を取ってください

ころだった。さっき業火にかけられていたかぼちゃの醬油漬け、ではなくかぼちゃの煮物と、プラスチックの容器に入った握り寿司。大きなポウルに盛られたポテトサラダ。それと茶碗につき分けられた白米。父親はもう机についていて、手を伸ばしてそれぞれの席に箸を配膳している。麻里子さんが寿司のパックの蓋を開けながら僕に言う。

「ねえ、桜呼んできてくれない？ 私、色々準備してるから」

「うん、分かった」

リビングを抜けて奥の廊下を進む。突き当たりが弟の部屋だ。ぴたぴたと閉じている扉を数回ノックして、声をかける。

「桜、ご飯だって」

それまでしんとしていた部屋の中から、ガタ、と音が聞こえる。

「入ってもいい？」

返事は無い。それを了承と捉えて扉を開ける。僕の部屋よりもずっと物が少ない部屋の中、ベッドの上に彼は腰掛けていた。

「久しぶり、桜」

小さく手を振ると、彼は薄く微笑んだ。

二年ぶりくらいに見る彼は背が伸びたように見える。ベッドの縁から床にだらんと力なく放り出された脚は僕のよりも長そうだ。けれどその顔には恐ろしく血色がない。羽織ったカーディガンの袖から伸びる腕やジャージのズボンの裾から見える足首らへんの肌は、日焼けなど知らない、

と言っていた。

「体調、どう。変わらない？」

僕の問いかけに桜はちょっと困った顔をして何回か頷く。ベッドのすぐ傍には室内用の車椅子が置かれていた。

「ごめんね、あんまり帰って来られなくて」

大丈夫だよ、と言うように彼がゆっくりと首を振る。家に帰ることを避けていたことが思い出され、申し訳ない気持ちりがざわざわと胃の下辺りでうごめく。もちろん桜の病気が僕の帰省を退けていたわけではない。理由はもっと別の所にある。

弟のことは素直に好きだ。四歳下の桜とは子どもの頃から仲が良かったし彼も僕のことを慕ってくれていたと思う。今彼が置かれている状況についても、僕なりに色々調べたりもしている。身体を動かすことが好きで、家の中ではいちばん外向的な性格をしていた彼が突然歩けなくなったのは、五年前のことだった。僕が高校三年生で、彼が中学一年生の時。ある朝彼はベッドから起き上がって部屋から出ることをさえできなくなったのだ。

その日のことを僕は鮮明に覚えている。朝の七時頃、高校に行こうとしていた僕は、弟がまだ起きて来ていないことに気がついた。寝坊かな、と弟の部屋を確かめに行くと、桜はベッドの脇にうづくまっていた。ベッドから床にそのままずり落ちてしまったような体勢でいた彼を見て、最初は寝ぼけているのかと思ったけれど、すぐにそうではないと分かった。立ち上がるのを助けようと手を貸したけれど、彼は自分の脚で自分の体重を支えることができなかった。僕の手を離

どうぞこの手を取ってください

るように掴む彼の手にはしっかりと力が入っているのにその脚には全く力が入らないのだ。脚のどこかに穴が空いていて、そこからエネルギーや空気がものすごい勢いでしゅうしゅう抜けてしまっているかのように。

すぐに彼を病院へ連れて行って検査を受けさせたけれど、驚くことに彼の脚自体には何の異常もないと告げられた。腱や筋が切れたわけでもなく骨に異常があるわけでもない。ありとあらゆる検査をしても、彼の脚は健康な状態ではないという結論は変わらなかった。けれど実際、彼は全くもって歩けなくなってしまったのだ。

それからというものが家から出ることはほとんどなくなった。最初の頃は頑張って車椅子を使って学校にも行っていたようだが、それもなかなか難しいようで、何とか中学校を卒業した後進学をせず家にとどまっている。身体を上手く使えない困惑や家族以外の他人とほとんど関わりを持たなくなったことが原因なのか、彼から出てくる言葉は次第に少なくなり、ここ数年彼の声をまともに聞いた記憶はない。

「あ、手伝うよ」

彼がベッドに腰かけたまま車椅子に手を伸ばすのを見て声をかける。だけど桜は首を振って、上手く体重を移動させながら腕の力のみで自らの身体をさっと車椅子の上に乗せた。その慣れた様子に驚いていると、彼が僕に向けて得意そうに笑う。びっくりした？とでも言うみたいだ。

部屋のドアを開けてやると、彼は自分で車椅子を動かして外に出て来る。スムーズな動きだった。そのままリビングへと向かう彼を追いかける。

リビングに入るともう食事の準備はできたようで、父親の隣の椅子に麻里子さんが腰を下ろしていた。白いフリルのエプロンは着たままだ。桜は父親の向かい側の席に近づいて、さっきと同じように腕の力を使って椅子に自分の身体を移し替えた。僕も桜の隣、麻里子さんの向かいの席に座る。楽しそうに号令をかけた麻里子さんに合わせて、皆が手を合わせる。家族四人で集まるのはもう随分と久しぶりだなと思った。

「で、どこに決まったんだ」

父親がそう尋ねてきたのは、パックの寿司が半分ほど減った頃だった。彼はこちらを見ないまま、手元の醤油皿にイカの握りを滑らせるようにしてから口へと運ぶ。ポテトサラダに入っていた糸みたいに細く裂かれた玉ねぎを咀嚼していた僕は、反射的に身を固くする。

「……社名は言っても知らないと思うけど。簡単に言えば、本の流通に携わる仕事をする会社だよ」

「へええ、すごいわね。勤務地はどこなの？」

麻里子さんが、かぼちゃをもぐもぐしながら訊いてくる。

「まだ決まってない。でも全国に支社があるから、最初の配属が北海道で、沖繩に転勤する可能性とかも大いにあるよ。海外にも拠点があるから、いずれそこにいく場合もあるかもしれない」

「ええっ、海外。嘘でしょ」

隣の桜も寿司についていたガリを噛みながら、驚いたように目を丸くしている。

「……結局、本関係の仕事にしたのか」

どうぞこの手を取ってください

黙って聞いていた父親が口を開く。その低い声に、ああ、と胃の付け根が痛くなる。結局僕は、この言葉を聞きたくなくて家に帰ることを避け続けてきたのかもしれない。

「出版社が第一志望だったんだろ、そっちは駄目だったんだな」

「……まあ、そうだね。縁がなかった。いくつか受けてみて、最終面接とか、いい所までいった会社もあったんだけど」

「でも落ちたんだらう？ 選考でどんなにいい所まで進もうが、内定をもらえなければ一次面接で落ちても最終面接で落ちても変わらん、同じことだ」

父親は、こういう時にだけ饒舌になる。

「そもそも、文学部に進むのもどうかと思ったんだ。もっと仕事につながるような技術を学べる学部に進めば、良い会社に入れる可能性も上がっただろうに」

「僕が就職する予定の会社も、良い会社だよ。だから選んだんだ」

「どうだか、そもそも出版業界なんて先細りしている業界なんだから。ずるずると本にしがみつかなくても」

反論するのも億劫になって、皿の上に載せていたかぼちゃを口の中に運ぶ。恐ろしく柔らかいかぼちゃがべったりと歯と舌の間で潰れていって、口の中に張り付いて行く。しょっぱくて甘すぎる。かぼちゃ本来の味は全て醤油と砂糖にかき消されている。

大学で建築を学び、建設会社のサラリーマンとして働く父は、なぜか文学について学ぶことを良く思わないらしい。ずっとそうだった。高校生の時に進路を選ぶ際、それが原因でよく口論に

なった。

結局、大学受験の時は僕が学費を全て自分で払うから、と言って押し切り、隣の県にある国立大学の文学部に入った。入ったものは仕方がないと言って、毎月僕の口座に一定の額を振り込んでくれている。

「まあ、いいじゃないの。そんな厳しく言わなくて」

麻里子さんが父を睨みつける。唇にはペースト状になったかぼちゃがくっついていていた。父はため息をついて黙って箸を動かし始める。僕も手元にあった茶碗を引き寄せて、盛られた白米を口の中に運ぶ。けれどたった一口咀嚼しただけでもう食べる気がなくなってしまった。胃が何回か捻じれている感じがする。二階の自分の部屋にあるあの青いノートのことを思う。本が好きで、小説を書くことがひたすら楽しくてノートに向かい続けていた幼い自分のことも。そしてそれを分かってくれない父親のことは、もうあまり考えないようにしようと考えている。考えてしまう。目の端で父親を見ると、白身魚の握りを飲み込んだ後に、茶碗から白米を食べていた。米、過多すぎる。僕の口の中には、まだかぼちゃが張り付いていた。

次の日の朝、自分の部屋を出ると廊下の端に何かが落ちていることに気がついた。拾ってみるとそれはどうやら化粧品のようだった。切手よりも一回り大きいぐらいのサイズ感で、中にはぎっしりと金色のキラキラした粉が詰まっている。多分これは頬に塗るものだ、昨日の麻里子さんが

どうぞこの手を取ってください

していたように。どうやらその化粧品は開封されていないようで、薄いビニールで包装されたままだった。

麻里子さんが落としたんだろうな。ズボンのポケットにそれを入れて後で渡そうと思う。

階段を下りてリビングに行くと桜が食卓に座っていた。彼は昨日の夕食で残った寿司を食べていた。おはよう、と言うとマグロを口に含んだまま微笑んでくれる。

「あれ、麻里子さんは？」

尋ねると、桜は玄関の方を指さす。

「出かけたの？」

うん、と頷く桜。しょうがないな、とため息が出る。

麻里子さんが突然出かけるのはよくあることだ。というよりも、昔から家に居る方が少ない人だった。彼女は仕事をしていない。だから家の外で何をしているのかは全くもって分からないのだけど、幼い僕や弟を置いてさっと外に出て行ってしまうのだ。もちろん食べるものの世話だとしてくれずに行ってしまうから、小さい頃から僕が料理を担当して、自分と弟の食べるものを用意していた。父親は仕事で帰りが遅くなるのがほとんどで、四人で食卓に並んだ記憶は多くない。

麻里子さん。僕が母のことを本名で呼ぶのは、彼女にそう強いられたからだ。母さんと呼ぶと彼女は激しく怒った。麻里子さんと呼びなさい、そう言って彼女は手近にあった机や壁を叩く。大きな音がする。そしてすぐに彼女の手は真っ赤に腫れ上がってしまう。彼女が机や壁に手

を乱暴に打ちつける度に、その手がばらばらになってしまふのではないかと怖くなった。

彼女は自分が母親であるということに耐えられないのだ。理由は分らないし、自分から二人の子どもを得たにも関わらず、母親という役割に耐えられない。だから普段の生活の世話を見てくれない。見ることができない、と言った方が正しいかもしれない。

けれど彼女は同時に母親という立場に強い憧れを抱いてもいる。その憧れは発作のようにやって来て彼女を蝕む。昨日みたいに作ったことのない煮物や手の込んだ料理を急に作り始めてみたり、いつもはしないくせに玄関まで僕たちが登校するのを見守ってみたり。彼女は突然良い母親であろうとする。けれどそれも長くは続かない。せいぜい一週間がいいところで、またふっと家から居なくなる。そんな麻里子さんの振る舞いに気がついていながらも父は彼女に何も言わなかった。ただ朝に仕事に行って夜は遅く帰ってきた。たまに近くのスーパーで総菜を買ってきた。そして僕たちにはばらくぶんの食費を渡した。それだけだった。

と言いつつも、それは桜が突然歩けなくなる前の話だ。桜が体調を崩してからは、麻里子さんは頻繁な外出を止めて彼のサポートに徹するようになった。通院には毎回付き添っていたし、桜が学校に通っていた時期は送り迎えにも行ってくれた。父さえも仕事から比較的早く帰って来るようになって、桜の風呂や食事の手伝いもしていた。二人が桜を支えている様子を見て、この調子だったら大丈夫だろうと思っただけから僕は県外への進学を決めることができたのだ。だけで。

「……もしかして、また最近復活してる？ 麻里子さんの逃避行癖」

桜は少し考えてから、ちょっと、と指で示した。多分ちょっとではないんだろうな、とその様

どうぞこの手を取ってください

子から分かる。

「大丈夫なの、桜は。不便なことない？」

うん、と、これはすぐに頷きが返ってくる。桜は、風呂や外出にちょっと手助けがいるだけで、後はほとんど自分のことは自分で済ませることができている。薬もあまり服用していないようなので確かに家族にかかる負担は少ない方なのだけれど、やはり家に一人で残されている彼を思うと不安になる。麻里子さんに非難がましい気持ち、が湧きそうになるけれど、そんなことを言ったら家から離れて県外で暮らしている僕の方が彼の助けになれていない。僕も彼女と同じようなものかもしれない。

しばらく黙ったままでいると桜が不思議そうな顔で僕を見る。何か応えようと口を開いたけれど、その瞬間に父がリビングの扉を開けて部屋に入って来た。昨日の彼との会話を思い出して自然と口が閉じる。父は僕の方を見ずにそのまま桜に声をかけた。

「何時に出る？ 車出すか」

桜は首を振ってすぐ傍に置いていた車椅子を指さした。今日は通院の日か、と気がつく。桜が通っている病院は自宅のすぐ近くで、歩きでも車椅子でもしんどくない距離にある。日曜日だから今日は父親が付き添う日なんだろう。さっき桜に対して感じた罪悪感が再び僕の口を開かせる。「歩きなら、僕が代わりに一緒に行こうか。休みでしょ、父さん」

僕の言葉に父親がやっとこっちを見る。少し面食らったような表情で黙ったまま、彼はもう一度桜の方に顔を向ける。桜は笑顔で頷いた。

「……じゃあ、頼んだ。必要な物は今から持ってくる」

そう言っただけはまたリビングから出て行くとする。僕も外出する準備を整えようと、もう一度部屋に戻ろうとする。ふとポケットの中に入っている物のことを思い出した。廊下に落ちていた化粧品。麻里子さんが帰って来たら気がつくように、机の上に置いておく。顔を上げると、部屋から出ようとしていたはずの父親が僕の方をじっと見ていた。目が合う。父はすぐに目を逸らして背中を向けた。

病院の中はしんと静まりかえっていた。桜の名前を呼ぶスタッフの人の声がつるつると清潔に磨かれた床に反響する。

桜の主治医に会うのは久しぶりだった。付き添いをしたことは多かったので彼は僕の顔を覚えていた。桜の脚を触りながら、彼は僕に向けても話してくれた。

「桜さんの状態は変わりません。ずっと」

「そうですか」

「定期的に検査をしています。やはり桜さんの脚は健康そのものの状態です」

白髪交じりの主治医は優しい目で桜と僕を見つめた。

「いつ再び歩き出してもおかしくなくらいですよ。数年自分の力で歩いていないから筋力の低下はあると思いますが」

どうぞこの手を取ってください

「リハビリは」

「リハビリも一進一退と言う感じですよ。上手く体重を支えられる日もありますが、完全に自分で立ち上がって歩けるまでには至らない」

ですから、と彼は続ける。

「何度かお伝えしていますが、桜さんが歩けない原因は身体的なものではなく、心理的なものではないかと」

「心理的なもの……」

「カウンセラーの方と面会する機会も取っているんですが、まあそこは本人次第なので」

彼の口振りに、桜がカウンセラーの問いかけに言葉を返すことはおそらく出来ないのだろうと分かる。桜は、困ったように眉をひそめていた。しわの目立つ主治医の手の中に収まった桜の脚は白く細く、そっだけ眠っているように脱力していた。

「歩きたくなくなっちゃったのかな」

医者は小さい子に語りかけるように、桜の脚に向かって囁いた。

病院からの帰り道、桜の車椅子を押しながら歩いていると、不意に桜がある方向を指さした。

「どうしたの」

指の先を見ると、そこにあったのは植物園の入り口だった。近所にある市営の植物園は決して大きくないものだったけれど、花の手入れが丁寧にされていて知る人ぞ知る名所とされている。

幼い頃小学校の校外学習か何かで数回行った記憶がある。

「……行きたいの？」

桜に尋ねると彼は嬉しそうな顔で頷いた。そんなに植物好きだったっけ。

入口の建物の所まで行って、中に居たスタッフの人に二人分のチケットを頼む。するとそのスタッフの女性が、あら、と声を上げた。

「こんにちは。今日もありがとうございます」

桜はぺこりと頭を下げて、どこからカードのようなものを取り出す。

「はい、大丈夫ですよ。お連れ様も一緒にどうぞ」

「え、チケットは」

そう言って桜を見ると自慢するみたいにカードを向けられる。そこには、年間パスポート、という文字が書かれていた。

「年間パスポート？」

「そちらをお持ちの方は一年中入り放題なんですよ、よくいらして頂いています」

そんなのいつの間に……。桜は、手慣れた様子で植物園の中に入って行く。入るとすぐに大きな花壇が広がっていて、色とりどりの花びらが揺れていた。思わず息が漏れる。綺麗に整列した花々は生き生きと咲いていて、それを見ただけでもママに世話をされているのだということが分かる。

じっとそれらに眼差しを向けていた桜は見ることがない表情をしていた。静かで穏やかな笑顔

どうぞこの手を取ってください

にも、今にも崩れてしまいそうな哀し気な顔にも見える。彼はただ何かを深く考えていて、それは目に映る花のことなのか、それとも別のことなのか分からなかった。

奥の方から誰かが歩いてくるのに気がつく。作業着姿で手に箒を持っている女性だった。このスタッフの人だろうか。栗色の髪をしている。彼女は花壇の前にいた僕らに目を留めると、はっとした表情をした。

花に集中していた桜が彼女に気がついて、上半身だけで軽く会釈をする。彼女は会釈を返して、少し笑った。

「桜くん、ビオラ綺麗に咲いたでしょ」

彼女が親し気に弟の名前を呼んだことに驚く。桜は、うんうんと首を縦に振って応えた。彼女が、僕の方に顔を向ける。

「こんにちは、お兄さんですか？」

「あ、はい」

「初めまして。私、ここでアルバイトをしている榎本と言います。桜くんとは小学校と中学校の同級生で、知り合いなんです」

「え、そうなんですか」

桜がお世話になってます、と頭を下げると、彼女は恐縮したように何度も頭を下げ返してくれました。

「桜くん、よく来てくれるんです」

「みたいですね、いつの間にか年間パスポートも買ったみたいで」

「そうなんですよ、ありがたいです」

榎本さんと僕が話しているのを見て、桜は少し恥ずかしそうにしている。何度かこめかみを掻いた後、奥の方にある別の花壇に向かっていった。

「あら、行っちゃった」

くすくすと笑う榎本さんを見て、そうだと不意に思う。小中の同級生である彼女なら、学校での当時の桜の様子を知っているんじゃないか。心理的なものではないかと。さっき病院で聞いた医師の声が、頭の中で響いた。彼女なら、何か手がかりを知っているだろうか。

「あの、桜とは親しかったんですか」

「え？ えーっと、あの頃はすごく仲が良かったわけではなくて、単なるクラスメイト、って感じでした。でも、桜くんって明るくて優しくて誰とでも話してくれる人だったから、たまにお喋りはしてたかな。それがどうかしたんですか？」

桜は一人でどんどん奥に進んでいて、僕たちの話し声が届く範囲からは離れていた。

「桜の脚のこと、どれくらい知っていますか？ 桜が歩けなくなってしまう当時、学校ではどんな感じだったんでしょう」

「ああ……。そうですね、本当に突然だったから皆びっくりしてました。先生から説明があって、でも病状とかは詳しく伝えられませんでした。事情があって車椅子を使うようになること、体育は参加できなくなること、でも怪我ではない。その他は至って健康だから安心してほしい、と」

どうぞこの手を取ってください

「なるほど……」

「皆最初は心配して色々桜くんに質問とか話しかけたりとかしてたんですけど、段々桜くんは喋らなくなつて。脚のことで注目されるのが嫌なのかな、って思ってたんですけど、別にそんな感じでもないみたいで。ただ、静かに、少しずつ言葉を話すのを止めていくような感じでした」

彼女は手に持っていた筆を強く握りしめる。

「話を聞いている限り……、学校で上手くいってなかったとか、そういうことはなさそうですね」
「ないと思います。桜くんが誰かと喧嘩したところなんて見たことがないし、桜くんを嫌ってる人もいませんでした。本当に皆から好かれてたんですよ。成績も良かったし運動もできたし、憧れてる人ばかりでした。小学校でも、中学校でも」

「そうだったんですか、じゃあ学校関係でトラブルや悩みがあったとは思えないですね」
「そうですね……」

桜を探すと彼はもう視界から消えていた。もっと奥の方に行ったのだろう。

「桜とどんな話をしたんですか？」

「ええっ、今となってはもうはっきりと思ひ出せないくらい、たわいのないことだったと思います。授業の話とか行事の話とか。あとは……、あ、」

彼女が小さく声を上げる。何かを突然思い出したように。

「そういえば、桜くんと二人で話したタイミングがあったんです。中学の時。何かの機会にちょうど二人になって」

「へえ」

「それで、桜くんなぜかその時険しい顔してたんです。どうしたんだろう、めずらしいなって思っ
て、私から声をかけた気がします」

風が吹いて花の匂いが強く香った。

「そうしたら、少しためらってたんですけど、家族が、って口にだしたんです」

「……家族？」

「ご家族に何かあったのかと思って尋ねたんですけど、首を振って何も言わないままで。でもし
ばらくしてから、大丈夫だよ、って。榎本さんが気にすることじゃないよ、僕が頑張らなきゃい
けないことだから、急に変なこと言ってごめん、忘れてねって。呟いたことを掻き消すみたいに」
桜の姿を探すけれど、まだ彼は僕の目の届かないところにいる。

「その頃、ご家庭で何かあったんですか？」

「いや……、中学の頃ですよ。特に大きなことは」

「でも、その会話をした直後だったんです。桜くんが歩けなくなったのは」

風が止む。そよいでいた花や葉が動きを止める。

僕が頑張らなきゃいけないことから。

どういうことだろう？ 麻里子さんがふらりと外へ行くことに対してだろうか。でも、その癖
は別にその時期に始まったわけじゃない。小学校の頃からだし、仕方がないものだと僕も桜も諦
めに近い状態だったはずだ。彼女を家に引き留めようと画策したことなんてないはず。

どうぞこの手を取ってください

きい、と軋むような音がする。見ると、桜が車椅子を動かしながらこちらに戻ってくるどころだった。

「……お仕事中に色々お尋ねしてしまって、すみませんでした」

「あ、いえいえ。そんなこと。どうぞまたいらしてください。桜さんと一緒に」

「……そうですね」

桜が僕の横にやってきて首を傾げる。

「満足いくまで見たの？」

そう訊くと彼は笑って頷いた。彼の口は開かない。

「じゃあ行こうか」

車椅子の持ち手を取って後ろから押してやる。

「ありがとうございます」

榎本さんに声をかけると笑顔を返される。けれど、その表情の中には桜への心配の色がわずかに残っていた。彼女はとても有用なことを教えてくれたと思う。分かったこともいくつかある。

桜の脚の不調の原因は、学校ではなくて、僕ら家族にあるかもしれないということ。僕らの中の誰か、僕らの中の何かが、彼から歩くことを奪った可能性があること。

車椅子を押す手がじっとりと汗ばんでいく。なんて恐ろしいことだろう。足元の地面が、僕の立っている場所以外、するすると下がって行って、一步踏み出したら真っ逆さまにその奈落に落ちてしまうような、そんな緊張感を覚える。桜は振り向かない。ただ、僕と榎本さんの会話の内

容なんて知らずに、静かに前を向いてそこに座っている。

家に戻ってリビングに入ると、ダイニングテーブルの上から化粧品が無くなっていた。麻里子さん、帰って来たのかな。ちょうどリビングに入って来た父親に、病院で先生から言われたことを伝えておく。父親は軽く頷いただけだった。きっといつも同じようなことを言われているのだろう。

自分の部屋に戻って、ベッドに横たわる。目を閉じて考える。桜のこと、病院で告げられたこと、榎本さんに言われたこと。

お兄ちゃん、と僕のことを呼ぶ声がある。今よりもずっと幼い桜の声。僕の胸くらいの身長しかなかった頃の桜の声。柔らかい頬ところんと丸い顔のラインを持っていた彼は、どこへ行くにも僕の手を強く握っていつまでも離さなかった。僕のことを全力で慕ってくれていた。手の平にぎゅっと押し当てられた彼の高い体温。最後にあれを感じたのは、最後に僕らが手を繋ぎ合ったのは、いつのことだっただろう？

どのくらい長く目を閉じていたのか分からない。ガチャ、と玄関が開く音が聞こえて、僕は瞼を持ち上げる。誰かが外に出たのか、そう思ったけれど、靴を脱ぐような音がしている。誰かが帰って来たのか。そう思っただけで、すぐにまた目を閉じようとするけれど、はっとして飛び起きる。誰が帰ってきたんだ？

どうぞこの手を取ってください

父親は家にいた、さっき話したばかりだ。桜も僕自身と一緒に外出して連れ帰って来た。麻里子さんも机の上に置いていた化粧品が無くなっていたから、てっきり帰って来て家のどこかにいるものだと思ってたのに。

部屋を出て階段を下り、玄関へと向かう。ちょうど靴箱にブーツを戻していたのは、麻里子さんだった。彼女は、僕がいることに気がついて少し気まずそうな顔をした。

「今帰って来たの？」

「そうよ、ちょっと用事があって」

「一度帰ってきた？」

「……いいえ。ねえ、なんでそんなこと訊くの？何か大事なこともあった？」

「いや、別に。ちょっと気になっただけ」

麻里子さんは口角を下げて、何も言わずに家の奥へと入って行こうとする。その背中を見つめながら、僕は首を捻る。

「ねえ、金色のキラキラした化粧品って麻里子さんのもの？ラメみたいなやつ。廊下に落ちてたからリビングの机の上に置いてたんだけど」

麻里子さんは、訝し気な表情で振り返る。

「金色のラメ？私そんなの持っていないわ。ラメは銀色が好きなの」

それだけ言って、麻里子さんはさっと踵を返してリビングに入っていった。

しんと静かになった玄関。フローリングの床の冷たさが足の裏からふくらはぎを通して、胃の

奥や心臓、あばら骨の隅々にまで染み渡っていく。あの金色のラメは彼女のものではなかった。

僕と桜は二人で病院に行っていた。その間家にいたのは父親だけだった。ふと、病院に向かう前のことを思い出す。

桜の通院に必要なものを取ってくる、と言って部屋から出ようとしていたはずの父親が、僕の方をじっと見ていた。目が合った。父は、すぐに目を逸らして背中を向けたはずだった。

あれは僕のことを見ていたんじゃないか。僕がその時機に置いた、金色のラメをじっと見つめていたんじゃないか。

それに、僕と桜が病院に行つて戻ってくるまで、麻里子さんが本当に一度も家に戻っていないのだとしたら、あれを誰にも気づかれずに回収できたのは父親だけだ。

まさか。脳内に浮かんだ父親の像に霧がかかっていく。ゆらゆらと不明瞭なものを纏いながら、その像が机の上に置いてあるラメを掴む。手の中にあるラメをじっと見つめる父親。その金色のラメは、やがて形を変える。僕の知らない誰かの姿に。その人の臉にはそのラメが塗られていて、瞬きをする度にキラキラと光っている。その人は、そんな煌びやかな化粧が似合う派手な女性のように見える。

その女性と一緒にいる父親は、僕の知っている父親とかけはなれた存在のように思えた。無口で、簡素で、飾り気がなく、厳しい言葉で僕のことを制そうとする彼からは連想できない。冷えた身体の底から、少しずつ苛立ちが生まれてくる。偉そうに、こうあるべきだと僕に対して文句をつけていたくせに。当の自分は、麻里子さん以外と浮気をしているのか？ どの誰かも分か

どうぞこの手を取ってください

らない彼女と話した口で、僕に説教をしていたのか？

いささか早合点がすぎるかもしれないと思いながらも、同時に父親を疑う気持ちは強まって、確信へと近づいていく。玄関に立ち続けたまま、僕は自分の鼓動が早まっていくのを感じる。

正直、浮気をしている可能性があるのは麻里子さんの方だと思っていた。彼女は相当なペースで家を空けるから、父親の他に誰か好きな人がいて、その人に会いに行っているのではないかと、ほのかにそう思っていた。そもそも、不愛想な父親に麻里さんが満足しているとは思えなかった。幼い頃から、なぜこの二人が夫婦になったのか分からなかった。彼らは僕たちの前でお互いに愛情のようなものを強く示してみせることはなかったし、二人が手を繋いだ所さえも見なかった。彼らは、ただ近くにいるだけの他人のように見えた。偶然同じ家に住むことになっただけで、ただ必要なことだけ話して、最低限の接触だけするような。

次の日の月曜日、父親は朝早くから仕事に出かけていった。紺色のスーツを着込んだ彼の背中は一層硬度を増したように見えた。僕は彼の会社がある場所を調べて、昼過ぎに家を出た。

父親の会社がある場所は、自宅の最寄り駅から二十分くらい電車で行った所にある。万一にも父親と鉢合わせないように、気をつけながら彼の職場のビルに向かう。すらっと空に伸びているそのビルは父親の背筋を思わせて、この建物の中で働いている人は皆そんな身体になってしまうのだろうか、バカみたいなことを考えた。

そのビルの向かいには全国チェーンのコーヒーショップがあって、大きなガラス張りのその店は、会社の出入り口を見張るにはちょうどよさそうだった。アイスカフェラテを頼んで、窓際の席に腰を下ろす。昼食時を過ぎた時間帯だからか、父親の会社から出入りする人の数は少ない。時折スーツを着た人が忙しそうに走り出してくるくらいだ。グラスに突っ込まれたストローを回すと、からからと氷が音を立てる。恐ろしく冷えたその液体を飲み込む。食道の形を教えながら、それはゆっくりと僕の身体に溜まっていく。

麻里子さんは家に居るだろうか、また外に出ているかもしれない。桜が一人で家に残されているかもしれない。勢いで父親の不貞を暴こうと家を出て来てしまったけれど、こんなことをして意味はあるのだろうか。思考はどんどん暗い方へと連なっていく。

父親が本当に浮気をしていたとして、それを確信できるような何かを発見したとして、それから僕はどうするべきなのだろうか？ 父親を責めて、浮気を止めさせて、それから？ 麻里子さんに謝罪させる？ 罪を償わせる？ 具体的にはどうやって？

僕ら家族はとっくにばらばらだ。これ以上ばらばらにしたらどうなる、取り返しがつかなくなるかもしれない。

結局は、何も知らない振りをするのがいちばんいいのかもしれない。何も見なかったことにして、現状維持。家族の形を保ち続ける。けれど僕の狭い心がそれを許さずに、僕の身体をこんな所まで連れて来てしまった。僕のことに対して饒舌にケチをつけるくせに、家族に隠れて浮気なんてしていた父親が許せない。銀色のラメで彩られた臉を持つ麻里子さんではなく、金色のラメ

どうぞこの手を取ってください

をつけた誰かを選んだ父親が許せない。

かなりの時間をその窓際の席で過ごしながら、僕は考え続ける。こんなことをしたって父親が浮気相手と今日会うとは限らないんだし、僕の探偵気取りの行動が不発に終わる可能性は高い。けれど、時刻はもうすぐ父親の退勤時間に近づいていた。残業がなければ、彼はじきにあのビルから出て来るはず。ここまで時間をかけたんだから。と、ここで止めるのはもったいない気がして席を立てない。

空はいつの間にか暗くなり始めて、街灯がオレンジ色に灯る。退勤時間を三十分くらい過ぎた頃、紺色のスーツを着た人物が会社から出て来た。父親だ。すぐに会計を済ませて、張り込みを続けていた店から飛び出す。父親の視界に入らないように気をつけながら、でも彼を見失わないように後を追いかける。顔を見られても分からないように、つばが付いた帽子を深く被る。

父親は足早に歩き続ける。不意に彼が道を曲がった。その方向は通勤に使う駅とは真逆だった。ああ、と息が漏れる。しばらく歩いた後、父親はさらに小路に入って行き、その先にあった建物の中に吸い込まれていった。迷いのない足取りだった。行き慣れているのだろう。

数十分経っても彼はその建物から出て来なかった。しっかりと息を整えて、僕はその建物に近づいていく。看板を見るにそれはバーのようだった。ただ仕事の帰りに呑みに寄っただけだろうか。そう思ったけれど、彼は酒が呑めないはずだと思ひ出す。家でも晩酌をしているところなんて見たことがないし、彼からアルコールの匂いがしたことなんて一度もない。疑念は増すばかりだ。

帽子を被り直して店のドアを押し開ける。むわっと熱い空気が肌を打った。店の中は薄暗かった。お香か何かが焚かれているのか、シナモンやクミンが混ざったような、ざらざらとしたスパイシーな匂いがした。目についたのは人の多さだった。カウンターやテーブルなどは満席に近いくらい人で埋め尽くされている。ひらひらとしたドレスを身につけた女性たちや、カジュアルなパーカー姿の一人客、仕事帰りらしいスーツ姿のサラリーマンもちらほらいる。けれど、父親の姿やあの紺色のスーツは見つけられなかった。客は皆酒の入ったグラスを片手に、暗い照明のせいで何の料理なのかよく分からないものをつまみ、大声で話しながら楽しそうに笑っていた。

ドアのところで立ち尽くしたままでいると、声をかけられる。見ると、ジョッキやグラスが大量に載ったお盆を持った男性が僕のことを見ている。長く柔らかい前髪を掻き上げるようにセツトしたその人は、目の端を化粧で紫に彩っていて、そのせいでその瞳は艶やかな蝶のように見えた。

「お客さん？ 初めてかな」

「あ、はい。すみません。随分人が多いんでびっくりして」

「ここはいつもこんな感じだよ。おいで、あっちの席が空いてる」

彼に導かれるまま店の中を進んでいく。入口からは他の客に隠されて見えなかったけれど奥の方には小さなステージがあって、ピアノとマイクが置かれている。僕の視線に気がついて、蝶の目を持つ彼は自慢そうに笑った。

「そう、ステージがあるんだ。プロを呼ぶこともあるけど、基本的には誰でも使える。いつでも

どうぞこの手を取ってください

歌いたくなったらそこで歌っていい、もちろん君も」

「え、いやいや僕は」

彼は笑いながら僕にカウンターのいちばん端の席を勧めてくれた。その席からは店全体が見渡せた。でもやはり父親の姿は見つからない。とりあえず飲み物を注文して、腰を落ち着けて父親を捜すことにする。

「このお店、どういう場所なんですか」

カウンターの途中で手早く酒を作ってくれている蝶の目の彼に尋ねる。

「どういう場所？」

「すごく客層が広いなと思って」

「ああ、そうだな。ここは言うなればオアシスみたいな場所だよ。社会に疲れた奴らが集まってきて、羽を休めて、サナギになったり変身したりする」

「変身？」

「普段なれない、なりたい自分の姿になるってこと。ほら、その奥。ステージの裏に更衣室とメイクルームがあるんだ」

「へえ」

「仕事帰り、そこで着替えて夜の街に繰り出していく奴多いよ。ここで楽しむ奴もいるし。店長の意向でタダで開放してんだ。店の中見てみな」

彼の言う通りに店の中を改めて見渡すと、派手な化粧をした女性だと思っていた人物の骨格が

男性のものであることや、その逆に男性に見えた人の姿が女性であったり、そもそも性別なんて分らないような人もいる。彼らはそれぞれの自由を自らの姿で体現しているように見えた。

「ロッカーも貸してるから、服とかメイク道具とか必要なら置いていける。使いたければ言っ
よ」

蝶の目の彼が僕の前にグラスを置く。適当に頼んだそのカクテルはオレンジ色をしている。炭酸の泡が底の方から浮かんできて、店のかすかな照明を受けて金色に光った。

突然わあっといふ歓声が上がって拍手が聞こえる。振り向くと、派手なピンク色のドレスを着た人がステージに上がったところだった。彼女は手を上げて歓声に応えながらスタンドマイクの電源を入れた。店のどこかからかもう一人、茶色のスーツ姿の男性がやって来てピアノの前に座る。

彼らは何か言葉を交わして、正面に向き直る。ピンクのドレスの人が急に歌い始めた。唸るような声だった。びりびりと店中のグラスを震わせるほどに強い音圧を身体の奥から捻り出している。騒がしかった店内から、彼女の声以外の音が消える。皆ステージを見つめていた。彼女の声はどんどんと高くなって、音階を猛スピードで駆け上がっていく。切実に何かを訴えかけるような響き。彼女の息が切れる。間髪入れずにピアノが弾むようなリズムで走り出していく。店のあらゆるところから叫び声のような賞賛が起きる。

マイクの前の彼女はにっこりと笑って、再び歌い出した。今度はピアノとびったり合った楽し気な声色だった。歌詞もはっきりと聞き取れるようになる。どこかで聞いた気がするけれど、曲

どうぞこの手を取ってください

名は思い出せない。ジャズのような音だ。

客たちはグラスを傾けながらその声とピアノに合わせて身体を揺らしている。立ち上がって踊る客も見える。ステージの近くにいた客を、シンガールの彼女が手を伸ばしてステージ上に招く。何人かが楽し気にステージに上がった。手を取り合ってくるくと回ったり揺れたりする彼らは本当に楽しそうだった。上手い下手なんて気にせず、思い思いにステップを踏んでいる。

ピンクのドレスの彼女が、近くにいた赤色のドレスを着た人物の手を掴んで踊り出す。赤色のドレスの人は戸惑ったようにしていたけれど、導かれるようにして拙く左右に身体を揺らし始めた。その姿が何だか微笑ましい。不意にその人がぐるりと回った時に、照明に照らされて臉が光るのが見えた。金色に。

はっとする。ちょうどその人の顔がこちらを向いて、表情までしっかりと見える。化粧をしているけれど、薄く皺が入ったその顔には見覚えがあると分かる。思わず立ち上がる。急に動いたのが目に入ったのか、その赤いドレスを着た人は僕に視線を向ける。そして、突然踊るのを止める。その人はステージの上で立ち尽くしながら僕を見つめた。

「……父さん」

僕の声は、楽しげな歌声と旋律と笑い声に掻き消される。

ステージではまだ歌唱が続いている。僕たちは、カウンターの端の席で隣り合っている。蝶の目の彼は何かを察したのか、父親に飲み物を出した後店どこかに消えていった。父親の前に

置かれたグラスは烏龍茶のようだった。やはり酒は呑めなかったんだ、そんなことを思いながら、でもそのことが今隣に座っている赤いドレスの人が父親だという確証を強めているようで何とも言えないような気持ちになる。

隣に目を向ける。真っすぐ伸びた黒髪は腰まで垂れていて、薄暗い店の中ではそれがカツラだとは思えないくらいに自然に見える。くるぶしまで隠す長さの真っ赤なドレス、フリル付きの袖は彼の手首まで隠している。顔には化粧が施されている。瞼には金色のラメ、赤い口紅もしているのが見える。よく見ると少し下手だ。口の端から赤色がはみ出している。ぱっと見れば男性とは思わないかもしれない、けれど十数年も一緒に過ごしてきた僕からすればそれが彼だと気がつくのは簡単だった。

「どうしてここに居るんだ」

ついこの前僕の進路に意見を言ったのとは比べものにならないくらい小さな声だった。彼は僕の方を見ずに視線を落としている。

「……父さんが浮気してると思ったんだよ。家の廊下に落ちてた化粧品、てっきり麻里子さんのものだと思ったら、父さんが回収したことに気がついて。浮気相手の物を間違えて持って帰ってしまったって、落としたのかなって思ったんだ」

彼の姿を見ていられなくなって、僕も視線を落とす。

「だから父さんの会社の前で見張ってたら、帰る駅と反対方向に行くから追いかけてきた。まさかこんな店で……、こんな格好してるとは思わなかったけど」

どうぞこの手を取ってください

正直、受けた衝撃は父親が浮気しているのではないかと考えた時より上だ。父親が女装してバーにいるなんて方に一つも思わない。

「……浮気はしていない。一度も」

「ああ、そう。じゃあ、その格好の説明をしてくれる？ 父さんにそんな趣味があるなんて全く知らなかったんだけど」

冷静さなんて欠片もない僕の声に、彼が哀しそうに笑う。初めて見る表情だった。

「これは……、この格好をするようになったのは、本当にここ最近なんだ。お前が大学に行くために家を出た頃ぐらいかな」

彼は烏龍茶のグラスに手をかける。その筋張った手が、先日の夕食の時に白米を口に運ぶために箸を持っていた手と同じだった。

「お前が怒るのも当然だと思う。正しい社会人みたいな顔をして、進路や就職に対してごちゃごちゃ言ったくせに、その裏でこんなことをしているのかって思ってるんだろう」

「……」

説明するのが難しいんだが、と彼は息をついて話し出した。

「厳しくするのが父親だと思ってたんだ。俺は。それが父親の役割だと思っていた。子どもが良い学校に行って、苦勞せずに良い会社に行けるようにサポートするのが父親の役目だと思ってた。実は、俺も昔は本が好きで文学部に行きたかった。でも、父親がそれを許してくれなかった。もっと分かりやすく手に職をつけられる所を選べと」

初めて聞くことに、口をぼかんと開けてしまう。

「だからお前が文学部に行きたいと言いだした時に俺も反対した。出版社に聞しても、倍率が高くて苦勞することを知っていたから勧められなかった。……いや、分からん。純粋にお前に苦勞してほしくないだけだというより、嫉妬もあったのかもしれない。俺が行けなかった道を進むということに、反発してただけかもしれない」

父親が顔を覆う。彼の中で、言葉や思考が渦巻いているのが分かった。

「で、その格好がその話とどう繋がるの」

「この格好は……、その反動と言ってもいいかもしれない。父親として、父親としてこう振舞わないと、こう言わないと、敵しくしないといけない、と思うほどにひどく息が詰まっている自分に気がついた。苦しくて……。桜も学校に行けなくなつて、俺が桜の世話をしなければならぬ、麻里子も家にいないし、何を考えているのかもさっぱり分からないし、俺が全てやらなければならなかった」

しなければならぬ。その言葉が父さんの身体に絡みついて見えるようだった。

「そんな時に偶然この店と出会つて。最初は冗談交じりに『変身』することを勧められたんだ。ほら、さっき酒を出してくれた店員の彼に」

紫色に塗られた彼の目の端が思い出された。あの人が。

「化粧してもらつて、衣装もカツラも貸してもらつて。初めてこの格好をした時に、驚いた。鏡を見て……。俺は、何者でもなかった。お前と桜の父親でもなかった。麻里子の夫でもなかつた」

どうぞこの手を取ってください

た。ただの会社員でも、文学部に行けなかった自分でもなかった」

父親の手が赤いドレスの生地を撫でる。

「誰でもない自分になれたんだ、俺は、この格好をすることだ」

もう父親に対する苛立ちはすっかり消えていた。彼が苦しんでいたのだと気がつく。父親であること、夫であること、その他全ての役割にすりつぶされそうになって、声を出さずに呻いていた。

ただ悲しかった。僕の知らない父親の姿がある。僕の知らない父親の悩みがあった。それに今まで全く気がついていなかったこと。彼は家族であるけれど、同時に他人でもあり、僕とは全く異なった人間であること。

父親は顔を伏せて、もうそれ以上何も言わなかった。いつも伸びている彼の背筋は緩く曲がっていた。

父さん、と呼びかけようとして口をつぐむ。そう呼んでいいのだろうか。彼を、本当にそう呼んでいいのだろうか？

父親を店に残して帰ってきた僕は何とも言えない気持ちでいた。思考がいろんな所に散らばってまとめられなかった。

家の中は暗くりビングには電気が点いていなかった。麻里子さんの姿は見えない。桜は、と心

配になって彼の部屋へ向かう。

桜の部屋には電気が点いているようで、ドアの隙間から光が漏れ出している。そのドアを開ける。開けきってから、自分が扉をノックせずに部屋に入ってしまったことに気がつく。

ベッドに腰掛けていた桜は、急に現れた僕を見てひどく驚いた顔をした。謝ろうと口を開く。けれど、桜が手に持っていた何かをとっさに隠そうとしたのが見えた。

「……それ」

見覚えのある青い表紙だった。僕の部屋にあるはずの、僕が小説を書き連ねていたあのノート。桜に近づいて無理矢理それを奪う。彼は慌てて手を伸ばすけれど、足が動かないせいでさっと離れた僕には届かなかった。その表紙には6という数字が振られている。僕が自室で見つけられなかったノートだ。

「何で桜が持つてるんだよ、これ。……まさか読んでた？」

彼の顔には明らかに、しまった、という表情が浮かんでいた。かあっと頬が熱くなる。恥ずかしさ、気まずさ、苛立ち。

「勝手に……。何してるんだよ！他に本なんて山ほどあるだろ、わざわざ探してまで何でこんなものを」

こんなものを、という言葉聞いて桜が首を振る。こんなものなんて言わないでほしい、というように。そして僕の手からノートを取り戻そうとする。その姿にますます苛立ちがつのる。

「何だよ、こんなものだろ。こんなもの書き続けて、作家にもなれないで、出版社にも就職でき

どうぞこの手を取ってください

なくて、それでも本を諦めきれなくて。本屋とか見ろよ、あんなに本が並んでいるのに僕はその一つを作ることにだって関われやしないんだ。本の流通だって大事な仕事の一つだけど、本を生み出す役割じゃない」

父親の件で混乱しているせいか、口から流れ出してくる言葉が止まらなかった。今まで口にしていなかったけれど、ずっと思っていたことが内臓ごと口から飛び出してきそう。

父親の言葉が勝手に反芻される。それに対抗するように叫ぶ。

「誰でもない自分になることが嬉しいなんて。僕は誰にもなれない、望んだ誰かにはなれない」力を込めてノートを床に叩きつける。その音に桜が耳を塞ぐ。僕はそのまま部屋を出て行く。視界の端で、桜がノートを拾い上げるのが見える。彼は床にぶつかって曲がったノートを抱きしめる。そして深く深く項垂れる。

家を出て、走る。もう頭の中がめちゃくちゃだった。息が切れて、足は重くなり、次第にスピードが落ちて走りは歩みに変わる。けれど進み続けるのを止められなかった。僕の身体はどんどん家から離れていく。

道が開ける。いつの間にか辿り着いていたのは河川敷だった。広く流れる川に沿って遊歩道が長く伸びている。僕はひたすらそこを歩き続ける。強い風が前髪を巻き取ってたなびかせる。夜の河川敷には誰もいない。ただ水が流れる音が遠くで聞こえる。大量の水と一緒に僕も進み続ける。

どのくらい遠くまで来ただろう。ふと気がつく、道の先に誰かが歩いているのが見えた。こんな時間に、僕以外にも人が。

その人は僕と同じ方向に歩いているらしく、こちらに向いた背中が見える。ふわふわにカールした長めの髪。思わず、あ、と声が出る。その人は麻里子さんだった。

そういえば家に帰ってなかったな。こんな時間にこんな場所で何をしているんだろう、と反射的に後を追いかける。彼女は僕には気がついていないようで、川にも河川敷に咲く花にも目を向けず、ずっと真つすぐに歩き続けている。声をかけようか迷いながらついていく。やがて川幅はどんとんと広くなり、風にべたつきが混ざるようになり、潮の匂いが香るようになる。海が近いのだ。川と海の境目を足早に過ぎていく麻里子さんはやはり一度も振り返らない。

やがて川は完全に海に飲み込まれてしまい、河川敷の遊歩道だった道は砂浜へと続く道となる。ブーツでざくざくと細かい粒の砂を踏みしめながら麻里子さんは歩き続ける。波打ち際に辿り着いた彼女はそこでようやく足を止める。これ以上先には行けない、と諦めるように。

そして彼女はそのまま海を眺め続ける。寄せて返す波のその向こうを、波がやって来るよりもずっと先の場所を探すように。一人で海辺に立ち続ける彼女は孤独だった。けれど、その姿にはほのかな安らぎも感じられた。ついさっき薄暗い店内の中で見た、ドレス姿の父親が思い出された。曲がった背中をした彼も孤独そうに見えたけれど、そこには開放感とかすかな満足が見てとれた。

二人は似ている。こうして見てみると。

どうぞこの手を取ってください

携帯を取り出して電話をかけてみる。僕から離れたところで、少し遅れて麻里子さんがこそごとポケットを探り、電話をとるのが見えた。

『……はい』

彼女の声が耳元で聞こえた。少し掠れた弱々しい声。僕だよ、と言うと彼女は、ええ、と応えた。「今、どこにいるの」

そう尋ねると、彼女はしばらく黙った。スマートフォンを耳に押しあてながら砂浜に立つ彼女を見る。麻里子さんは遠くを見つめながら立ち尽くしている。

『……ごめんね』

電話の向こうから鼻をすする音がした。

彼女も父さんと同じなのだ気がつく。昔も今も急に家を空けてしていたことは、浮気なんてものではなかったのだ。きっとこんな風にどこまでも歩き続けたのだろう。家からできる限り離れようとして。母親であることから、離れようとして。母さんと呼ばせてくれず麻里子さんと呼ばせるのも、自分を母親というものに当てはめてほしくなかっただけにすぎない。

『あなたたちのことが嫌いなわけじゃないのよ』

鼻の奥に強く潮の匂いがぶつかってくる。風はどんどん強くなる。

『上手くできないだけなの』

時々発作のように母親という役割への憧れが、彼女を蝕むことがあると思っていた。いつもしないのに、突然凝った料理を作ってみたりしていた彼女。けれどそれは発作なんかではなく、彼

女なりの努力だったのかもしれない。彼女なりに、彼女なりの母親になるうとしていただけだったのかもしれない。だけどその努力は結局いつも実を結ばず、ただ逃げるように家から離れることしかできない。できないことに向き合い続けることは苦しい。僕はさっき桜に投げつけた言葉を思い出す。僕は誰にもなれない、望んだ誰かにはなれない。僕は彼女に似ている。彼女は母親になれなかった。何も言わずに我慢して家に居る、自分の望んだ母親にはなれなかった。僕たちは似ている。ひどく不器用なところが、なりたいたいものになれずにもがき続けるところが。

彼女はずっと、風に吹かれながら海辺に立ち続けている。

気がついたことがある。これだけばらばらな方向を向いていた僕たち家族が今までやっと家族の形を保っていたのは、桜のことが大きかったのだと。

僕と桜が小さかった頃は、父も母も父親と母親としての役割を問答無用で果たすしかなかった。たとえその役割に気詰まりや違和感を覚えても。でも、僕らが成長して、自分のことが自分でできるようになってからは両親は次第に僕らから離れていった。そして、僕自身も家から離れる選択を考えるようになった。それを結びつけたのは間違いなく桜だった。桜が健康であれば、皆自分のことを優先してそれぞれの楽な方向に進んでいただろう。

桜は、言うなれば川底に留まった大きな石だった。川底で、誰にも気づかれないまま静かに水の流れを変えていた。もしくは地面にしっかりと根を張った植物だった。伸びた根のおかげで僕

どうぞこの手を取ってください

らの地盤はしっかりと固定されていた。しかしそれは全て、桜がどこにも行かずに留まることと引き換えにして得られたものだった。

桜、今なら君が歩けなくなった理由が、歩こうとしなくなった原因が分かる。ばらばらになる僕ら家族を繋ぎとめるために、留まることを決めてくれたんだろう。自分はどこにも行かないことを。

飛びつくようにして玄関のドアを開ける。玄関に鍵はかかっていなかった。家の中はやっぱり暗くて誰の気配もしない。桜の部屋に急ぐ。

桜の部屋は電気が点いたままだったけれど桜自身はそこにはいなかった。車椅子もベッドの脇に置きっぱなしだ。ベッドの上には僕が投げ捨てたノートがそっと置かれていた。ついてしまった折り目を一生懸命に伸ばした跡があった。思わず唇を噛む。

桜の名前を呼びながら家中を探し回ったけれどどこにもいない。桜が他に居そうな場所と言えば一つしか思いつかない。

夜のひんやりと冷たい空気の中を全速力で走ってきた僕を見ても、榎本さんは何も訊かなかった。もうとっくに営業時間を過ぎたはずの植物園の入り口に彼女は立っていた。彼女は園内へと続く従業員用の勝手口を指さした。

「本当は駄目なんですけどね。常連様ですから」
ありがとう、と言うと彼女は小さく微笑んだ。

勝手口から入ると、薄暗い園内は昼に來た時と随分印象が違つて見えた。僕と榎さんが話していた入り口近くの花壇。変わらず美しい花が咲いている。奥へと進んでいくと道はどんどん狭くなつて、ある地点で急に開けた。

そこには入り口にあるよりもずっと大きな花壇があつて、一面にピンクの花が植えられていた。小さな花びらが沢山寄り集まつて形作られたそれらはとても美しい。花壇に付けられた説明書きには、それらがバーベナの花だと書かれていた。

花壇の縁に誰かがうずくまつていることに気がつく。驚きはしなかつた。そつと近づいてみる。彼は顔を伏せて自らの脚を投げ出すようにして花壇に寄りかかつていた。その足の裏には細かい傷がいっぱい走つていて、ところどころに血が滲んでいる。爪の中には土が入り込んでいて、よく見れば着ている服にも破れているところがいくつかあつて、ここに来るまでに何度も転んだのかもしれない。

「桜」

彼の名前を呼ぶと、彼は肩を震わせてゆっくりと顔を上げた。そして僕がここに居ることに驚いたように目を丸くする。

「迎えに來たよ」

僕の言葉に彼は眉をひそめる。意図が分からない、と言ふみたいに。僕はしゃがみこんで彼と目を合わせる。

「さっきは酷いこと言つてごめん」

どうぞこの手を取ってください

そう言いながら、まるで小さな子ども同士がケンカをして仲直りする時みたいだと思う。

「桜。気がついたことと、考えたことがあるんだ。桜は、ずっと僕たち家族を繋ぎとめようとしてくれたんだよね」

彼は、何を言われるのだろうかと怯えた目をしている。僕の言葉には頷かなかった。

「自分がどこにも行かないことと引き換えにして。ごめんね、僕はずっと気がついていなかった。それどころか僕は君を置いて家を出た」

桜のことを思う。僕がいなくなつて、麻里子さんがいなくなつて、父親がいなくなった家で、彼は一生懸命考えていたのだ。

「桜、もういいんだよ。僕らのことを繋ぎ留めなくていい、君は自分の行きたい場所に歩いて行っていいんだよ」

首が取れそうなほど強く、彼が頭を横に振る。いやだ、と。その様子を見て、桜は怖かったんだ、と思う。家族から離れて、一人で歩き出すことが。家族は、生まれてから今まででいちばん長い時間を一緒に過ごした存在だ。それを失うということに、彼はひどく怯えていた。

父親としてやらなければならぬことに対して息が詰まり、ひっそりと全ての役割から解放されて、誰でもない自分になることに開放感を抱いた父さん。母親を目指したけれど上手くいかず、家から離れて目を背けなければやっていけなかった麻里子さん。全身で家族を引き留めていた桜。

そして、自分のことを望んだ誰にもなれない存在であると思っっている僕。いや、思っていた僕。僕はようやく気がついた。誰かになろうとする前に、僕はそもそも彼の息子であり、彼女の息子

であり、桜の兄であったことを。

「一人で歩くのが怖いなら、僕がいるよ。僕と一緒に来ればいい。ちょっと勤務地がどこになるかは分からないけど、僕が就職したら僕の所に来て一緒に暮らそう」

桜が大きく瞬きを繰り返す。

桜の方に手を差し出す。どうかこの手を取ってほしい。そして、歩き出してほしい。僕ら家族は、一度離れるべきだ。一度離れて、それぞれを見つめ直すべきだ。僕らはそれぞれ助けを求めて、空中に手を伸ばしていた。けれどその方向はてんでばらばらで、誰も手を取り合うことができなかった。離れることで、両親は父親と母親という役割から解放される。家族が離れ合うことで、僕たちがどうなっていくかは分からない。また僕らが一つになることがあるかもしれないし、もしかしたらずっとこのままばらばらになってしまうかもしれない。そうだっていいと思う。それで皆が幸せなら。どうせ、僕らに血のつながりがあるという事実は変わらないのだから。

「桜」

彼の顔がくしゃりと崩れて、その両目から雨のように水滴がこぼれてくる。その水滴は、頬をすべって落ちていく。

「……お兄ちゃん」

ささやくような声で呼ばれる。僕の手の平に、熱い感触が押しつけられる。力強く、彼の指が僕の手を包んでいく。

Sun Girl noNcolor Table Campus —

中村 昌 稀

微かに風の冷たさを感じつつも、少し先の青葉日和を想像する春のはじめ。

いつもより太陽が高く感じる朝十時に、俺は卒業して三日しか経っていない母校、白樺小学校に戻ってきた。

今日は三月最後の土曜日。下級生たちはもう春休みなのだろうか、学校には俺以外の生徒は一人も見当たらない。なんだ、誰か知ってるやつがいたら卒業生面してやろうと思っていたのに。少し早めの春休みをすでにスタートさせていた俺はもうすっかり中学生気分だ。

靴箱で持ってきた上履きに履き替え、廊下を進んでいく。トン、トン。という足音が校舎全部に響く。卒業式で豪華に飾りつけられていた廊下や階段は綺麗に片づけられている。ランドセルを背負わずに上る学校の階段はやけに一段一段が狭く感じた。そして、三階にある俺たちの教室に辿り着く。毎日通っていた六年二組の教室は思い出なんて微塵も感じられない静かな空間になっ

ていた。

綺麗に消された黒板ときっかり並んだ机だけしかなかった。空しいとか、悲しいとか、昨日は湧いてこなかった感想が胸の中で溢れかえる。

(きっと、この学校もいつか無くなるんだろうな)

「えっ？」

自分の言葉とは思えないほど冷酷な感想に、ゾクリと嫌な寒気が全身を走った。大きく頭を左右に振る。何を考えているんだ。

そもそも、休日の学校とはこういうものだった。忘れ物を取りに一人で学校に行った時の不安感と高揚感の前から感じていた。今はそこに少しだけ寂しいという気持ちがあるだけだ。

……恥ずかしくなってきた。これも全部、あいつのせいだ。

「はぁ……」

俺は開けっ放しになっていた教室のドアの前で、今更になって深いため息をついた。

(何をしているんだろう、俺は)

これはきっと、現実逃避だ。今からやることを、本当はやりたくないのかもしれない。俺は何度目とも分らない自問自答を繰り返す。

(本当にするのか？ それで何になるというんだ)

昨日からずっと俺を悩ませている理性は、犯行予定現場に来て尚、強く拒絶してくる。分かっているさ、今からやるのが悪いことなんて。

でも、それよりもよっぽど激しく俺の中でナニカが暴れまわるのだから、仕方ない。くそう、こんなことなら昨日学校にこなければよかった。

何を隠そう、俺は昨日もこの学校、この教室に来ている。

俺は二日連続で小学校に登校していた。春休みだというのに、卒業したというのに、だ。もはや皆勤賞の上の賞でも貰いたい。

「はあ……」

アホみたいなきことを考えている自分に呆れて、もう一度大きく息を吐き捨てた。もう諦めてくれ、俺の理性よ。クレヨンを教室に忘れた時からこうなることは決まっていたんだ。

右手に持った相棒の二十色クレヨンをギュッと握りしめて決意を新たにす。俺をここに連れてきたのはお前なんだから、お前も共犯だぞ。

責任をクレヨンに投げつけて、俺は教室に侵入した。昨日の夕方に来た時よりも暗いような気がする。この教室に差し込んでくる光は、何故か朝が一番弱い。

ゆっくりと教室前方を横切って進んでいく。ひんやりした空気を裂いて歩き、教卓を過ぎ、校舎に面した窓側、先生の机の正面にある教室の一番、左前の席に辿り着く。

カチャと鍵を外して、カラカラと軽い窓を全開にする。ツンと鼻の奥を刺すような風と共に、落ち葉のような蕾のような匂いが俺を襲ってきた。

俺はこの感覚が好きだ。

季節、時間、天気、全て同じ日なんて存在しない。窓を開けた瞬間に届く風は一期一会の特別なものだ。忘れたくないのに、覚えていられないほど一瞬の出会い。そんな大好きだけど二度とは会えない焦れったさに少し目を細めてしまう。

そして、眼を見開いて窓の外を視界一杯に吸い込んだ。

昨日は夕焼けに染まった赤い空に、乾いた地面の薄茶色が競うように映えていた。でも、今はまるで違う。

朝のやや青い陽の光と、自然のものにしては彩度が高すぎる新緑が、お互いの色を褒め合うように強調し合っている。

どちらの方が好きかなんて、そんなの決められない。どっちも大好きな、俺の大事な一番の景色だ。

そうだ、だから。

俺が一番だったから、今日この教室に侵入したのだ。なにも間違っちゃいない。ただ大好きな景色を“未完成”のまま終わらせたくないだけ。

描きたい衝動がもう、止まらなくなっていた。

俺は空気を大きく飲み込んで、椅子を引く。机の正面に立って、腕を組む。仁王立ちして、この上なく憎らしい傑作を見下ろした。

教室の隅っこにある机の上には、俺の大好きな窓から見える景色が描かれていた。濃い鉛筆で余すところなんて全く無く、もはや机の縁の曲線まで線が飛び出して、それはもう机のいっぱいばいに描かれていた。

この学習机というキャンパスに描かれたモノクロの絵画は、傑作である。ただ、そこには色が無い。

“色が無いなんて、寂しいじゃん”

だから、俺はクレヨンを机の上にぶちまけた。からから、と乾いた音を立ててクレヨンが転がっていく。数本落ちたが気にしない。

俺が今からする悪いことは、この傑作を完成させること。

俺の犯罪とはつまるところ、計画的なラクガキのことだった。

最初は何かから塗ってやろうか。

クレヨンを握る手は熱を持っていて、使命感すら感じてきた。

とりあえず、一年中変化が少ないグラウンドから。ベージュと、茶色と、白と黒と緑。トラック全体に塗り広げる。

この色で思い浮かぶのは運動会だ。学年競技は大縄だった。全四クラスの中で二位だったが、これはただの二位ではない。

これまでの練習ではずっと最下位だったのに、本番では大躍進の二位になったのだ。あいつと一緒に手首を掴み合って跳んだのも、良い思い出だ。

次に周囲の遊具。最も細かく描写されているから慎重に進めなければならない。いくら机といえども何度も塗り直しをするのは全体の完成度を下げかねない。

遊具を塗り終わると、次は立派な樹木に取り掛かる。校庭を一周している木々は緑の葉をつけるばかりで一体何色の花をつけるのかすら知らない。

頭を捻りながら進めると、これはすぐに塗り終わってしまった。時計を見ると、一時間しか経っていない。存外にこれは仕上がるのが早いかもしれない。

土手は柔らかく塗りたい。足の長い草の隙間には様々な植物が隠れている。下校途中に小川に立ち寄るたびに季節の変化を真っ先に知らせてくれる。タンポポ、菜の花、つくし、紫の花、ス

スキ、落ち葉。

この景色の中で一番目立たないけど、愛情をしっかりと込めた土手は大満足の塗り上がりになった。

さあ、次は空だ。これは難しい。俺は別に雨が嫌いじゃないから、とりあえず青空にしようというのも納得がいかない。そんなことを思っているとどンドン雲が増えていく。いや、これは流石に今の心情が出過ぎだ。

四苦八苦しながら塗り切るが、これでよかったのだろうか。体感はこの部分の二倍以上の時間がかかっているのに、まるで手応えがない。

そして、最も難しい裏山に突入する。ベースの色を決め、偏りを付けて塗り広げる。あらゆる色を使い、窓から見た一年間の移ろいを全部乗せる。時には椅子の上立って俯瞰しながら進めていく。

ようやく塗りあがった時には、多色で厚塗りの山が出来上がった。これが化粧なら確実に厚化粧で大失敗だろう。

そうして、全部を塗り終わり立ち上がって全体を見下ろしてみる。

そこには調和とバランスという言葉に対する挑戦状みたいな作品が出来上がっていた。

……これはひどい。

『教室の窓から見える景色のカオス仕立て〜天変地異と地獄を添えて〜』とタイトルを付けてもギリギリ信じてもらえるかもしれないほど。今ならピカソの絵すら共感してあげられるかもしれ

れない。

でも塗りなおそうとは思わない。

寧ろ、いい出来じゃないか。これでいい。この絵を見るのは先生だけだろうか、それとも用務員の人だろうか。本当は見せたい人がいるけれど、喜んでもらえるとは全く思えないし、もし自分が逆の立場だったら悲しむだろう。だから、これでいい。

元々俺はこういう気質があった。何かを描こうとすると、無意識のうちに誇張してしまっただけで違和感が出てしまいがちだった。

だが、それも個性だと言われた。現に、ここ五年間は毎年夏の絵画コンクールで入賞しているのだから。

うん、これでいい。蛇足くらいが、ちょうどいい。

全部、塗ってあげたはずだ。

満足だ。

……。

……。

………ほんとうに？

今更になって少し不安な気持ちが込み上げてくる。この作品には自信がある。

だったら、この不安は別のもの。

立ち上がり、外の景色を見る。もう正午を過ぎた校庭から吹き込んでくる風は強く、砂が混じっ

た少しザラついたものだった。

また、机を見下ろしてみる。窓から吹き込んできた風と共に、微かな違和感がざわりと俺の内側を撫でてきた。

やっぱりナニカが足りない。

三日月の先っぽが丸いような、ナニカが欠けているという、漠然とした不安。色の問題だろうか、それとも何か描写されていないのか？

俺は外の景色と机の絵を凝視するが、違うのは漂う雲くらいのもので他の線画はとんでもなく精巧に描かれている。本当にありのまま、悔しいほどに。

じゃあ何が足りない？

俺は一步、二歩、窓枠から遠ざかりながら考える。デッサンをする時によくやる調整方法だ。少しずつ距離を離して違和感の正体を探る。

そして、隣にある自分の席まで来た瞬間——

「あっ」

——ハッと気付く。あいつがいない。

いつも俺が見ていた景色には、この席の主がいた。それは横顔か、綺麗な黒髪か、寝顔か、俺に向けられた顔か、いずれにせよ、あいつがいない。

バタバタと慌てて消しゴムを手を取った。けど、消しゴムが線に当たる直前で思い直す。それは、ダメじゃないか？

この絵は俺だけのものじゃない。

だから意味があるのに。だから、誰にも見られなくてもよかったのに。

もしもこの鉛筆で描かれていた線画を変えてしまったら、それは意味が無くなるのではないだろうか。俺の犯罪が、本当に無意味な悪いことになってしまっているのではないだろうか。

これまでも消しゴムは何回も使ったが、線画は消さないように、細心の注意を払った。俺はあくまで空白部分を使っただけ。だから、悪いことではないと自分に言い聞かせていた。

もしもあいつをこの絵に入れようとするなら、線画を消さなければいけない。それは、あいつの作品への冒涇になるのじゃないだろうか。

俺が犯罪だと、悪いことだと怯えていたのは、校則違反だからではない。理性なんて、最初からただの現実逃避だ。

本当はあいつの描いた作品に、勝手に色を付けることに怯えていたのだ。

そして、この行為がもしかしたらまたあいつを傷つけてしまうんじゃないか、最低な裏切りなんじゃないか、そんなことばかりが気になって仕方が無かった。

そんなことをしたら、俺があいつにまた嫌われる。

ジリジリと背中から汗が零れていく。急に喉がカラカラに渴く。

じゃあ、消しちゃダメだ。でも、だけど。

この絵に込めたいメッセージには、どうしてもあいつが必要だ。

見てもらえるわけないから、だからこそせめて絵の中のあいつには見てほしい。

もう、二度と俺たちが見ることが出来ない景色を——

「おい、なにしてるんだ」

「えっ」

突然俺の頭上から、無音の教室に聞きなれた声が響く。

全身の体温が床に抜けていき、怯えながら声のした真上を仰ぎ見る。俺の真後ろで、担任の布川先生が訝しんだ顔をして、俺の手元を凝視していた。

俺の悪行は完成することなく白日の下に晒されることになった。

シクシクと、葉っぱが風で掠れる音を聞きながら、俺は自分の席に座って天井を見上げていた。チクタクと、先生の説教の時くらいにしか聞こえることのない教室の時計の針がやけに大きく感じる。

漠然と、何も考えられないまま。布川先生が教室に来了数分間のことを脳裏で繰り返し返していた。視線を真上に上げた俺の視界全体を覆っていた、あの髭面は一生忘れないだろうと思うほどの恐怖体験だった。

それなのに、俺は咄嗟に机を隠すように覆い被さっていた。この絵を、守ろうとしてしまった。

俺の作品じゃないというのに。

布川先生は少しだけ目を見開いて、静かに話し始めた。

「そうか、仲良かったもんな」

「……え？」

怯えるばかりだった俺の頭に片手をポンと一度置いて、布川先生は授業中の居眠りを注意するくらい軽い調子で俺に言葉を投げかけてきた。

「ちゃんと、消しとけよ」

床に落ちていた緑色のクレヨンを拾って机に置いてくれた後、まるで掃除当番の場所を回っていくかのように立ち去って行った。

あっけない。

拍子抜けする、というのはこういうことを言うのだろう。バレたら絶対に怒られると思っている。だから休みの日、誰もいない土曜日を選んで机に色を塗っていたのだ。

それなのに、先生は怒るところか俺に感謝すらしてきた。教室から出ていく瞬間、先生は手を振りながらこう言った。

「湊、ありがとうな。アサヒはお前がいたから毎日学校に来てたんだと思うぞ」

一回も振り返ることなく、わざわざ「みなと」という俺の名前を口にしてまでありがとう、と言った。

そして、俺のお陰で「アサヒ」が学校に来ていたのだと言い残した。

その言葉が全く理解できなかった。

そのせいでまた何も考えられなくなっていた。

だってアサヒは、あいつは俺のことなんて大嫌いになったはずだから。

アサヒ、とは苗字である。

旭望（アサヒノゾミ）通称アサヒだ。のぞみという名前の女の子が学年にもう一人いたせいで俺の隣の席ののぞみは、某大手企業のような呼ばれ方になった。

俺が初めて旭望の名前を見たのは、小学二年生の秋だった。

毎年夏休みの宿題に、市民文化ホールで行われる児童絵画展の絵を描く宿題がある。

元々絵を描くのが好きだった俺はこの宿題が好きだった。二年生の時に出したホワイトタイガーの絵が入賞して、初めて市民文化ホールに展示された。

文化ホールには地元の小学校から集められた全六学年の色んな絵が展示してあった。中には、何の絵か分からないような作品もちらはら見受けられて、ここに飾られている自分の絵はどう見えるのか不安になった。

空に跨る線路、黄色い海の中のクラゲ、紫色の桜並木。奇々怪々な色が混ざり合ったマーブルなホールを進んでいくと、お父さんがあれだ！と声をあげた。

仰々しく飾られた絵を家族全員で囲んで鑑賞した。家族が必要以上に褒めるものだから俺は顔を伏せて恥ずかしくなって俺の絵の前を離れた。隣のブースに移動しようとした瞬間にお父さんに少し茶化すように笑われて、つい振り向こうとしてしまった。

その時だった。

俺の絵の隣に窓があった。

その時俺は本気でそう思った。

きっと俺の絵の隣には窓があって、ホールの中庭の木々が見えているのだろうと。

でも、その窓の中の木の枝は斜めのまま真っすぐに戻ることは無く、落ちる葉っぱは空中で静止していた。

時間が止まったかのような数秒間を経て、ようやく俺はそれが絵なのだと理解した。

嘘みたいだった。そこには、俺の知らない景色が映っていた。それなのに、俺はそれを見たことがあるような気がして仕方が無かった。

これは俺が見ている視界だと錯覚するほどに、その絵は綺麗だった。

俺はその絵を見て、あまりに多くの初めてを知った。色と色が絵の中で混ざり合って別の色になってもいいこと。輪郭がぼやけていてもいいこと。黒色以外の影があること。

そして、絵は俺の見た綺麗な景色を、心の感じた形のまま、ありのままに映し出すことが出来ること。

俺の心を大きく揺さぶった絵の下には、「題名…お庭 名前…旭望」と書いてあった。

それから早かった。隣のクラスに旭望がいることを知った俺は朝イチで隣のクラスに突撃した。

まだ朝の会の三十分以上前、皆は外で遊んでいる時間にも関わらず、旭望は教室の中にいた。

一番前の机で黙々と自由帳に絵を描いている真っ黒な髪の子。顔は知らない。でも、一目見てあいつだと直感した。

俺は旭望の机の正面に行き、目線を揃えてこう言った。

「おまえが、旭望だな？」

本当に最低な初対面の挨拶だったと思う。話しかけられて初めて俺に気付いたあいつは、それはびびりして泣き出した。レンズが大きなメガネの奥で、小さく見える瞳をビー玉のように丸くしていた。

「えっ、あ……うん」

「そうなんだ」

旭望がどんなやつなのか確認したかっただけの俺は、ただ一つ頷くだけで教室を後にした。

俺はあいつを絵がとんでもなく上手な妖怪か何かだと思っていた。

定期的に旭望に自由帳を見せてもらっては無言で去っていく。そんなことを繰り返すようになった。

今思うとあいつもよくこんな訳の分からない男子に自分の自由帳を見せていたものだ。俺に自由帳を見られている時間は微動だにせず固まっていたから、きつと内心ビクビクしていたに違いない。

ない。可哀そうなことをしていたと少し反省している。とうかまず俺が逆の立場なら絶対に見せない。何なら先生に相談する。その時期、俺は絵の勉強も始めた。

旭望に勝ちたい、という気持ちもあったけど、まだあの時はどうして絵が上手になりたいのか自分でも分かっていた。『はじめての風景画』という本を買ってもらって、休みの日には絵を描くようになった。

そうして、三年生になってまた児童絵画展に入賞した。その時は、一番近くの山の頂上にある稲荷大社を描いた。

汗だくになって、立派な鳥居とその奥にある神社を三日かけて描き上げた。力作だった。

入賞した時はとても嬉しかった。やっぱり評価してもらえるのだと、自分の画力に自信が付いた。そうして展示会に行った。

そこには、やっぱり大袈裟に俺の絵が飾ってあって、やっぱり家族で絵を囲んで鑑賞した。恥ずかしくは無かったけど、俺は残念な気持ちになっていた。

どうしても、俺の絵は窓には見えないのだ。俺が見た稲荷大社は大きかった。暑かった。怖かった。綺麗だった。

でも、それを俺の絵からは全く感じない。上手くなったとは思う。なんなら、同じクラスの誰よりも上手になったと思う。でも、全く満足出来なかった。

落ち込んでいた俺は旭望の絵を観るかどうか躊躇っていた。奥に進めば必ずあるとんでもない出来の絵を観るのが恐ろしかった。

でも、足を止めることは出来なかった。定期的に見せてもらう自由帳に描いてある絵はただの練習用の絵だった。それなのに、どれもこれも飾ってしまいたいほど綺麗だった。

なら、本気の絵はどのようなのだろうか。

絵を勉強した今の俺が、本気の旭望の絵を観たらどう思うのだろうか。そうして、俺はやっぱ旭望の絵を観てしまった。

そこには、まるで俺への当てつけのように全く同じ構図、全く同じ角度から描いた稲荷大社があった。鳥居は赤色をほとんど使わずに赤色を再現していて神社の神々しさを醸し出していた。大きなしめ縄は画用紙が藁になってしまったように見えるし、地面の石畳は苔の匂いすら感じそうだった。

悔しいと思った。負けたと思った。どうしてと思った。

でも、そんな感情は些細なものだった。俺は嬉しくて仕方なかった。

俺が綺麗だと感じた景色を、あの旭望も同じように綺麗だと受け取っていること。俺が二度と見れないと感じる一瞬の綺麗なものを絵の中に残してくれていること。

あいつは妖怪じゃなくて魔法使いだと思った。

そして、弟子入りすることを決めた。

「なあ、弟子にしてくれ」

「みなと君、今日はいつも以上に変だね」

旭望はもう俺の前で緊張することは無くなっていて、弟子入りの話も冗談として受け流された。

でも、俺は本気だった。休み時間にクレヨンとキャンパスを乗せた机を丸ごと抱えて教室に来た俺を見て、旭望があんぐりと口を大きく開けていたのをはっきりと覚えている。

四年生になった俺は運よく旭望と同じクラスになった。それからは二日に一回は一緒に絵を描くようになった。

同じテーマで絵を描いたり、お互いの絵を見せ合ったり、俺の買った練習本を読み合ったりしていた。テンションが上がってお互いの白いTシャツに好き勝手火花を描き合ったこともあった。この頃には俺はあいつを望と呼ぶようになったし、あいつも俺のことを湊と呼ぶようになった。そして五年生になった。また同じクラスになった俺たちは一学期の図工の授業で鉛筆だけで絵を描こうという課題に対して反乱を起こした。

これまでも二人で様々な事件を起こしていたのだが、この時の主犯は間違いなく望だった。持ち帰らせてほしいと布川先生に直談判して、自分の絵を持ち帰った。そして、休日に仕上げて月曜日の朝に二人で職員室の布川先生に絵を提出した。

俺と望の絵を見た布川先生は片手を額に当てながら、「しくった……」と嘆いていた。

俺たちは自分の絵をそれはもう色鮮やかに絵の具で彩って提出したのだ。

それを見ていた隣の先生と教頭先生が大笑いをしていたのを見て、俺は望とニヤリとほくそ笑み合った。

俺はその時に耳打ちしてきた望の言葉を二度と忘れないだろう。

「色が無いなんて、寂しいじゃん」だそうだ。

この事件をきっかけに、女子たちのコイバナのターゲットにはされなくなった。どちらかとうと、刺激するとヤバそうな二人という扱いになった。元々噂されていたことは知っていたけど、どうでもよかった。でも、クラスメイトに一目置かれる二人になったことは誇らしかった。

俺はずっと、このまま二人で絵を描き続けるのだと思っていた。望とならどこまでも上手くなれると信じていた。

でも、夏休み明けの始業式、唐突にその日々は終わりを告げた。

望が夏休みの宿題の児童絵画展用の絵を描いて来なかったのだ。

そして、俺を見て一言こう言った。

「もう、師匠やめる」

俺は信じられなかった。なんで勝手に決めてんだよ。なんで絵を描いてないんだよ。勝手に師匠やめんなよ。思いつく言葉を全部望に投げつけた。

すると、ずっと黙って聞いていた望が俺の両手首をつかんで、泣きながらこう言った。

「うるさい！ 私だって描きたいよ！ 私だって、私だって……」

「じゃあ今からでも描いて来いよ。望の絵、楽しみにしてたんだぞ！」

「……ッ！ わたし……、私は……」

「望の方が絵上手な癖に勝手に師匠やめるなよ！」

「私は……！ ワタシは、もう！ 色がッ……イロが、見えないんだよ……！」

「……………は？」

「もう、私は絵が描けないんだよ」

俺は、この時人生で初めて視界が真っ白になった。

望は、徐々に眼が見えなくなる病気だった。

先天性のなんとかという病気らしい。どんどん視力が低下していき、最終的には失明する病気。そんなの、知らなかった。一回もそんな話聞いたことなかったし、メガネが変わった時も顔を近づけて絵を描き過ぎだろ、なんて思っていた。そもそも、望はそんな素振りを一切見せなかった。

あの時の俺はどうしていいのか分からなくて、何も言い返せずに一人で帰った。望を泣かせてしまった。

怒らせてしまった。

何より、傷つけてしまった。

俺が望の心の中を引っ掻きまくった。

望に対して俺は何かをしなないといけない。でも、何をできると言うのだろうか。

望を傷つけた俺自身が。

望の視力を回復させる？ 画期的な道具を作る？ 俺が一生、望の世話をする？ そんなの、

どれも俺には出来ないことだ。

今まで気づいてやれなかった自分の馬鹿さ加減が憎くて憎くて悔しくて仕方なかった。何も答えは見つからずに翌日を迎えた。

望は朝イチで俺に頭を下げて謝ってきた。

「ごめんなさい！ 私、言いすぎちゃった。もう絵は描けないけど、遊ぶことは出来るからさ、これからは他のことしようよ」

「え、あ、うん……」

「ねえ、外いこうよ。ブランコ乗りたい」

望は俺に謝罪をさせなかった。それどころか、これまで見たこと無いくらい元気だった。

二人で初めて外に出て遊んだ。

絵を描く以外の時間を過ごした。

衝撃だった。

望はよく体育を見学していた。その理由は、望が運動音痴だからだと思っていた。本人も、運動は苦手だからと言っていた。

でもそうじゃなくて、見えていなかった。

ジャングルジムは足元が見えなくて登れない。

鬼ごっこは障害物が怖くて走れない。

ドッジボールはボールを見失ってただ立っているだけ。

望は、盛大に転んで血を流しながら笑っていた。俺は、耐えられなくなった。

「保健室に行こう」望の手を引っ張って、膝を擦りむいた望と一緒に保健室に行った。保健室の先生はすごく心配していた。でも、望はずっと元気だった。泣かなかった。強かった。

そんな望を見て、俺の目から涙が一つポトリと落ちた。たった一つ。たった一つを我慢出来なかっただけに。

両目から涙が止まらなくなってしまった。

拭っても、覆っても、目蓋をギュッと閉じてても、どうしても涙が流れ続けた。

「うっ、っ。うええ」

「なんで、湊の方が泣いちゃうんだよお」

治療を受け終わった望が、泣き止み方を忘れて座り込む俺の両手を握りしめていた。

それから教室で遊ぶようになった。

トランプとか、UNOとか、ピアノとか、今まで絵しか描いてこなかった俺たちは教室でもこんなに遊べるのかとびっくりしながら満喫した。

そうして、俺たちは最高学年になり、また同じクラスになった。

六年生になるころには望はほとんど手元と30cm先くらいしか見えなくなっていて、いつでも先生が教えられるように教室の角の席に固定されていた。

そして、その隣の席には俺がいた。

俺と先生で協力して望をサポートした。

望はよく「ごめんね」と謝るようになった。

別に迷惑なんて思っていなかったから、その言葉が少し胸に引っかかった。

五月、運動会の練習が始まった。

俺はなるべく望の出る競技と一緒に出たかったが、足が速いからと二種目のリレーに出場することになった。

望は玉入れとゴミ拾い競争に参加して、近くで先生が見守ることになった。この二つの競技ならケガすることも少なそうで、俺も安心してた。六年生が取り組むことになる創作ダンスも動きを覚えてしまえば大丈夫だ。

でも、問題が一つあった。大縄跳びだ。

選抜リレーと同じく大縄跳びは毎年皆の注目の的で、各クラス昼休みに練習するほどだった。もちろん、俺たち六年二組も例に漏れず本気だった。ただ、いつまで経っても十回以上跳べなかった。

望が、跳べなかった。

眼で縄を追えない望は、感覚で跳ぶしかなかった。俺は縄のリズムに眼で合わせる事が出来る。でも、望は違う。少しでもずれると跳べなくなる。

だから、俺が望と一緒に跳んだ。

望の手を握りしめて、何が何でも引っ張り上げた。クラスの皆は縄を回す役の方を見ていたけれど。俺たちだけは縄の中心で、二人で向かい合って。細い縄は見えなくても、俺の手の合図

で跳べばいい。

その分、誰よりも二人で練習した。朝も、放課後も。絵を描いていた時のように、二人きりで。望も俺も、何度も転んで沢山怪我をした。

一緒に練習し始めてから望は全然笑わなくなった。それでも、望は弱音を吐いたりしなかった。だから、俺は絶対にやめなかったし、やめさせなかった。

そうして迎えた本番。

手汗と震えで手を離しそうになりながら、最後の方は手首に青あざを付けるほど握りしめて、必死に跳んだ。

二位になった。

嬉しい気持ちは全くなかった。苦しくて、暑くて、フラフラで、ようやく終わったと思った。競技が終わって発表を待っている間、望は泣いていた。

俺は、何も言えなかった。

ただ望の手を握り続けた。

こうすべきだと思い込んでいた。もっと、望の目を見るべきだったのに。俺は望の気持ちを何一つ分かっていなかった。

望に怪我をさせて笑顔を奪って、最後には泣かせてしまった。

後になって、望の口から跳びたいという言葉聞いていないことを思い出した。

一緒に跳ぶことを提案したのも、練習をしたのも、手を離さなかったのも、全部俺だった。もっと、望のことを考えるべきだった。

一人で勝手に絵を諦めた望が、また何かを諦めることが許せなかった。俺と一緒に跳んだのは優しさじゃなくて、逃げ出さないようにするためだった。

俺は、最低な人間だった。でも自覚していなかった。望のために、大縄跳びを成功させなきゃいけないと思っ込んでいた。

これが正しいんだと、勝手に正義の味方を気取っていた。

本当は、自分のことしか考えていなかったくせに。

運動会以降、望は俺と全く会話をしてくれなくなった。程なくして、望は授業を別教室で受けるようになった。

隣の席がすっぽり空いて初めて、俺は自分の最低さを自覚した。

なんてことをしてしまったんだろう。

なんでもっと冷静になれなかったんだろう。

なんで望に無理やり大縄をさせて苦しめたんだろう。

俺は自分が別の誰かに代わっていたんじゃないかと思うほどに、今までの自分が信じられなかった。

慌てて謝らなければと思って、給食の時間に望の給食を持って教室に行った。

初めて見る先生と、初めて見る教室。その教室に三つしかない机の右端に、望は座っていた。

給食のおぼんを持って行くと、望が点字の勉強をしていることに気付いた。そのことには触れずに、いつものように話しかけた。

「今日の給食、望の好きなミカンがあるよ」

「そうなんだ」

「なあ、昼休み、ここに来てもいい？」

「ダメ」

何の迷いもない拒絶の言葉。

そして、何の感情も読み取れないほど、冷たい声。

俺は固まって動けなくなるほどのショックを受けた。

ナニカが、決定的に終わってしまう。

そう直感して、すぐに謝った。

「ごめん、無理して大縄跳びをさせて。」

「ごめん、沢山怪我をさせて。」

「ごめん、望の気持ちを考えずに勝手なことして。」

「ごめん、ごめん、ごめん。」

思い当たる全部を吐き出して、全部を謝った。この時、望がどんな顔をしていたのかは見れなかった。

ただ、望の言葉だけが耳の奥にこびりついた。

「もう、来ないで」

それ以来、望とは会えなくなかった。

それからの時間は早かった。

望がいけないことが当たり前になって、新しい友達が出来た。文化発表会も、中学校訪問も、最後の遠足も、望は俺と離れていた。

そして卒業式。

教室で最後のお別れをする時、望はようやく俺と同じ場所に来た。最前列の端の席。俺の隣の席。薄い水色の綺麗な服を着ていた望は、俺の顔を一瞬たりとも見ることは無かった。

俺のことを意識的に無視していた。

それなのに、俺は悲しいという気持ちにならなかった。それだけのことをしたのだと、理解していたし、もう仲良く出来るなんて全く思っていなかったから。

でも、それでも。

最後に、一言だけ声を聴きたかった。

どんな言葉でもいいから、望の声を思い出したかった。

だから、俺は一切口を開かなかった。目を伏せて、口を噤んで、肩を丸めた。望とは絶対に干渉しないようにした。

今更、あれだけ傷つけておいて声を聴きたいなんて、自分勝手すぎて気持ち悪かった。最後の挨拶が終わって、望が席を立った。

望は先生に手を取られながら、俺の目の前を通り過ぎた。その瞬間。

「じゃあね」

俺の机をソッと撫でながら、望は俺に言葉をくれた。

その声は、今まで隣で聞きなれた声。

優しくて間が延びていて、女子にしては少し低い声。

俺の大好きな、一緒に絵を描いていたころの望の声。

ギョッとして望の顔を見上げた。

もう通り過ぎていて、横顔すら見えなかった。

望が許してくれたことだけが分かった。

あんなことをした俺を。

悲しい、寂しい、安心、そのどれも違う涙が勝手に流れ落ちた。

望が、優しく、強くて、カッコいい奴だったことを最後に思い出すことが出来た。望は俺のことが嫌いになったけど、忘れてはいなかった。

別れを言うくらいには、覚えてくれていた。

そのことが嬉しくて、仕方なかった。

嫌われていたのに、目も合わなかったのに。心の底から嬉しかった。

もう、これでいいやと思ってしまった。

最後まで、俺は自分のことしか考えていない最低な奴だった。

「さよなら」

教室から出ていく望の背中に、返事を投げかけた。

これで、望のことを考えるのはやめようと決めた。

苦い思い出として、心の奥に封じ込めた。

俺はこの日、謝恩会には行かなかった。

卒業式を終えた二日後、俺は荷物整理をしていた。いらぬ教科書を捨てて、小学四年生の従弟にあげる道具を見繕っていた。

その時、俺は自分の相棒が無いことに気付いた。望と絵を描くときは毎日ランドセルに入れていたクレヨン。

筆箱を忘れてクレヨンだけ学校に持って行くなんてこともよくあった。でも、望と過ごさなくなっただけ俺はクレヨンを使わなくなった。

プリントと教科書に押し込められて、机の奥に追いやられた昔の相棒。俺はよりにもよって、望との思い出のクレヨンを忘れてしまっていた。

多分、放置していれば勝手に処分されるだろう。でも俺は望との思い出を捨てたわけじゃない。だから思い出の相棒も捨てられなくなかった。

クレヨンを取り戻すために教室に向かった。

夕方の教室は薄暗くて、少し視界が悪かった。教室の電気を点けたら先生にバレる気がして、こそこそと自分の机からクレヨンを見つけ出した。

そして帰ろうとしたとき、ふと寂しくなって窓の外を見ようとしてしまった。どうせ最後だと思って、大好きだった景色を見収めようとした。柄にも無いことをしようとしたのがいけなかった。

そこには、同じ窓が二つあった。

教室の床と並行に、奥行きなんてないただの平面の木の板に、もう一つの窓があった。

Sun Girl noNcolor Table Campus—

アサヒの無彩色のテーブルキャンパス—。

そのキャンパスに描かれた、窓から見える校庭の絵。それは、傑作だった。

狭い机の中に、収まるはずの無い校庭全部が入っていた。あり得ない縮尺なのに、構図は調和がとれていて違和感が一切ない。

これを描いた人間は、この景色が大好きだということが痛いほどに伝わってきた。

それは、俺が目指した大好きなものをそのまま閉じ込めた綺麗な絵だった。

初めて展示会で絵を見た時と同じ感想。

今回はタイトルも作者の名前も書いてはいなかった。

でも、そんなの必要なかった。

この絵を描いた人間は、旭望。望だ。

誰よりも望の絵を観てきた。

望の絵が大好きだった。

憧れた。生きる目的だった。

俺は窓の景色なんて目もくれず、机にへばり付いた。

もう二度と観れないと思っていた。

新しい絵なんて、描いてくれないと思っていた。

このまま、俺はこの絵の中に沈んでいきたかった。

この絵の中はどんな匂いがするんだろう。

どんな温度で、どんな光で、どんな音がするんだろう。

この空は何色だろう。

この花は何色だろう。

この土は何色だろう。

その時、望の言葉が俺の奥から噴き出してきた。

“私はもう、色が見えない。”

こんなの、卑怯だ。

“もう絵が描けない。”って言ったじゃないか。

ウソつき。お前はまだこんな絵を描けるじゃないか。

望が俺のことを裏切ったんだ。

だったら、俺だって望を裏切ってもいいはずだ。あの頃のお前が言っていたんだ。

“色が無いなんて、寂しいじゃん。”

だから、俺は罪を犯すことにした。

望の作品に勝手に色を塗ることを決意した。それならば、俺は望の絵を傷つけずに仕返しが出来る。

あいつが諦めていた色を、俺が諦めてやらない。

これで全部終わりにしよう。

きつと俺たちに足りなかったのは、喧嘩だったんだ。

精一杯、最後の最後に俺たちのやり方で喧嘩しよう。そうすれば、俺は満足するはずだから。そう、思っていたのに。

——カツン、カツン、カツン

やけに響く誰かの足音で俺は目が覚めた。

目蓋の奥に入り込んできた色は茜色。それだけで、もうすっかり夕方になっていることが分かった。

時計を確認すると、既に十七時を過ぎていた。

開きっぱなしになっていた窓からは冷たい風が吹き込んでくる。寝起きの敏感な肌に風が突き刺さって鳥肌が立った。

いつの間に寝てしまっていたんだろう。

作品を完成させて、夢を見ていた。いや、あれは夢というより、思い出だ。きっと、罪悪感のせいであんな夢を見てしまったんだ。

——カツン、カツン、カツン

再び聞こえる誰かの足音で、俺はようやく誰かが近付いてきていることに気付いた。まさか、この教室に来る？ その可能性に辿り着いたときにはもう遅かった。

——ガラッ

教室の後方の扉が開いた音がした。

しまった！

俺は布川先生だと思って、慌てて振り返った。机の絵は、全く消えていない。それどころか、こんな時間まで教室で昼寝をする始末だ。今度こそ怒られる、そう思っただけ早く「すみません」と謝ろうとした。

でも、入ってきた人間の顔を見て咄嗟に両手で口を塞いだ。

布川先生よりも低い身長、俺よりも頭一つ分低い。黒い髪は綺麗に頸のあたりで切り揃えられ

ている。やけに目立つ赤い服は、派手過ぎる印象を受ける。

そして、その手には白い杖。

教室に入ってきたのは、望だった。

幽霊なのではないか、本気で自分の目を疑った。それでも、彼女はちゃんと生きていた。どうして？ 俺に何か用があつて？ 布川先生が連絡したのか？

沢山の可能性が脳裏に過るが、理由に心当たりは全く無かった。

そして、望は最後列を曲がって俺の方を向いた。それでも、何も言葉を発さない。望はまるで誰もいないかのように歩を進める。

ああ、この距離でも俺がいることが分からないんだ。

二年前までは、教室のどこにいても俺のことを見つけてくれていたのに。今では、見つけることも、挨拶をすることも、笑い合うことも出来なくなった。

そんな望を見ていられなくなって、俺はこっそり席を離れることにした。

音を立てないように細心の注意を払いながら、四つん這いになって遠ざかる。望の目的は分からない。けれど、多分、自分の机を指していると思う。あの絵が望をここに連れて来たんだ。

俺は、本当に泥棒になったように望に背を向けて教室を抜け出そうとする。

バクバクと心臓がうるさくて、走り出そうかとすら考えてしまう。

どうせ見えていないんだ、誰かまで分からないはず……。

そこまで考えて、俺はハタと立ち止まった。

おい、お前はどこまで最低なんだ。

どうせ見えていない、だって？ よくもそんなことが言えたもんだ。相手が見えていないからと、お前は大切だった友達を騙して、自分の保身のために利用するのか。

そんなこと、許されるわけないだろ。

心臓の鼓動が加速する。

それは緊張では無く、自分への怒りだった。

覚悟を決めていた。これは悪いことなんだと。見つかってもいい、怒られてもいい。それでもしなければいけないことだと思った。

望の作品に勝手に色を付ける、そんな悪行を自分の意思でやったんだ。

それが、正しいことだと思ったから。

なら、逃げて良いわけが無い。

最後まで、被害者である望に向き合わなければならぬ。
せめて、望がどんな顔をするのかまで見る責任がある。
望が視えていないのなら、俺は全部を視なきゃいけない。

そう思ってしまった。

俺はゆっくりと立ち上がる。手に持ったクレヨンを握りしめる。怒っているだろうか、悲しんでいるだろうか、俺は望の心をどう傷つけたのだろうか。

全部を受け入れるつもりで、覚悟を決めて振り返った。

その瞬間、はっと息を呑んだ。

そこには、眼の奥に焼き付いた大好きな景色が広がっていた。

太陽に焼かれた山肌と、照り返してくる風景の橙色。その光に照らされて影を作りながら、どんな色よりも目立つ黒髪が風で揺れていた。

授業中、転寝をしていた時に目覚めてすぐに飛び込んできた、窓枠に入り込んだ望。寝ぼけたまま、俺は望の瞳を見て「きれい」と呟いたことがある。それを聞いてしまった望はギョッと目を見開いていた。口をパクパクさせた後、ふいと顔を逸らされた。

あの時から、俺はこの景色が目焼き付いている。

机を見下ろす望の横顔からは感情が読み取れない。あの様子だと、色が塗られていることにも気付いていないようだ。

俺は黙って望を見つめ続ける。さっきまで、あんなにバレないようにしていたのに。今は早く

気付いてくれと懇願していた。

望が机に触れた。

凹凸の無い平面を、何かを探るようになぞる。それは、点字を読むかのように規則正しいものだった。

その数秒後、ふと手が止まった。

「みなと?」

俺は瞠目した。

望が、全部を見透かしたかのように俺の名前を呼んだから。その横顔は少しだけ笑っているように見えた。

いつからバレていたんだ……。

これじゃあ、一人で百面相していたのが馬鹿らしい。俺は観念して出頭した。

「はあ。望、なんで分かった——」

「——ひゃあああ!」

「うわっ、なんだよ。急に大きな声出すなよ」

「え、えっ。湊? どうしてここに……」

「いや、お前が名前呼んだんだろ」

「お、おばけ……」

「勝手に殺すな。ちゃんと本人だよ」

「なんているの？」

「……え、気付いたわけじゃなかったの？」

驚き過ぎて壁に張り付いてしまった望は、首を大きめに振って否定した。俺は、自分が早とちりしたことを理解して天を仰いだ。

しまった、勘違いだった……。

「じゃあ、なんで名前呼んだんだよ」

「それは、クレヨンのザラザラした感覚と匂いがあったから」

「クレヨンだったら、なんで俺なんだよ」

「……………」

問い詰める俺に返事を返さずに、望は再び机を指先でなぞった。

「私の絵に、色を塗ったの？」

「……………」

今度は、俺が押し黙る番になってしまった。

望の表情を見るだけのつもりだったから、説明する言葉なんて準備していなかった。だから言葉借りる。

「“色が無いなんて、寂しいじゃん”」

「あ……………」

望の昔の言葉をそのまま口にする。

これで十分伝わると思ってしまった。

この言葉だけで望も分かってしまった。

それだけ、俺たちは分かり合っていた。

「ふっ」と、くすぐったそうな声が漏れていた。

どうしようも無い、そんな言葉が聞こえそうな諦めた表情。

「ねえ、どこをどんな色で塗ったの？ 教えてよ」

「匂いで分かれよ」

「何言ってるの、無理に決まってるじゃん」

俺はまるで時間が巻き戻ったかのように軽口を叩く。そして、望の隣に並んで望の指を筆のよ
うに使いながら色の説明をした。

「芝生は長くて成長した濃い緑を多めに塗ってる」「若草の方が綺麗じゃない？」

「川沿いには四季の花たちを散りばめてるけど、黄色がメインかな」「春に引っ張られてるねえ」

「空は……まあ、雲が半分って感じだ」「えっ、私、雲ほとんど描いてなかったんだけど!？」

どの説明にもいちゃもんを付けられて、この野郎……と思ったけれど、望の方が絵が上手い事
実は変わらない。言いたいことを飲み込んで、納得する。

これが俺たちの日常だった。俺は望の絵に圧倒されて、褒めるばかり。望は俺の絵を指摘して、
指導してくれる。そんな、先生と生徒のような関係が俺たちのいつもの形。

「あれ？ ここ……」

全部説明し終わった時、望が手元をなぞって首を傾げた。

「ここ、なんか変じゃない？」

「うん、ごめん。そこ描き変えちゃった」

「なんで!？」

「望に見てほしかったから」

「え？」

「俺の思う一番綺麗な景色の中に、望を入れたかった。だから、窓枠の下の部分に望を描き入れた。勝手にごめん」

「う、ええ……いや、なんで……じゃなくて、なんかさあ……」

自分でもびっくりするほど素直な言葉がすらすらと出てきた。望と話しているうちに、覚悟も罪も、ちっぽけなものにしか思えなくなってしまった。

被害者である望はうーん、と眉に皺を寄せて、いやいやと身体をくねくねしていた。そしてわざとらしくニヤリと微笑んだ。

「湊って、私のこと好き過ぎだよね」

「そうかもしれない」

「そ、そうかあ……」

もう今更、望に対して隠すことなんか無い。

正直に自分の望に対する感情を伝える。

いよいよ返す言葉が無くなった望が黙り込む。

俺は、こんなことで照れていけないんだ。

望に聞かなくしゃいけないこと、言わなくしゃいけないことがある。

これはきっと、神様がくれた最後のチャンスだから。

視線を持ち上げて、微妙に目線が合わない望の目を見る。

俺はまた望を傷つける。

でも、そうしないと俺も一緒に傷つけないから。

絶対にするべきではない質問を望に投げかけた。

「眼が見えないって、どういう感覚なんだ」

「……え？」

もう、見逃さない。目を離さない。絶対に。

「運動会で、俺はずっと望を跳ばせることしか考えてなかった。

どうやったらみんなと同じように跳べるか、俺の目線でしか考えてなかった。

望がどういう風を感じてるのかなんて、全く考えてなかった」

唐突に話し始めた俺を、望は黙って見守っていた。

「運動会が終わって初めて、望の気持ちを考えた。そしたら、俺は眼が見えない世界って、どんな世界なのか分からなかった。望の見えないもの、怖いもの、嫌なものが何一つ分からなかった」

俺は目蓋を閉じて考えても、目を開ければ光と色が飛び込んでくる。でも望は違う。何をしても世界の色は変わらない。

絵が描けないだけじゃない、きっと生活のほとんどが満足に出来ない。本当の恐怖を、俺は想像することもできない。

「だから、いま望がどんな世界で生きてるのか、教えて欲しい」
これは最低なお願いだ。

眼が見えなくて苦しんでいる人間に、眼が見えないってどんな感じ？ と質問している。これこそ、許されざる悪行で、断罪されるべき邪悪だ。

でも俺は初めからこうするべきだった。だから、望の絵に色を付けて、望の絵を描き変えた。俺は、望を傷つける勇気を持たなくちゃいけなかった。

そうしないと、先には進めなかった。

「……………」

望は、真っすぐに俺を見ていた。いや見ていないのかもしれない。

きっと、俺のことは視えていない。

全部俺の感想で、予想だ。

望のことなんか何一つ分からない。眼が見えない人間が何を感じているのかなんて、知らない。だから、仕方がない。

そうやって諦めることはやっぱりできなかった。

絵を描かない望との接し方なんて、俺は知らなかった。

だから、知りたい。

望を傷つける勇気を持って、望のことを知りたい。これが、俺の聞きたいことだ。

「じゃあ、眼を閉じて」

「分かった」

望に言われて、立ったまま俺は両目を閉じた。夕焼けの光が消えて、暗い色としか表現できない空間に包まれた。

「私は、本当に弱い人間だから、あの時間は大変だったなあ」

そう言いながら、ゆっくりと声が近づいてくる。

「スパルタだったもん、運動会の時の湊。みんなが休憩してる時も休ませてくれなかったし。毎日足がパンパンで、毎晩湿布貼って寝たもん」

恨みがましく、望が一言一言強調して嫌味を言ってくる。ゆらゆらと、声がする方向が不規則に変わる。俺の周りをグルグルと回っているのだろうか。視界が無いと、目の前で起きていることすら分からない。

「沢山怪我して、沢山痛かったなあ」

ゆっくりと移動されるせいで、望が前後どちらにいいのか分からなくなってしまった。平衡感覚すら失ってしまいそうだ。

「本当に、人生で一番大変だったなあ」

「ごめん。ほんとうに、ごめん」

抑揚少なく告げられる言葉に嘘は無い。

外の音は聞こえず、望の言葉も途切れた。

ただ、風が冷たかった。

そんな冷たい風を遮るように望の体温が俺の胸元に近付いて来た。そして、震える声でこう言った。

「でも、そんなのよりも百倍、湊に迷惑をかけたことが辛かったよ」

「迷惑？」

望外な望の告白に、俺は思わず聞き返した。

「湊は運動得意じゃん。体育の時のバスケットなんて、絵を描くのよりよっぽど才能あると思うもん」
そんなこと、思ったことも無い。別に運動は苦手じゃないけれど、好きでもない。

「それなのに、私のせいで湊の時間を奪って、失敗させて、しなくてもいい怪我をさせてさ。でも湊はぜんぜん嫌なこと言わないだもん。私が湊を追い込んだのに」

「そんなことないッ！」

自責の言葉を止めない望を遮る。そんなことを聞きたくて、俺は眼を閉じているわけじゃない。

「ううん、あるよ。湊、大縄跳びが終わって熱中症で運ばれて行ったじゃん。あの時の湊、信じられないくらい汗かいて、呼吸が荒くて、手も火傷しそうなくらい熱くて、それなのに私の手を

離してくれなかった」

「あんなの、少し頑張り過ぎただけで——」

「——だからだよ。湊は私のそばにいと、頑張り過ぎちゃって、自分のことよりも私を優先しちゃう」

ガツン、と頭を強く殴られたような衝撃。

望と自分、どちらが大切かなんて考えたことも無かった。

そして、直感した。

望の方が大切だ。

「だから、私は湊と一緒にいちゃいけないって思った」

言い返す言葉も無く立ち尽くす俺に、望は独白し続ける。

「何も言わずに離れてごめんなさい。湊は謝ることなんか一つも無いんだよ。だから、湊はもう私のことなんて考えなくていいんだよ」

優しく、まるで俺よりも年上の人間みたいに論じてくる。

「もっと、自分のことを考えて。私じゃなくて自分を一番大切にして。私はもう、十分湊に大切にしてもらったから。もう、会うことは無いけど、ずっとずっと、湊が幸せになるように願ってるから」

まるで、もう既に台本があったかのような言葉がスラスラと出てきた。きっと、望の心の中で答えるんだ。

じゃあ、どうしようもないじゃないか。

動かしようの無い望の気持ちを察して絶望する俺に、望が優しく語り掛けた。

「眼が見えないって、どういうことか教えてあげる」

その言葉と共に、ふわりと柔らかい熱が俺の身体を包んだ。

「眼が見えないとね、大好きな人の体温を何倍もあたたかく感じれるんだよ」

「えっ？」

俺は望に抱きしめられていた。

「ふふっ、あったかい」

望がまるで布団の中にいるような、くすぐったい声を漏らす。

「湊、ありがとう。小学校の間ずっと隣にいてくれて」

ああ、こいつ。別れの挨拶をしているんだ。

そう理解した瞬間、俺の中で何かがするりと解けた。

「じゃあ、俺のことを嫌いになったわけじゃないんだな」

「うん、嫌いなわけではないよ」

なんだ、そうだったのか。今まで勘違いをしていたのか。ホッとすべきなのに、俺の身体はカッと熱を持っていた。

急に腹の奥から、言いたかった言葉が吹き出してきた。

「なら、一緒の中学校に来いよ。鍋木中、一緒に通おう」

これが、俺が言わなきゃいけなかったこと。

「鍋木中には美術部があるんだって。油絵とかデジタルとか、彫刻もあるらしいから眼が見えなくともきっと楽しめる。運動会だと学級旗を作るらしい。同じクラスになったら今回みたいに望が線画を描いて、俺が色を塗るから。他のクラスでも色を塗るくらいなら許してもらえるかもしれない」

望と一緒にの未来、一緒の中学校生活。

それが、俺が描きたい未来だった。

「中学校でもお前の隣にいたい。いっしょにいたい」

「ッ、うう」

俺は、痛いくらいに望を強く抱きしめた。

俺の言葉を深く深く刻み込むために。

「っ、だめ、ダメだよ」

「ダメじゃない！ 俺がしたいんだよ」

「違う、そうじゃない」

「なにも違うない！ 俺は迷惑なんて思ってない！」

「そうじゃないんだよ！」

初めて聞く望の悲痛な叫び声に、気圧されて腕を緩める。

「私が、耐えられないんだよ……」

続いた声は、酷く小さかった。

何かを諦めたように、望の喉から言葉が溢れだした。

「私は小さい時から、いつか眼が見えなくなるって知ってたの。

だから、絵を描き始めた。綺麗だなんて思った景色とか、忘れたくない思い出を絵として残したかった。そうすれば、眼が見えなくなっても寂しくないかと思って。私が眼が見えた証を遺したかった。

私は、それで十分だった。少しずつ視力が落ちていっても絵に残してるから大丈夫だって思ってた。そして、湊が来た。

一人で必死になってた私の隣で、ぐちゃぐちゃな絵を描く湊は、本当に楽しそうだった。だから、私もだんだん楽しくなってきた調子に乗っちゃった。

最初に、言うべきだった。私は絵が描けなくなる時が来るって。でもそうしたら湊が隣に来てくれなくなると言えなかった。

そして、いざ絵が描けなくなるときは自分でも信じられないくらい怖くなった。湊が悪いんだよ。一人だったらあんな気持ちにならなかったのに。もう絵が描けないことよりも、湊が離れていく未来のほうが寂しくて、もっともっと怖くなった」

俺の知らない、望の生きてきた時間の話。

淡々と話しているけれど、言葉の中に望の感情が溢れ返っている。

目を閉じていても分かる。

望がどれだけのものを諦めてきたのか。

「だけど、湊は一緒にいてくれた。最初は本当に嬉しかった。安心した。寂しい時間はもう来ないんだって、思ってた。

でも、違った。眼が見えない、絵が描けない私は、湊が楽しいかなんて分からない。湊が何を思ってるのか分からなくなった。逆に私の世話をする時間が増えて、負担になってることしか分からなくなった。

言葉にしないで、湊は私のことを邪魔だと思ってるんじゃないか、もう私のそばにいないのは同情なんじゃないか、いつ私は見捨てられるんだろう。そんなことしか考えられなくなった。湊にいつか嫌われる。私はそのいつかが来るのが怖くて仕方ないの。湊に嫌われるのが、耐えられないの。

だから、湊が私のことを嫌いじゃないうちに、楽しい思い出の方が多い間に離れるって決めたの。

これは、私のわがままだから。だから、お願い。私のことを好きなまま思い出になって」

俺のことを抱きしめていたはずの両手は背中から外された。

いつの間にか、俺の胸を掴んで縋るように握られていた。

「そうすれば、私はこれから怖くないからさ」

望は声も、手も、心も震えていた。自分のことを話している途中で何度も、望は離れようとしていた。でも、離れなかった。離れられなかった。

今も伝わってくる望の熱が、望が本当に怖がっているものを教えてくれる。

「全部教えてくれて、ありがとう」

「うん、だから」

「でも、それは嘘だ」

「……え」

眼が見えない世界も、望がなんで俺から離れたのかも、今なんで俺から離れられないのかも、何に怖がっているのかも、全部分かった。

だから。

俺は、目を開けた。

視界に飛び込んできたのは、大切な人の真っ白に光を溜めた綺麗な瞳。

望はやっぱ泣いていた。

「寂しいんだろ。望、言ってたじゃん。色が無いと、眼が見えないと、寂しいって。でも俺といったら寂しく無いって。じゃあ、そのわがままは聞けない」

「違う、寂しいのが嫌なんじゃないってば！ 湊に嫌われるのが怖いんだよ！」

「嫌わない。嫌われるのが怖いんじゃない。嫌われたらもう会えなくなるから怖いんだ」

「ッ……!?!」

望が俺を見上げて、視線がぶつかり合う。

俺は立場が入れ替わったように、望の本心を引っ張り出す。

俺が俺より望が大切だと知らなかったように。

望も、自分のことを知らない。

「結局、望は一人になるのが怖いんだよ」

「なんでそんなこと、決めつけるの……。私は、違うって言ってるじゃん」

「俺も同じだから」

「おなじ？」

「俺も、望に嫌われたと思って会えなくなって、寂しかったから」

絵が描けなくなっただけ、そして運動会の後のことを思い出す。

何をして、何を描いても、ずっとぼっかり穴が開いていた。

それが、寂しさだった。

「この半年間、望と一緒にいられなかった半年間、ずっと寂しかったよ」

望の気持ちにばかり気をとられて、自分のことなんてまるで分かっていなかった。

でも、今ようやく分かった。

望に分からされた。

「寂しいって気持ちは、嫌われることよりも苦しかった」

俺は望に会えなくて寂しくて仕方なかったんだ。

「だから、俺は嫌われてもいいから今日ここに来たんだよ。望を傷つけることより、先生に怒られることより、望と会えなくなる方が嫌なんだよ」

俺は、望の知らない、望の本心を知っている。

自分から離れた望とは違って、俺は望から嫌われたと思っていた。

だから、望から嫌われた時にどんな気持ちになるのかを知っている。

あの苦しみを痛いほど知っている。

それでも、嫌われたことよりも会えないことの方が何倍も辛かった。

それこそ、百倍も苦しかった。

「望は俺と似てるよ。絵を描くのが好きなのも、綺麗だと思う景色も、相手のことばかり考えてるのも。望と俺は同じだから分かるんだよ」

吐息さえ分かる距離で、俺は望の瞳の奥に語り掛ける。

「どうせお前は思い出の中で俺に会うんだろ」

これも知ってる。

もう会わないって決めても、もう考えないって決めても、夢に出てきたから。

「なら、いいじゃん。一緒にいようよ。違う中学とか、眼が見えないとか、絵が描けないとか、そんなのどうでもいいよ」

眼が見えなくても、絵を描いてしまうように。会う理由がなくても、一緒にいたいと思う。

「寂しくならないように、一緒にいよう。嫌いになっても、迷惑かけても、ボロボロになっても、

一緒にいる方が幸せだと思っから」

それを、俺たちは望んでるはずだから。

「俺が見た綺麗な景色を言葉で伝えるよ。それでも足りないなら今日みたいに絵を描いて、なぜりながら教える。俺の気持ち分らないなら、一緒にいる間はずっと手を繋いでいれればいい。怖くて仕方なくなったらまた抱きしめてくれて構わない」

俺に出来ることは全てやる。

見えないのなら、俺の見える世界を通して見てもらえばいい。

俺のことが見えないのなら、熱で伝えればいい。

一緒にいる方法なんて、いくらでもあった。

「俺のことを、諦めないでくれ。俺も、精一杯頑張ってみるから」

こんなの、間違っているとされるんだらう。

執着とか依存とか、そういう不健全な関係だと思っ。

きっと二人とも一人で立てなくなってしまう。

でも、それでいい。

一度誰かとの幸せを知ったのなら、その幸せを守るために全力を尽くすべきだ。

相手がどう思っかなんて、分からないんだから。せめて俺くらいは最後まで、望のことを諦

めないでいようと思っ。

望がない未来は、俺にはもう描けないから。

「泣くなよ」

「そっちこそ、泣いてるくせに」

お互いの頬に流れる涙を拭い合う。

性別が違って、見える世界が違って、これからは人生の進む先も違う。

でも、手を繋ぎ続けければ、怖くない。

二人の生きている世界は同じだから。

「これからも、ずっと一緒にいるからさ」

「ええ、なんかキメ過ぎてて、嘘クサイなあ」

この期に及んで、まだ望は照れ隠しをしてくる。きっとこれからも俺たちの関係なんて変わらない。

俺たちの行く末なんて、誰も知らない。

ただ、諦めないことしか出来ないから。

Noを否定し続けた先に、太陽が昇るのだと、少年は信じていた。

「まあ、熱中症になっても離さなかったから。少しは信じて欲しいかな」

「ちょっと怖いんだけど。でも、それなら、私も——」

少女が手を少年の背中に回す。

思い切り、全身で少年のことを掴まえる。

それから少女は満足そうにこう言った。

「——絶対離してあげないから」

少女は、この日初めて笑って見せた。

大粒の涙を流しながら、ボロボロの笑顔。

その笑顔が少年の瞳の奥で輝いていた。

藍色の空の下、思い出の詰まった机のキャンパスの上。

少年が彩った鮮やかなキャンパスに溶けた少女の色は、何よりも濃い赤色。

それは、無彩色の世界を照らす太陽の色だった。

Sun Girl N on color Table Campus—hugged her love.

旭望は、色彩のキャンパスの上で大好きな人を抱きしめた。

(自然科学教育部修士二年)

選考を終えて

東光原文学賞 総評

選考委員長 濱田 明

東光原文学賞は今年度で第十八回を迎えました。応募作品の総数は十四作品と昨年と比べると六作品少なくなりましたが、一次審査を経た八作品について、四回目の審査員となる熊本日日新聞社の農孝生先生、二回目の本学の日高愛子先生、そして三回目の私の三名で選考を行いました。選考にあたって、審査員は作者の学部や学年、ペンネームなど知ることなく候補作品を読みます。審査員があらかじめ準備した評価では、一次審査を経た八作品のうち五作品について複数の審査員が賞の候補とし、また各審査員が一位に推薦する作品も異なるなど、当初審査員の意見は分かれていました。文学作品にはテーマ、ストーリー、登場人物、構成、文章表現など、評価の観点も複数あり、それらを一律に評価することはできません。審査員はひとつひとつの作品について丁寧に意見を交換し、合意に達しました。

それでは、選出した受賞作品を紹介いたします。

学長賞を受賞した『郷愁』は、ヨーロッパの都市で音楽家を目指しながらも挫折し孤独に苦しむ若者が生きる力を取り戻すまでを描いた作品です。もっとも主人公は現実的な世界で主体的に

行動し困難を乗り越えるのではなく、懐かしい老人の訪問を受け、その夜に見た夢の中であつて好意を寄せていた女性を思い、病気の母の見舞いに久しぶりに帰郷した際に、その女性からの手紙を読みます。そして彼女の言葉を胸に故郷の幻想的な自然の中を歩みます。

都市や故郷の空間、既にこの世を去っていた老人との会話、不思議な夢、女性からの手紙などを巧みに織り交ぜ、作者は魅力的な小説世界を構築することに成功しています。審査員全員から安定した筆致とフィクションとしての作品の完成度が高く評価され、学長賞に選出となりました。附属図書館長賞には『島千鈴なる画人の話（落丁あり）』『どうぞこの手を取ってください』

『Sun Girl noNcolor Table Campus—』の三作品が選ばれました。

『島千鈴なる画人の話（落丁あり）』は、美術部の男子部員である主人公が、黒髪北キャンパスの建物を思わせる旧学舎の中で、物の怪の女にその白い背中に絵を描くように頼まれます。主人公が絵を描き進める間に、他の部員とは距離を置くけれど主人公とは親しくする魅力的な女子学生と交わす会話や、彼女に近づこうとする邪な同級生の思惑が読者を引き込みます。旧学舎での美術部の合宿で女子学生をめぐる騒動の後、主人公が描き続けた絵が完成します。主人公の心理も、物の怪の女や女子学生との会話によって単調な語りとなることなく表現されており、現実と幻想が巧みに交差する作品となっています。審査員から、詩的で幻想的な世界を構築した筆力が生んだ意欲的な作品として高く評価され、受賞作となりました。

『どうぞこの手を取ってください』は、若者の主人公が中心となる応募作品が多い中、「僕」と父、母、弟をめぐる家族小説です。大学生の「僕」が帰省し、家族と再会します。子供に「母

さん」ではなく、「麻里子さん」と名前と呼ぶことを求める母親、「僕」の進路を頭ごなしに否定する父親、心優しいけれど手足が不自由な弟と、家族のそれぞれが生きづらさをかかえています。物語が進むにつれ、遊び歩いていると思われた母親の孤独な姿、浮気を疑った父親の意外な姿など、「僕」は家族の予想外の姿に直面します。しかし、それらは家族の崩壊ではなく、新しい家族の関係が始まる契機となりました。静かに展開するストーリーの中で、主人公が見つめるせつなくも優しく家族の物語は、心地よい読後感をもたらすと審査員から好評を得て受賞作となりました。

附属図書館長賞の三作目『Sun Girl noNcolor Table Campus』は、小学校の卒業式の三日後、男の子が教室の机に描かれた線にクレヨンを塗り、絵を完成させようとする場面からはじまります。線を描いた女の子は幼いころから絵の才能に恵まれ、男の子は彼女を「師匠」と呼び一緒に絵を描いていましたが、彼女は視力を失うにつれ、男の子から離れて行きます。男の子が彼女との思い出にと絵を塗り終えた後に、教室に女の子が現れます。そこで二人が互いに抱いていた思い明かされます。ほとぼしるようにあふれる二人の純粹でストレートな感情の表現が読み手を引きつける力があると審査員の評価が一致し、受賞作となりました。

以上の受賞作品の投稿者の皆さんには、素晴らしい作品を寄せて頂いたことに対して、感謝とお礼を申し上げます。

また今回、残念ながら受賞に至りませんでした。一次審査を通過した作品名も紹介しておきます。

失敗を買う店を訪れる妖怪たちが奇妙な会話を繰り広げる『失敗屋』、傷だらけの宇宙人を助けた男の子が予想外の運命を辿る『鉛の螺旋、惑星の陰』、就職活動に取り組む女子学生の心の機微を描く『私の輪郭がわかるまで』、これらの作品に対して審査員からそれぞれの作品の魅力を評価するコメントがありました。今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員に感謝いたします。

私が生時代に愛読していた作家が、作家修行時代を振り返り、「眼高手低」、批評する力はあっても自分の技量が低い状態が続いたと回想していました。同時代の作家たちの作品を読んでも色々なことに気づき感服することはないものの、思うように書けず自分の作品に納得できないことが多かったそうです。この言葉は、他人の姿勢については否定的な意味合いで用いられることも多いようですが、自己に対してその意識を持ち続けるなら、確かな批評眼で理想の作品を目指し、自らの力量を自覚し、努力を続けることにつながるとでしょう。

学長賞一作品と附属図書館長賞三作品は『第十八回熊本大学東光原作品集』として刊行されます。今回作品を応募し、残念ながら受賞されなかった方も、同じように、「眼高手低」との思いをされるかもしれません。しかし、理想を高くもち、作品を書き続けることによりすぐれた作品が生まれる日も来ると信じます。また今回受賞されたみなさんも、受賞を励みとして書き手としての力を高め、さらにすぐれた作品を書き続けて頂ければと願います。

そして、同じキャンパスで学生生活を送っている熊本大学の学生のみなさんがこの作品集を手にとり、作品から刺激を受け、同じようにそれぞれの生きる道を進んで頂ければと願います。

今回受賞された皆さん、そして今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員にあらためてお礼申し上げます。そして最後となりましたが、この度の東光原文学賞の企画運営にご尽力いただきました高野博嘉附属図書館長をはじめ附属図書館の皆様方、お忙しい中、選考委員をおつとめいただいた農孝生先生、日高愛子先生、そして東光原文学賞の実施にご支援をいただいた本学の小川久雄学長、水元豊文理事・副学長ほか、ご関係の皆様方に深く御礼を申し上げます。

● 濱田 明（はまた・あきら）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）教授。専門は十六世紀フランス文学。
主な近著として『アイラウウ漱石先生 漱石探求ガイドブック』（集広舎、二〇二二年、共著）、「十六世紀プロテスタント詩人にとっての生と死」（荻野葦平／トビアス・パウアー編『生と死をめぐるディスクール』九州大学出版会、二〇二〇年）、「ドーニエの『書簡集』」（北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集編集委員会編『コレスポンダンス』朝日出版社、二〇二〇年）などがある。

語りが生み出す世界

選考委員 日高 愛子

第十八回東光原文学賞には十四篇の応募がありました。昨年度と比べると応募総数は減少しましたが、文系・理系を問わず、さまざまな学部・大学院から作品が寄せられ、そのなかには学部四年生や大学院博士前期課程二年生によるものも多く見られました。研究や論文執筆などで多忙な時期にあっても創作に時間と情熱を注いだその姿勢に、まず深く敬意を表します。

今年度は、応募作品十四篇のうち八篇が二次選考に進みました。例年どおり、大学生の日常生活を描く作品や家族の在り方を見つめ直す作品に加え、宇宙人が登場するSF作品や妖怪を扱った作品など、題材は多岐にわたり、バリエーションに富んだ内容でした。二次選考作品のなかで特に印象に残ったのは、小説の序盤や末尾に語り手を配置する、いわゆる枠物語形式の作品が複数見られたことです。語りの構造は、物語全体を支える基盤となります。入れ子構造となる場合には、外側の物語が内側の物語と結びつき、何らかの意味や効果を生み出してこそ、作品としての面白味が出ます。語り手の外枠となる物語と内側の物語との関係やその意図が読み取りにくい作品が見られたことが惜しまれます。語り手が何を語るために存在するのかを意識し、メインプ

ロットとサブプロットの関係を捉え直して再構成することで、より魅力的な作品になるでしょう。学長賞となった「郷愁」は、音楽学校に通う青年が故郷を離れ、愛する女性を失った絶望の底から、再び希望を見出すまでの過程を描いた作品です。絶望を抱え、ピアノから遠ざかっていた主人公が、〈夢〉のなかで愛しい女性と再会し、〈郷里〉に戻り病床に臥す母と向き合うことで、再び生きる希望を取り戻していきます。〈夢〉と〈郷里〉という二つの異郷空間が、主人公の内面を照らし合い、物語に奥行きを与えています。また、主人公を異郷へと導く老人の存在が、夢幻能のような幻想的な雰囲気をもたらし、美しい一篇でした。

附属図書館賞には、「島千鈴なる画人の話（落丁あり）」「Sun Girl noNcolor Table Campus—」
「どうぞこの手を取ってください」の三作品が選ばれました。「島千鈴なる画人の話（落丁あり）」は、煉瓦造りの古い学舎を舞台とし、物の怪の女の背に絵を描くうちに魔の手に落ちていくという怪異譚です。大学で美術部に所属する主人公は、女の背に絵を描き続けるうち、次第に幻想の世界へと引き込まれていき、女の魔を描き出すことでその存在を征服したいという衝動に突き動かされます。白昼夢のなかで主人公は女の首筋をペインティングナイフで抉りますが、やがて幻想から醒めると、その真っ赤な血潮は、赤い着物を纏った女の絵として描き上げられていました。妖艶さと詩的な幻想性を併せ持つ世界観が強く印象に残る作品でした。

一方、「Sun Girl noNcolor Table Campus—」は、絵を媒介とした少年と少女の心の交流を描いた作品でした。主人公の少年は、卒業して間もない小学校に忍び込み、教室の窓際にある机の落書きにクレヨンで色を重ねながら、小学時代の思い出を辿っていきます。彼の心に深く刻ま

れていたのは、その落書きの主であり、次第に視力を失っていった一人の少女との日々でした。二人は絵を通して互いにかけてあげがえない存在となっていくますが、光を失いつつある現実のなかで、相手を思いやるが故に距離を置くようになります。思い出に彩られた机の落書きを介して、再び手を取り合い、新たな世界へ踏み出そうとする二人の姿が、爽やかな余韻を残す青春小説でした。

「どうぞこの手を取ってください」は、家族とは何かを問い直し、従来の枠組みに囚われない新たな家族の在り方を模索する物語です。大学生である「僕」は、久しぶりに実家へ戻り、〈母親〉という役割をうまく果たせず逃避する母と、威厳ある〈父親〉を演じ続けることに疲弊した父の姿を目の当たりにします。そして、弟が歩けなくなったのも、崩れゆく家族を繋ぎとめようとしたためだと知ります。家族がそれぞれに課された〈役割〉から解放され、互いを見つめ直しながら自分らしい生き方を模索する過程は、家族を固定的なものではなく流動的な関係として捉え直そうとするものであり、示唆的でした。

このほかにも、妖怪たちとの会話劇によって物語が展開される『失敗屋』や、宇宙人との遭遇をきっかけに奇妙な運命を辿ることとなる『鉛の螺旋、惑星の陰』など、受賞には至らなかったものの、ユニークな作品が見られました。今後、さらなる創作へと繋がっていくことを願っています。

●日高 愛子（ひだか・あいこ）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）准教授。専門は日本古典文学。

主な近著として『飛鳥井家歌学の形成と展開』（勉誠出版、二〇二二年）、『和学知辺草 翻刻・注釈・現代語訳』（文学通信、二〇二三年、共編）、『小城鍋島文庫の古典籍たち 書物は語る』（文学通信、二〇二五年、共著）などがある。

小説の肌触り

選考委員 農 孝生

小説とは〈何かざらざらしたもの〉である。『マークスの山』などで知られる作家の高村薫さんが言っている。

〈ざらざら〉とは何か。さらに具体的に説明するのはなかなか難しいようだが、それこそが読み手を引き寄せる小説の〈魔力の本体〉であり、高村さんにとって〈ある種の違和感〉のようなものだという。

ざらざらを感じさせる作品として高村さんが例に挙げるのは、森鷗外の『阿部一族』、川端康成の『山の音』、武田泰淳の『ひかりごけ』などだ。

読み手の胸の奥にまで入り込み、紙ヤスリでなでていくような肌触り。深く、長い刻印を残せるかどうか、作者の腕の見せどころであり、小説の勘所だということなのだろう。もちろんだれにでもできることではないに違いない。

今回の東光原文学賞の受賞作の中にも、そこに描かれた場面や会話、ストーリー、文体などに、ざらざらした感触を与える部分が、いくらかあったように思われる。

学長賞に選ばれた『郷愁』。孤独で、周囲との関わりを断ってしまった音大生の主人公が、古里への帰郷をきっかけにして、心を寄せながら音信不通になっていく女性とのつながりや、自身自身の生きる力を取り戻していく様子が描かれている。舞台は西洋を思わせ、時代は分らない。現実の世界と夢の世界を境目なく効果的につなげることで、その場にはいない人たちと主人公が時空を超えて再会することを可能にした。自然の風景や、幻想的な情景の描写が美しく、文体が安定していることも評価された。

附属図書館長賞の『島千鈴なる画人の話（落丁あり）』。絵を学んでいる主人公が、大学の赤煉瓦造りの旧学舎で面妖な女と遭遇し、その女は背中に自分の絵を描いてほしいと求めてくる。女は主人公の心の中を、まるで文章で起こしたように言い当てることができた。主人公、幽霊じみた女、と交互に語り手が変わっていくことで、立体感のある構成となった。赤煉瓦の学舎の怪しい世界と、現実のキャンパスを歩き来する不思議な空間をつくり上げたと言える。

同じく附属図書館長賞の『どうぞこの手を取ってください』。大学生の主人公には、中学一年生のときに突然歩けなくなった弟がいる。実家に帰省した主人公が、その理由を探っていくうちに、家族四人の素顔が明かされていく。次に何が起こるか、読み手に想像させる構成で、父、母、自分、弟のそれぞれが抱える屈託や生きづらさを浮かび上がらせた。家族が無理につきなぎ留められている必要はない、バラバラになってもいいではないかという結末も、前向きに描かれて開放的な読後感をもたらした。

『Sun Girl noNcolor Table Campus—』サニ 絵を描くことを通じて親友になった小学生の

男女のストーリーだ。少女は徐々に目が見えなくなる病気で、いつしか少年を拒絶するようになる。作品の終盤、少年から離れた理由を少女が本音で語っていくところに、読み手を引き込む力があった。「目が見えないってどういうことか教えてあげる」と言いながら、少女が少年を抱きしめる場面などが魅力的で、二人の純粋さに素直に胸を打たれた。

受賞した四作とも、高い筆力と構成力をもって書かれていたと感じる。これを機に、さらに魅力ある創作が生み出されることに期待したい。

● 農孝生（のう・こうせい）

熊本日日新聞論説副委員長。社説、コラム「新生面」「黙鼓子」などを担当。

新聞連載記事に「公共事業と山村」（一九九七年）、「再考 水俣病の医学」（二〇〇一年）、「否—ある水俣病闘争」（二〇〇四年）、「命ある場所」（二〇〇二—〇四年）など。

第十八回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇二六年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

